

INTRO 2013
The Society of Economics
TAKASAKI CITY UNIVERSITY of ECONOMICS

高崎経済大学 経済学会

INTRO 2013

高崎経済大学 経済学会

2013

INTRO

The Society of Economics
TAKASAKI CITY UNIVERSITY of ECONOMICS

伊藤宣広先生



Q 伊藤先生はどういった研究をなさっているのでしょうか？

伊藤

僕は19～20世紀におけるイギリスの経済学を研究しています。経済学史が専門です。特にケンブリッジ学派のことをやっています。

イギリスにアルフレッド・マーシャルという経済学者がいて、その弟子筋にあたる何人かの経済学者たちが現代経済学の構築あたって非常に大きな仕事をしました。最終的にケインズに至る流れですね。ケンブリッジ学派というのはそのグループの名前です。今のミクロ経済学・マクロ経済学の考え方の重要な部分がそこで作られました。

Q では、現代経済学はケンブリッジ学派を基礎として成り立っていると言っても過言ではない、と？

伊藤

まあ、そうですね、ちょっと前までは（笑）。第二次大戦後しばらくはケインズ経済学の黄金時代でした。1970年代まではアカデミズムの世界でもケンブリッジ学派の理論が論じられていたんですが、1970年代あたりからアメリカでいわゆるケインズ政策がうまくいかなくなって、そこから政策的なレベルではケインズは人気がなくなりました。

あとこれはちょっと専門的な話になりますが、マクロ経済学にミクロ経済学的な基礎を与えるべきだという考えが出てきて、それが主流派を占めるようになりました。ケインズという人はマクロ経済学とミクロ経済学は根本的に別だと考えた人です。個々人は合理的に行動している（ミクロの領域）。けれども、それら合理的な諸個人の行動を足しあわせても全体（マクロの領域）として合理的な結果にはならない、と。例えば将来に備えてお金をためる、というのは個人のレベルでは賢明な行為ですが、みんながそれをやるとお金がまわらなくなって経済が停滞してしまう。こういうのを合成の誤謬と言います。でも今はミクロ経済学的な基礎を持たないマクロ経済学は経済学にあらず、という考えが主流派になっていて、その二つの領域の違いを基礎に据えたケインズの経済学はあまり取り上げられないという事情があります。

とはいえ、学部のマクロ経済学ではIS-LM分析なんかがいまでも教えられていますし、財政政策・金融政策を議論するときにもケインズ経済学の枠組みはまだ使

経済学は合理的で いいかげんな 人間という存在に迫る

われています。またアメリカの金融危機以降はケインズ経済学の再評価の機運が高まっています。ミクロ的には投機は価格調整を促進する合理的な行為ですから、投機が社会の（つまりはマクロの）不安定化をまねく、という批判はケインズ的な合成の誤謬を認めてはじめて言えることです。

Q 経済学のおもしろさというとなんでしょうか？

伊藤 一言で言うとなんか人間を扱うところでしょうか。いろんな経済法則がありますが、その基礎になるのは人間です。人間というのは実際には教科書に書いてあるようには行動しないわけです。すごくよく考えて日々の選択を行うこともあれば、なんとなく勢いでやってしまうこともある。明日テストで勉強しなきゃならないのに酒を飲んでしまったとか（笑）。人間には合理的なところもあるけど、ときどきいい加減で、そういう人間の複雑なところになんとか迫ろうとするところがおもしろいんですね。

自然科学だと仮説を立てて実験をして実証するという研究スタイルがありますが、経済学ではそれが難しい。分野によっては、たとえば計量経済学なんかはそういうことができる部分もあるんですけど、人間があいだに入ってくるから、一部の自然科学のように誰がやっても同じ結果が導かれるほどの精度の高い実験はできないんです。景気が悪い時に増税しろという人もいれば、減税しろという人もいます。増税にしても消費税とか法人税とか所得税とかいろいろ選択肢がある。で、その結果、個人や企業がどう行動を変えるか正確には予測できないので、その効果については実際にはやってみないと分からない面もあります。

Q すると経済学には限界があるということなんですか？

伊藤 もちろん限界はあって、だからこそ歴史を勉強する意味があるかなと思っています。僕も半分は歴史の勉強をしているんですね。経済学も日々研究が進められていて、確かに少しずつ進歩してきています。でも、今も昔もそんなに変わらないこともあって、過去の事例が現在の問題を考える上でヒントになる場合も多い。だから歴史も半分勉強しながら、そのことを現代の経済学をやっている

ベターな選択肢を 考えるために 経済学を学んで欲しい



先生たちに紹介していくというところに、僕自身がやっていることの意味もあるかなと思っています。マーシャルという人は、経済学は理論だけでもダメだ。歴史だけでもダメだ。その両者のバランスが大事だ、と言っていて、その主張に僕はすごく共感を覚えました。

Q 伊藤先生ご自身はもともと歴史の勉強をしたかったとお伺いしたのですが、経済学を始められたきっかけは何だったのでしょうか？

伊藤

大学の経済学部に入ったきっかけということでもいいですかね？

はい。

伊藤

僕は京都大学の経済学部だったんですけども、高校生の時にいるんな大学案内を見ていたら、京大の経済学部は「パラダイス経済」と言われていて、日本一単位がとりやすいとか、空から単位が降ってくるみたいなことを聞いたんです（一同爆笑）。確かに歴史をやりたいという気持ちもあったんですが、文学部に行くほどの度胸はなかったんですよ。だからなんとなく経済学部にしたというか、あの経済学部のあやしげな魅力に惹かれたというか……。

Q でも、いまは経済学を教えていらっしゃるわけですよね？

伊藤

そうですね、何かの縁ですかね（笑）。大学に入学した時、経済学の教科書を買って読んでみたんですが、全然面白くない。ジョンがリングを三個買いましたとか、そんな話。もうナメてるのか、と（笑）。これは失敗した、と思ったんですけど、途中から面白くなってきたんです。

Q 途中というのはどの辺りからですか？



伊藤

経済学の古典を読んだり歴史を勉強するようになってからですね。この時代の方がこんなことを考えていたのか、という驚きがあったんですね。あとケインズはやっぱり面白かったです。最初は分からない部分もいっぱいありましたが、手探りで読み進めながら「これはすごい本なんだ」と少しずつ実感してって、なんというか、迫力を感じたんですね。

経済学は面白いんです。ただちょっと人を選ぶところはあると思います。というのも、面白いと思えるところにいくまで時間がかかるんですね。そのあたりを学生の皆さんには承知しておいてもらえるといいかもしれません。

Q では学生に薦めたい専門書はありますか？

伊藤

そうですね、マーシャルを追悼する文章の中でケインズが、優れた経済学者の条件とは、何か一つの並外れて高度な資質を備えていることよりも、数学・歴史・政治・哲学・言語など色んなことを知っていることである、という趣旨のことを言っています。これはどういうことかと言えば、経済学の教科書だけを読んで、経済学のことは知らない、というのでは本当に経済学を知ることにはならない、ということだと思います。だから、経済学の分野にこだわらず、色んなジャンルの本を幅広く読んでもらえるという教師としてうれしいですね。

Q 話は変わりますが、今のいきすぎた「市場原理主義」を、古典の立場から見るとどんなことが言えますか？

伊藤

まず「市場原理主義」という言葉について聞きたいのだけれど、この言葉から何をイメージしますか？

Q 市場でみんなが自由に購買競争をして、政府は政策レベルで経済に対してあまり干渉しないというイメージですかね。

伊藤

「自由放任」と「市場原理主義」は一緒というイメージですね。アダム・



スミス以来あったのは、市場に任せるべきことと政府がやるべきこととの間に線引きをするという考えです。過去の経済学者たちを見ていると、市場礼讃というよりはむしろ政府の腐敗に対する不満や不信感が強い。たとえばアダム・スミスの時代では、政府と東インド会社との癒着が痛烈に批判されていました。確かにアダム・スミスは市場を肯定していますが、全部を市場に委ねることじゃないんです。だから「市場原理主義」——この言葉自体とても曖昧ですけど——のイメージだけでスミスを見るのは不正確なんですね。

20世紀になると、それこそケインズなどは「自由放任は死んだ」と言い、むしろ市場ではうまく処理できないケースをどう調整するかという発想になっていく。それは今とつながる部分もあって、市場の失敗への対処が経済学の課題の一つとなっています。市場は適切に機能すれば効率的な資源配分をもたらしてくれるけれども、放っておけばうまく機能するとは限らない。市場を上手に機能させるためにどう制度をデザインするか、というところに政府の役割がでてくる。これは割と一般的な考え方で、そういう意味では「市場は常に正しい」というのは極論だと思います。

Q 最後に経済学がこうなしてほしいとか希望とかってありますか？

伊藤

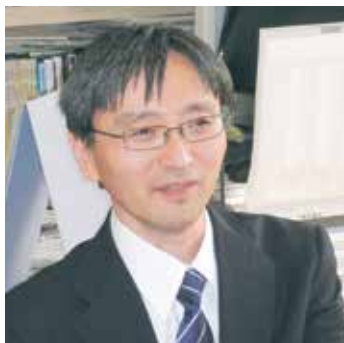
経済学者は、特に政策をめぐるっては、それぞれの立場に応じて全然違うことを主張することがありますよね。じゃあどれを信じたらいいんだ、というのが皆さんの正直な感想だと思います。世界的な不況の中で、経済学はなかなか有効な手をうてないでいます。簡単な解決法はないかもしれませんが、それでも考え方の枠組みを勉強することで、何が争点になっているのかが理解できるようになります。トレードオフという言葉が示すように、どんな選択をしたとしても何かしらの痛みは避けられませんが、そんな中で、よりベターな選択を考えていくためにも、多くの人に経済学を勉強して欲しいですね。



伊藤宣広

高崎経済大学経済学部経済学科准教授。
2005年京都大学大学院博士後期課程修了。
立教大学助手・助教を経て2008年本学に着任。

鈴木 淳 先生



Q ご自身の専攻テーマについて教えてください。

鈴木

授業科目は生産管理と経営科学を担当しています。大学の学部時代は化学を専攻していましたが、大学院では経営工学を専攻しました。その中に生産管理と経営科学が含まれていたのです。皆さんからは理系の分野に見えるかもしれませんが、経営工学は理系と文系が半々になった分野だと私は思っています。その中で私の研究テーマは設備配置や工場計画、工場立地などです。

Q なぜそのテーマにしたのですか？

鈴木

もともと、小学校の頃から理科と社会が好きでした。経営工学は、企業経営や組織の運営を工学的な視点で問題解決していくという、理系と社会科学を兼ね備えた専門分野なんです。

Q 先生はどのような学生でしたか？

鈴木

大学院では、コンピューターなどを使って化学プラントの設備の最適な配置を求めるといった研究をしました。

学部は化学分野の出身ですが、卒業論文では、化学の実験というよりも分子構造や結晶構造をコンピューターグラフィックスで描くというような、どちらかという、コンピューターに向かっていた感じでした。具体的には、空間のどの位置に何が配置されているのかを数学的に表現したり、コンピューターで表現したり解いたりするといった内容でした。

あと、学部生時代は群馬大学に通っていたので、群馬については結構詳しいつもりですよ。

Q 経営工学は文系と理系が半々になった分野、理系と社会科学を兼ね備えた分野、とのことですが、これについて詳しく教えてください。

経済・経営がわかり 技術も知る そんな人材が求められている

鈴木 工場では、様々な物質がラインを通り、製品となって出ていきます。機械や配管、通路が長いと、工場自体のコストもかさみますし、製品ができるのに時間もかかります。工場側としては、できるだけ製品をつくる時間を短くしたい。なので、いろんな設備をどのように配置するのかは重要です。工場の設備配置などは、以前は設備専門の技術者が考えていました。しかし、工場が複雑化し、多品種少量生産という考え方が出てくると、頭の中で考えた単純なラインでは生産が追いつかなくなってきました。工場の経営、お金の話に深く関わってくる以上、文系の、経済や経営の話抜きにできなくなってきたのです。

ただ、化学そのものと経済には、直接的な結びつきはありません。しかし、技術を使って製品を作ろうとした場合、装置の大きさ、長さや作る時間にかかるコストなどが重要になってくるため、それをどう削減していくかは経済的な考え方が必要になります。

いずれにしても、文系の人にも技術の話に興味を持って欲しいですね。最近、韓国などのメーカーが製造している「スマートテレビ」が家電量販店で目立つところに置かれています。ただのテレビよりも、こういったテレビ視聴にとどまらないテレビを消費者は欲しているようです。韓国のメーカーはそういう消費者ニーズを捉える点ではいまの日本より一歩リードしています。日本のメーカーが頑張っていないわけではありませんよ。しかし、どういう製品を作ればいいかという経営的、戦略的なところが韓国に比べまだ弱い面があります。物を売るという事考えた際、これからはどういった製品を売るか、そしてそれをどうやって生産するかという双方向から考えていかなくてはなりません。経済や経営を学ぶ人には、技術の話に興味、関心を持つことが大切だと思います。

Q 私たちは文系の学生なので、理系の話というのにピンとこなかったのですが、お話を聞いていて文系と理系は意外と接点が多い、つまり融合というのが可能ではないか、と感じました。

鈴木 そうですね。特に経営分野は工学の話と似通った点が多いです。技術者でかつ経営のこともわかる、もしくは会社の経営をしながら技術、生産のノウハウがわかる、という人もいます。例えば故・スティーブ・ジョブズあたりでしょうか。ただ大学というカテゴリーで見ると生産管理や経営科学に関する学科はあ



るのですが、例えば「工学部経営工学科」のように、どうしても工学の枠から抜け出し切れない学問であることは否めません。いまの経営工学は文系と理系が融合しているようなしていないような、そんな気がします。

Q 生産管理に関してですが、現在、中国を中心としてアジアに生産拠点を移している企業が多々あります。そのことによるメリットとデメリットを教えてください。

鈴木

今は、中国というより、インドネシアなど他国に拠点を移している企業が多くなっています。

例えば海外に生産拠点を移している大企業の代表例が、トヨタ自動車です。トヨタは現在中国からインドネシアと、徐々に生産拠点を移しています。しかし、トヨタの本拠地である愛知県豊田市の周りには2次請け、3次請けなどトヨタの協力企業が多くあります。一部はインドネシアなどの企業を買収して、生産拠点をトヨタとともに移したりしていますが、中には廃業してしまう企業もあります。

画一化された単純作業を行うのなら、安い賃金で大量動員できる方が企業にとっては有利です。企業の海外移転には人件費やインフラコストなどの低減や流通面など様々なメリットがありますが、大企業の協力企業は厳しい立場に立たされます。

ただ、日本は地震や台風などの自然災害が多いですね。日本の場合、明日地震が来ない、という保証はできません。どこも天災のリスクは避けられませんから、生産ラインを全国に分散している企業もあります。そして現在では電力が足りない、というリスクもあります。工場の中には24時間常に電気が通っていることが前提でラインが稼働するところもありますね。

つまり、リスクがどうしても大きくなる日本ではオペレーショナルな生産、誰がやっても同じものができる生産をする余地がどんどん小さくなるのではと考えています。もっとも、昨年タイで洪水が起こったように日本以外の土地でもリスクというのはあるので、それがリスク回避の抜本的な対策であると言われると微妙ですが、少なくとも海外、東南アジアの方が人件費も安く、生産フロンティアもあります。大企業は生産をシフトする方向に進むのではないのでしょうか。



Q そうなると、日本の産業の構造が更に変わってきそうですね。

鈴木 日本での第3次産業の就業者数割合は約7割です。第1次産業は農林漁業、第2次産業はいわゆる「ものづくり」をする業種ですが、先ほど話したことを踏まえるとまず増える見通しはないでしょう。ただ、第3次産業、サービス業の形が変わる、または、製造業のあり方が変わっていくのではと考えています。というのは、サービス業として技術そのものをサービスにする可能性が有ると思います。

例えば、アメリカのApple社はiPhoneという製品を作っていますよね。Appleは設計やデザインをしています、実際にそれを製造しているのは中国や台湾のメーカーです。Appleは設計図やデザインを台湾の会社に送り、中国の工場はそれを元にiPhoneを製造する。つまりAppleは設計図やデザインを作るだけの会社であると言っても間違いではないでしょう。Appleは製造業にみられていますが、デザインは定義的にはサービス業とも言えます。AppleはiTunes storeなど情報配信サービスもやっています。Appleは製造業から、ものづくりとサービスが融合した新たな形態へ移り変わった、としても差支えがないと思います。

日本でも、メーカーが東南アジアあたりの現地企業だけで生産すればAppleのやり方と一緒にですね。もしかすると自動車でも日本のメーカーが日本国内で開発と設計、デザインだけ行う会社になり、日本ではほとんど製造をしないという企業になる可能性があります。これが車メーカーに限らず他のメーカーにも広がると、産業構造が現在と異なってくるかもしれません。

Q ところで鈴木先生のご趣味はなんですか？

鈴木 私はコーヒーが好きなのですが、ここ10年ぐらい、海外出張のたびにタムブラーを買っているのですよ。…台湾、マレーシア、オーストラリア、いろいろありますね。各国のスターバックスで買うことが多いのですが、別に集めに行っているのではないですよ。ただ、これは趣味なのか微妙ですね(笑)。

ほかには、学生時代は吹奏楽部でサクスを吹いていました。サクスと一口に言ってもいろいろありますが、私はテナーやバリトンサクスで、数年前まで社会人の吹奏楽団でも吹いていましたよ。



そうそう、旅行も好きです。特に鉄道旅行が好きなのですが、90年代後半頃に勤めていた大学で鉄道がらみの研究をしたことがあります。都心にある情報サービス業の企業がどういふところにオフィスを立て地しているかを調べ、それがどんな鉄道の沿線近くにあるのか、といった研究でしたが、情報サービス業は一般的にコンピューターを使う仕事が多いですね。つまりコンピューターやインターネットがあればオフィスはどこでもいいと思われがちですが、実際は顧客のオフィスから電車40分ぐらいで行けるような範囲内に立地していたことが多かったです。顧客は金融や証券などで、総研などシンクタンクを兼ねた情報サービスの関連会社があり、勘定などの情報システム開発を情報サービス部門が行うという関係が多いのですが、なにせ業務が目に見えない情報なのでやっぱり対面でのコミュニケーションもある程度は必要になります。となるとコンピューターを使うのがメイン、とはいえ顧客の事務所からあまり遠いところで業務はできない、ということで近場のオフィスを選んでいる、ということがわかった経験があります。

本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

編集 経済学科4年 横田拓万
経営学科4年 山田勇人



鈴木 淳

高崎経済大学経済学部経営学科教授。
東京工業大学大学院理工学研究科経営工学専攻
博士課程修了。電気通信大学助手等を経て現職。

土谷岳史先生



Q 土谷先生はEUの政治を研究していらっしゃいます。EUは50年の歴史をもっていますが、先生はその形成の過程をどうアジアに活かすかということを2010年の『INTRO』でお書きになっていました。その点について簡単に教えていただけますか。

土谷 僕が今の研究を始めた2000年頃って日本のナショナリズムがすごく強くなっていった時期で、「日本国」とか「日本国民」というのがすごく自明視される状況があったんですね。そんな時にヨーロッパでは既に国民国家とは全然違う政治体制ができていた。

なぜ日本でEU研究をやるのかと言えば、まずは、国民国家とは違う秩序というものがあるんではないかと存在しているんですよ、ということを知りたいというのがあるんです。違う選択肢について知り、思考の枠組みを広くとることは、たとえばアジアでの日本の位置とかアメリカとの関係とかを考える上で役に立つのではないかと。

僕は東アジア共同体論者ではありません。実際にそういうものが今後できるのかどうかはわからない。しかし、国家があって国民がいて国益を考えるということとは違う世界があることを知っておくのは重要だと思うんですね。

Q 研究の原点はやはり卒論や修論にあると思うんですが、そのテーマを教えてください。

土谷 僕は学部では憲法のゼミにいました。そこで考えていたことって、日本ではなんで権利が守られないのかなってことなんです。それで、守られない権利の典型例として、卒論では団体規制の問題を扱いました。

90年代後半にはオウム真理教の問題が大きくありました。「オウム新法」と通称されていた団体規制法というものが作られて、それによって結社の自由が制限されるという事態が起こった。オウムは絶対悪だから何をしてもいいという論理ができてしまっていたんです。

結社の自由は広く言うと表現の自由の一部です。学説上は、表現の自由というのは民主制の根幹に位置するから非常に高い保護が必要であるとされていました。ところが日本の司法はその通説から離れた判決を下してきた。他に警察が盗聴するとか、あるいはビザ屋のチラシをまいても逮捕されないけれど、イラク戦争反対っ

EUから考える 「制度」と 「一緒にやっていくこと」

てピラをまくと逮捕されるとか、そういうことが平気で行われるようになってきた。

日本には表現の自由と結社の自由を制限する法律が二つあります。破壊活動防止法と団体規制法です。団体規制法については裁判がありました。地裁レベルで終わっちゃったんだけど判例も出たので、卒論ではそれを分析して、団体規制をするのは憲法違反であると言いたんです。

修論ではEUにおけるシチズンシップを論じました。EU ってのは国家じゃない、超国家的な機構なんだけど、そこにはシチズンシップ、市民権っていうのがあって、国民以外の外国人がEU市民として、権利が保障されているんです。それはいかなるもので、どのような範囲までその権利が保障されているのか、そういうことを研究しました。

Q 金融危機についてはどうお考えですか？

土谷 それは経済の話なのでストレートに聞かれると困ってしまうのですが（笑）、たとえばギリシャの財政破綻をどうしてドイツが引き受けなければならなかったのかって議論がなされていますけれど、あれは利害関係をどう計算するかというところがすごい重要なんですね。中東欧諸国がEUに入る時にも、旧共産圏の国は経済レベルが低いからという理由で反対論がありました。けれども、中長期的には新しい市場が広がるのだから西側も得をするんだという説得が行われた。今も同じで、ドイツは短期的には損をするけれど、中長期的にはどうなのかということを考えなければならないし、EUという枠組みのお陰でそういうことを考えることもできるようになっている。だから、EUみたいな制度があるかどうかというのはとても大切なんですね。

国際関係というのは基本的に中央政府がないアナキーな秩序と言われているんですけど、国際法とか国連とかEUとか様々な制度もまた存在しています。制度というのは協力関係を安定化して持続させる非常に強い効果をもっているんです。たとえばホブズ（17世紀イギリスの哲学者）が言っているように、相手が裏切るとしたら絶対に協力できない。でも、相手が協力すると思っていたら自分も協力できる。

EU って各国の官僚がものすごい頻度で会っているんです。部門によっては週に三回ぐらい会っている。そうやって顔を会わせていると、「まあ協力するか」って話になるわけですね。EUは官僚のスケジュール管理も欧州委員会がやっているんで

EUはこれまでの政治で 自明視されてきたものを ぶち壊している



すけど、やはり制度があってしょっちゅう顔合わせしなければならないというのは大切なんですよ。六カ国協議なんかがいい例だけど、一度決裂するとなかなか再開できませんよね。たまに会うのは決裂しやすい。「欧州は一つ」という感覚もそういう人的交流からできてきているんだと思います。

Q ただEUとして見れば一つかもしれませんが、その中には例えば旧共産圏も入ったりしたし、思想の違いなんかたくさんあると思うんです。それでどうやって一つになることができるんでしょうか？

土谷 でも違いというのは一国内でもあるわけですよ。日本国内だって原発推進派と脱原発派はたぶんわかりあえないし、ヨーロッパだってキリスト教の保守派とラディカルな自由主義者は全然考えが違う。だから「違いがあるのに一つになれるのか」って考えるのではなくて、とにかく一つになるという意志を持って、その上で、その「一つ」の内と外を決定する境界を探るということだろうと思います。僕もEUの政治がその境界をどう設定してきているのかを研究しているんです。

それこそ「デモクラシー」とか「法の支配」とかについては自由主義諸国であればどこも否定しない。ただその内容をどう解釈するかとなるといろいろ違いが出てくる。EUで面白いのは、その解釈を統一しようとしなくていいところなんだよね。たとえば「EUにおける自由とはこういうものです」というのが事後的に、そして暫定的に作られていく。で、それはあくまでも暫定的だから、解釈は開かれていて、変化もしていく。一つになるという意志に基づいたプロセスだけがあるんです。そのプロセスの中で共通点というものが事後的に作られていく。

Q うーん、その暫定的に作られていくというところがよく分からないんですが、なんで考え方も違うのにそういう風にできていけるのかなって。

土谷 そうだな、たとえば、いまこうやって僕のところにインタビューに来てくれたみんなも考え方は全然違うわけでしょ。けれど、なんか一緒にやっていて、最終的にこの『INTRO』を作るわけじゃん。『INTRO』を作るって目標だけが共有



されている状態ですね。だから違うのは当たり前であって、その上でどうやってみんなをつなげていくかというのが重要なんですね。

Q すると、先ほどの制度の話がやはりポイントになってきますね。厳密な方針をあらかじめ決めるのではなくて、制度的な枠組みだけを作って、一緒に作業していく。その中で「まあ相手も裏切らないだろう」という雰囲気が出ていく。

土谷 そうですね。なんでみんな違うのに一緒にやっていけるかっていうと、制度が果たす役割は大きいと思います。

Q 全然話は違うんですが、土谷先生はアニメが好きということで、その辺りの話をしていただきたいんですが……。

土谷 はい(笑)。何がいいですかね…。たとえば『コードギアス』(2006年)ってアニメがありますが、あれは戦争と平和のことを考える上で参考になりますね。あのアニメでは最後に主人公が自己犠牲を払って戦後の平和を作ろうとするんです。自分が最悪の独裁者となってひとびとの憎悪を集めることで、平和を求めるひとびとが一つになる。で、その主人公を殺す人物が救世主として現れる。

でも、この結末は最悪だと思うんです。この「平和」の作り方は構造的には第二次大戦後に似ています。そこではファシズム国家が絶対的な悪として掲げられた。で、僕らは第二次大戦後の平和がいかにもろかったのかを知っているわけです。冷戦構造の中で国連はうまく機能しなかった。しかも救世主を出してしまうと、救世主依存を生んでしまう。これは絶対に長続きしません。

続けて『ガンダム』(1979年)の話もしますと(笑)、あれは要するに革命はうまくいかないって話ですね。でも、その一方で、ぬるいリベラリズムに安住しなければならないのかという問いかけも同時になされている。そして戦争が繰り返されるわけです。『ガンダム』は最後は停戦協定で終わりますね。やはりあれがリアリズムなんじゃないでしょうか。戦争は暫定的にしか終わらない。



Q 現実でもそうなのでしょうか？

土谷

まあ、悲しいけど、人間はなかなか戦争をやめられないんですね。

Q でも、戦争なんかしたくないって思うんですけど……。

土谷

いや僕らはしたくないけど、戦争をしたい人はたくさんいるんですよ。軍需産業の人とかね。とはいえ戦後日本のことを考えてみると、庶民の「戦争はイヤだ」という意識がものすごい強くて、これが直接的には日本が戦争をしないでこられた原動力になっていたように思います。戦争はいけないとか言ってもなかなか効果がないんだけど、庶民のこういうベタな感情は意外と強い。とはいえ、『コードギアス』を見てると、日本も世代交代して、この感情がなくなってしまうのかなとも思うんですね……。

Q なかなか希望を持ってない話で終わりそうなんですけど、ぜひ最後に希望を語ってください！

土谷

政治学やってると希望なくなるんですよ（笑）。でも、政治の世界では頑張っている人たちもいます。EUは「もうヨーロッパでは戦争をしない」と意識のもとで制度を作って、それで実際に戦争をしていないわけです。EUはこれまでの政治において自明視されてきたものをぶち壊しています。そうやって自明性が壊されていけば、「私たちには物事を変えられるんだ」という意識ができていくのではないかな。これが希望ですね。



土谷岳史

高崎経済大学経済学部経済学科准教授。
2009年早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学。
同年、講師として本学に着任。2012年より現職。

中野正裕先生



Q 中野先生の研究テーマ、担当講義について教えてください。

中野

研究テーマは金融を含むマクロ経済分析です。担当している講義のうち「マクロ経済学」は、市場分析を応用して、一国全体の動きを学ぶものです。また、「貨幣経済論」の講義では金融論とも一部重複しますが、社会において貨幣にはどのような役割があるのか、貨幣があることでどのような良いこと、悪いことがあるのかを学びます。

Q ではなぜ、そのテーマに興味を持たれましたか？エピソードなどもあれば交えてお聞かせください。

中野

エピソードというほどのものでもないですが、ゼミの教授がケインズ経済学の研究で有名な方だったので有効需要原理や生産の貨幣的理論一荒っぽくいうと、貨幣がある世界は生産を円滑にするが、貨幣や金融に問題があると生産がスムーズに行えなくなってしまうという考え方に興味を持ったのがスタートでした。

私が大学に入学したころはバブル経済のピークで、日本の経済力は世界一だと言われていました。日経平均株価も3万円台後半という、今では考えられないぐらいの数字で日本経済が沸きに沸いていました。この頃経済学部志望の学生は日本経済の強さについて学びたい人が多かったと思うのですが、私は経済学史に興味を持っていて、経済学における偉人（ケインズやスミス）がなぜ偉大とされたのか、彼らはその後の経済学にどのような影響を与えたのかを学びたくて経済学部に入りました。しかし、バブル崩壊後の日本経済の失速を目の当たりにして、あれほど評判だった日本経済がなぜこのようになってしまったのかに関心が移ってきました。それで特に問題だった金融、貨幣と実体経済のつながりという、講義で担当しているような課題を研究することになりました。

Q なるほど、僕はバブル崩壊直後に産まれたのでバブル経済を知らないのですが数字で見ると当時どれほど日本がすごかったかわかります。

さて、マクロ経済学の講義の中で「マクロとミクロは違うようで同じものだ」

日本経済盛衰の「なぜ」 ——金融そして貨幣と 実体経済のつながりを探る

と仰っていたのが印象に残っているのですが詳しく聞かせてください。

中野 ミクロ経済学というのは実際の経済社会で活動している個人や企業の行動を理論化して、人々の行動の組み合わせとして社会の状態を説明するものです。こうすることで、個人レベルの便益で測った社会の効率性について議論することができます。しかし、マクロ経済学の場合は一国全体の集計されたデータを扱います。例を挙げるなら、クラスの学力向上を考えるさい、1人1人の学力(テストの点数)ではなく、まずは平均点の動きに注目する感じでしょうか。個人と全体ということで取り扱うところは確かに違うんですよ。ですが目的は一緒で、クラスの例を使えば、どうやってクラスの平均点を上げるか、クラスの成績はなぜ落ち込んでいるのかということを考えるときに「〇〇くんが勉強をサボっているから」という見方も、平均点の動きから「前回より全体が落ち込んだ理由は何だろうか」という見方も重要になるのです。また、どちらも市場経済のとらえ方がポイントで、人々が自由に取引した結果、市場経済がある種の効率性を実現しているかを分析することになります。ただし、マクロ経済学はケインズが一国の不況がなぜ解消されないかを説明する理論を考案したところからスタートしました。つまり、集計された経済変数の動きが大きいので場合によってはコントロールした方が良いかもしれないという発想です。政府が市場に介入して景気を安定させた方が良いかもしれない、経済が伸び悩んでいるときに企業の生産性を上げる環境づくりを政府がしていくことが必要になるかもしれない。そういった政策との結びつきが強いことも、マクロ経済学の特徴です。

全員がそれぞれ望ましい行動をしたとしても全体として良い成果が得られないというのはあり得ることであって、問題は、うまくいかないときに誰かが行動を変えさせてうまくいくようにしなければならないということなんですよ。そういったマクロ的な考え方が重要視されるようになりました。クラスの平均点の話に戻すと、学生も平均点を気にして、クラスの平均点が上がっているなら自分も頑張らなくてはいけないと考えるのではないのでしょうか。

マクロの動きがミクロレベルの行動に影響を与える、それが結果としてさらにマクロの動きを生み出すというつながりがあります。また、それはマクロ経済の動きを大きくすることにもなります。



Q ミクロとマクロの関連性がとてもわかりやすかったです。マクロ的な経済政策はミクロ経済学に通じるところがあるんですね。

ところで、ミクロ経済学、マクロ経済学のここがわかると面白い!という魅力は何でしょうか?

中野

ミクロを勉強しているうちはマクロとのつながりがわからない、マクロだけを勉強していてもミクロがわかるようにはならないのでしばらくはどうつながるかがわからないと思います。ですが、マクロの議論を進めていって経済政策の話になったときに、ただ単純に景気を良くすれば良いだけではなく、資源の制約などの問題も出てきます。それを理解するためにはミクロ経済学の学習も必要です。例えば政府が公共事業を行って失業者が減少したと言っても、それは将来の増税につながるような現在の借金によって今の景気を一時的に回復させているだけかもしれない。そのツケを将来の世代が、または恩恵を受けた人たちも将来払わなくてはならなくなるかもしれない。今の好景気を将来の不景気と引き換えにしているのなら意味がないのではないか。そもそも、政府が民間から税を取って公共事業を行うことが正しいのか?その事業は民間に任せた方が良いのではないか?という考え方はミクロ経済学を学習していないと身につけません。マクロ経済学で最初に習うのは政府支出を増やして…ってところですね。やはり、考え方のつながりがわかった時は面白いと思います。

Q ありがとうございます。学生のうちにそう思えるようになりたいです。

最後に、研究のお話からは外れますが、中野先生は学生と一緒にソフトボールや麻雀をするとお聞きました。「よく遊び、よく学べ」ということだと思いますが、学生にメッセージをお願いします。

中野

好きな事にのめりこんでほしいですね。それが一番大事だと思います。社会人になったら時間的にもそういったことはできなくなるでしょうし、学生時代にしかできないことをやってほしいです。勉強も学生にしかできない勉強があると思います。また、学生時代に好きなことをやった、やらせてもらったという感謝の気持ちを社会に出てから還元できるかもしれないですね。学生時代から主体的に打ち込めることを探せる人は、社会に出てからも与えられた仕事をこなすだ



けでなく、自分から仕事を見つけてくるような積極性を持てると思うんですよ。私たちバブル世代と違って今の学生は入学してからすぐに就職のプレッシャーにさらされていると思います。就活は3年生からと知っていながらもその準備などは1年生から始まります。受け身にならず、自分から積極的に動いてほしいですね。よい仕事をするために学生時代から何事にも創意工夫を楽しむこと、真心を尽くすことが大事ではないでしょうか。やはりそれが社会への感謝になりますよね。

私が学生の時はあまり深く考えずに、適当に読みたい本を読んでいました。あとは旅行が好きでしたね。本を1冊だけ持って電車でふらりとどこかに行く、そんなこともしていました。学生だからできたことの典型じゃないでしょうか（笑）。やはり大事なのは積極的になることです。

積極的になるということは疑問を持つことから始まります。疑問を持つようになれば視野が広がります。最近の学生は発言をしないことを美德とする節がありますが、ゼミを持つ教員からすれば疑問を持ってほしい、発言をしてほしいのです。講義や演習で指名されると、きちんと自分の考えを述べる学生は多いのです。その意味では、皆が疑問を持ち、考えることはできています。あとは自信を持って発言しましょう。ゼミの時間に限らず教員はそれを待っています。無駄な意見は一つありません。私たちも学生の発言を受けて気付かされるということは多々あります。自信をつけるためには好きなことに打ち込むことです。何かを極めて自信をつければその自信が必ず他のことに活きます。好きなことに打ち込めば何かを得られるはずです。また、親への感謝も忘れずに学生生活を満喫してください。言いたいことが一周しましたね。

学業の面でも、生活の面でも非常にためになるお話、ありがとうございました。

編集 経済学科4年 片桐拓也

中野 正裕

高崎経済大学経済学部経済学科准教授。
2000年、神戸商科大学（現兵庫県立大学）経済学研究科博士後期課程修了。同年本学に着任。
2003年より現職。

藤本哲先生



Q ご自身の専攻テーマについて教えてください。

藤本

経営組織論、特に組織構造をテーマにしています。

例えば、規則を細かく作る。規則は何のためにあるのか、わかりますか。規則とかマニュアルを用意して、その通りにやって頂戴ってことにしたら、いちいち指示しなくて済むようになる。これは、コミュニケーションを減らせるってことなんです。「守らせること」が目的じゃないのね、規則というのは。

それから役割分担、分業がある。小学校の授業のサッカーみたいに、ボールがあっちへ行ったら全員があっちへ走ってゆく…という状態だと、勝てないでしょう。やっぱり役割分担があるわけです。役割分担には意味があって、どういうふうに分業をするかも一つの組織構造の側面です。

さらに、誰が命令を出すのかという側面もある。

枠を作るのね。枠を作って、人々をうまく具合に動かしていこうとする。枠がなかったら、いちいちガミガミ細々と命令をするしかなくなる。それは、言われるほうも嫌だけと言うほうも嫌。だけど、「この規則通りやって下さい」って頼むと、人間対人間の関係じゃなくなる。「自分は本当はこの規則良いとも悪いとも思ってないけど、規則があるんだから規則通りやるしかないんです」って言えば、心が守られる。規則のせいにすれば人間関係は悪化しない。

Q なぜ経営組織論を学ぼうと思ったのですか？

藤本

それは成り行きです。僕は、本当は工学部に行きたかったんだ。コンピューターのことを勉強したかったから。でも数学と物理ができなかったから、浪人して文系に変わった。すると、特にやりたいことがない。そこで、じゃあ経済系かなと思って、たまたま神戸大学経営学部で合格したんです。勿論経営学部が何をやるかなんて知らないで、授業を受けているだけ。たまたまそこにとても授業のうまい先生がいて、その人の専攻が経営組織論だったので、そっちにひかれた、というところです。

組織構造をテーマに定めるまでには時間がかかりました。組織構造というテーマは、昔たくさん研究されていて、現在研究している人はあまりいないんです。また、経営学は、色んな分野を取り入れてできてきた学問分野で本当の意味で独自の理

規則は何のためにある？ ——組織構造を 多面的に考える

論は少ない。人間や組織のことを研究する社会心理学者という人達がいて、そちらの研究のほうが緻密だし。それで同じ分野をやっても絶対勝てないから、経営学っぽいもののなかで組織構造をやってみようかと考えました。ほかには、コンピューターが好きだったし、コンピューターと組織の関係について組織構造を見るという研究が多くあったので、その点からも興味を持ちました。

Q 専攻テーマに関する実験・研究で、面白いと思ったものを教えてください。

藤本 論文読まなくても大体こういうことですよというのが書いてある、とても便利な本があってね。例えば、『対人社会心理学重要研究集〈1〉社会的勢力と集団組織の心理』（誠信書房）の70頁にあるアッシュの研究。そのほかには、『対人社会心理学重要研究集〈2〉対人魅力と対人欲求の心理』（誠信書房）の47頁。それは物理的構造と人間関係についての研究で、物理的に近い人達は接触頻度が高くなって仲良くなる、という話です。物理的な構造が、人間の気持ちや人間関係に影響を与えるというものです。広いワンフロアのオフィスにしたら、社員同士のコミュニケーションが活発になりましたという話が、たまに新聞に出てきます。色んな人達が楽に会える、接触できるような物理的環境を整えることにより、実際にコミュニケーションが活発になり、良い効果が生まれたと。小学校の席替えの時に好きな子の隣に座りたいって思うのは、近くにいと接触頻度が上がってお近づきになれる確率が高まる、ということが子供ながらに分かっているんだろうね。組織の分割の仕方、分業の仕方もうまくデザインすることが大事。

もう一つ、金井壽宏『変革型ミドルの探求：戦略・革新指向の管理者行動』（白桃書房）。これは僕が大学院生の時に読んだ、中間管理職のリーダーシップに関する研究です。その本の結論の一つにね、できるミドルマネージャーは他人を頼るのがうまい、というのがあるです。直接こうは書いてないんだけど、そういう意味なんだなって理解したのです。それに感動してね。当時の僕は「なるべく他人に頼らずにやらなければならない、先ずは自分でやらなければならない」と思い込んでいたんだ。紹介した3冊の本は図書館にあるのでぜひ読んでみてください。

Q 組織運営にはコミュニケーションが不可欠だと感じました。近年、「コミュニ



「コミュニケーション能力が乏しい若者が多い」などと聞きますが、これについてどう思われますか？また、こういった中で組織論の学びを生かすことについてどうお考えですか？

藤本

そういう人はどんな世代にも大勢いると思う。年齢を重ねる中で少しずつコミュニケーション能力を培っている。ただ、コミュニケーション能力を培う場面は減っているかもしれないね。そういうことをしなくても暮らしていけるようになったというのはあるかもしれない。世の中豊かになって、小さい争いごとを未然に防ぐ仕組みが整備されていくと、争いごとは大きくなってから表面化する。でも、小さい争い事に対応した経験がないと大きな争いごとに対応するのは難しいよね。ほかに、昔に比べて勝たないと意味がない場面とか、順番を決める場面が増えているかも。例えば、色んな競技が増えたよね、新しいスポーツ競技の全国大会がすぐできる。すると、一番になれる人は日本に1人だけだ。でもこれもし、全国大会がなくて、各都道府県大会が一番上だったら、一番になった経験をした人が47人もいることになる。成功体験を持てる人の数が全然違ってくる。

世界大会や全国大会という目標が子供にとっては高すぎるのかも。目標が高すぎると諦める人が増えると思う。日本では失敗すると再挑戦が難しいって言われるでしょ。競争が激しくなると、少しの失敗が命取りになる。すると失敗しないように、「こうやればうまくできるよ」ってことを初めから教え込んでしまうわけ。マニュアルも整備される。自分で試行錯誤して学ぶ機会が少なくなる。学ぶほうもマニュアルを欲しいでしょう、失敗したくないから。会社でも、余裕があれば人を育てる時にあえて失敗させるというのも可能です。勿論後処理が可能な範囲内で、ですよ。どんな失敗を起こすか、大体わかってるから。「ね、わかっただろ？」ってことを後で言うわけよね。

改めて勉強しなくても、ほとんどの人は経験を通じて学んでいることではあるよね、経営組織論の話って。それでも経営組織論の基本的なところは全員知っていたほうがいいかな。そしたら、もう少し暮らしやすくなるかもね。でも、全員が学ぶというのは事実上無理だから、一部の学んだ人が積極的に組織運営に取り組ん



で、他の人達をリードする。組織がおかしな方向に行ってるなということがわかる、とかね。経営組織論を勉強した人にはそういうことを意識してほしい。組織をより望ましい方向に動かしていくためにね。

Q 規則を作って型にはめることでコミュニケーションを減らせるとおっしゃいましたが、コミュニケーションが減ったから打たれ弱くなったとか、便利になったからこその弊害が今の世代に起きてるのではないかと思います。

藤本 昔から世の中は、便利になる方向に進んでいるんだ。例えば、昭和30年代の暮らしに戻りたいという人は、本当にあの生活水準に戻りたいとは思ってない。豊かになりたい、安心したいって思って努力してきた。しかし、豊かになったからといって、伸びない能力がある。必要ならそれをトレーニングする場面を用意するしかないでしょうね。文化人類学で、職人が一人前になるプロセスを書いた古典的な本があります。アフリカのある国の仕立て屋さんでは、新入りの徒弟は、シャツのボタン付けから始める。それから段々難しいことを任されていく。でも洋裁学校だと最初に生地を切ったりするでしょ。いや、本当はどうか知らないから、想像でしかないけど。型紙あてて最初に生地を切って、縫って、最後にボタンをつける。そんなふうに学校での学びと徒弟制の学びは違うという本があって、なるほどなあと思いました。一番難しいところは後から学べばいいと。簡単なところからやったほうがいい。よく言われるけど、素直な人がいい、ということと関係するかな。言われたことは言われたとおりにやってみると。それができたら次の世界が見えてくる。上の人も、「ああここまでいったな、次のことやらせようか」って次の課題を与えてくれると思う。

逆に、内容は同じなのに、誰が言うかによって受け止め方が違う人がいるよね。自分の経験とか、自分と同じ境遇の人の言葉しか信じないという感じの人。情報過多の時代だから、信じられる人が言ったことだけ信じれば日々暮らす分には問題ないかもしれないけど、それはもったいない気がするね。そのためには、本を



読むのがいい。他人の経験を読むということね。そして、相対的に考える。他人の経験を読むのに一番手っ取り早い方法が読書だから、皆さんにはぜひ本を読んでもほしいなと思います。

沢山の本を読みたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

編集 経営学科4年 堤原想子



藤本 哲

高崎経済大学経済学部経営学科教授。
神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程修了。
奈良産業大学講師・助教授を経て本学に着任。

水口 剛 先生



Q 水口先生のご専門は環境会計だとお聞きました。環境会計とは具体的にどのようなことをする学問なのでしょうか？

どういう学問か、といわれると、なかなかお答えするのが難しいですね(笑)。というのも環境会計はまだ、学問的に体系化された分野ではないんです。そもそも会計というのは、企業の経営の成果を計算し、企業に投資してくれる投資家に報告するためのツールです。だから会計学は、経営成績をどう計算すれば企業の実態が正しく投資家に伝わるのかを研究します。

今までの会計は、会社の利益だけを計算していました。どんな人でも利益が大事ですから、投資する人も儲かる会社に投資をしたいわけです。だけど実は利益だけでは見えない部分がたくさんあります。そして、利益だけでは見えない部分に、環境や社会のためにならないことが隠されていることがあります。

例えば、東京電力は日本でも一、二を争う優良企業でした。会計を見てもいい会社だという情報しか出てこないし、安定して儲かるから皆が安心して投資していた。だけど実際には原発のリスクを抱えていたわけですね。そのとき、たとえば事故が起きてしまえば、その後の賠償費用などはわかりますけど、地域の人が被った苦痛の本当の大きさや、事故が起きるリスクなどは、いまの会計システムでは分らないのです。

原発だけではないんですが、とにかく、利益を計算しているだけでは見えてこない部分を見えるようにして、企業をより広い視野から評価しようというのが、環境会計の基本的なコンセプトなんです。

Q お金だけでは見えないリスクだとか長期的にみると生じてくる弊害を数字で測って会計に当てはめるといふ学問ということだととらえていいですか？

水口 そうですね、ただ何でも数値化すべきかというところ難しいところもあって、僕も悩むんですね。やはり何でも数値化できるわけではありませんから。それに、accounting(会計)という語はそもそも、“account for”から来ていて、これは「説明する」という意味じゃないですか。だから、別に数字だけが会計じゃない。最近は「会計」じゃなくて「情報開示」って言うようにしてるんです。たまた、「あなたがやっているのは会計じゃない」って言われるんですけど(笑)。

金融を通じて 社会が変わる

今は環境問題と他分野の境目がだんだんなくなってきています。例えば、食糧の問題はある意味で環境問題です。更にそれは貧困や格差の問題とも結びついているし、人権も関わってくる。そうした環境と社会の双方に関わる問題を「持続可能性」という言葉で表すことがあって、それにならって、「持続可能性会計 (sustainability accounting)」という人たちもいます。

Q 水口先生は公認会計士でもいらっしゃいます。どういう経緯でいまのご専門にたどり着いたのでしょうか？

水口 僕はもともと会計士をしていたんですが、会計士の仕事はあんまり好きじゃなかったんです(笑)。会計士をやりながら環境保護団体の活動もしていたんですが、両方は大変だったので会計士事務所はやめて、会計士の受験学校で講師をして、それで環境保護団体の事務局をやっていました。

その一方で、会計士協会が環境会計や社会的責任投資のことなどを研究して、論文を書いたり、本を作ったり、割と一生懸命していたんですよ。そしたら大学の先生たちとも知り合って、学会で共同研究の発表もするようになった。で、ある人から監査論の公募があるから応募してみたらと言われて、応募してみたら採用された(笑)。そういう経緯で高崎経済大学の教員になったので、大学の先生というものがよく分からないままにこの大学で教えるようになってしまっで……。

Q でも、「これをやらなきゃいけない!」って気持ちで何かをやり始めたら、大きな運動に巻き込まれ、巻き込まれただけじゃなくて、そこから成果が出て、しかもその成果がきちんと評価されるというのは理想的じゃないでしょうか？

水口 これをしなきゃいけないっていう思いだけは強くありましたね。

Q 偶然この道に入ったということでしょうか。目標を決めるばかりがいいわけじゃないってことかなと思います。

環境問題にはいつごろから興味をお持ちだったんでしょうか？

会計のルールを 社会にとって正しいものに 変えるのも会計士の仕事



水口

具体的にこういう活動に関わり始めたのは会計士になる前後ですね。でも、学生のころから環境問題に関心はありました。海が好きでスキューバダイビングをしていたというのがありますが、本格的に環境のことを考えるようになったのは26、7歳ぐらいの時です。

その頃はちょうど1980年代後半で、地球環境問題がクローズアップされた時期でした。南極でオゾンホールが発見されてフロンガスが禁止されたり、地球温暖化が注目を集めて、IPCCが作られたりした。92年にブラジルでリオサミット（国連の主催で開催された環境と開発をテーマとする国際会議。通称「地球サミット」）が行われますが、そのサミットに向けて日本でも環境問題に対する意識がすごく盛り上がったんです。しかもそれがバブル経済崩壊の時期と重なっていました。経済一辺倒ではなくて環境を重視していこうという雰囲気が高まっていったんですね。

あと、僕が環境に興味を持ち始めたころ、アメリカでは社会的責任投資（SRI）という活動をしていた人たちが企業に環境に関する情報開示を要求し始めていました。会計の仕方を変えれば、投資家の行動が変わって、投資家の行動が変われば、社会の仕組みが変わる、そういう考え方がでてきたんです。社会的責任投資というのは、たとえば、途上国で児童に労働させている企業とか核兵器を作っている企業には投資しない。その代わり、環境に配慮している企業や社会的に意義のある活動を行っている会社に投資する、という投資行動です。

でも、そのためには企業をきちんと評価するための会計あるいは情報開示が必要になる。それを聞いた時、「あ、それって自分の仕事じゃないか」と思ったんです。会計士のやるべき仕事があるところではないのか、と。

今の会計士の仕事っていうのは、企業が会計のルールを守っているかどうかをチェックすることなんですが、そもそも今ある会計のルールは本当にこれでいいのか？ この会計のルールを社会にとって正しいものに変えていく、それも会計の専門家の仕事なんじゃないのか。そのことが分かって、会計士の役割の大切さを再認識したんです。

Q ここまでお話を聞いていて、なぜ環境会計や社会的責任投資のことを今まで知らなかったんだろうと思ったのですが……。



水口 なぜ環境会計が知られていないのかという制度になっていないからです。簿記から始まる会計の勉強というのは全部試験があって、その試験に合格して資格が取れると仕事につながる。だからそういうのは教えやすい。でも、環境会計を勉強したからって資格がとれるわけじゃないし、仕事になるわけじゃないから、やっている人も少ないし、誰も教えない。

僕の一つの目標は、投資家が環境や社会について配慮して投資する社会を作ることです。そのためには、企業が環境や社会にどう配慮しているかについての情報が会計制度の中に組み込まれ、きちんと公開されるようにしなければなりません。それが義務づけられれば、必然的に、会計をやる人、証券や金融分野に行く人たちは環境とか社会のことを勉強しなければいけなくなる。そういう社会にしたい。

たとえば証券会社に勤める人は証券アナリストの試験を受けている人が多いと思いますが、この試験はマクロ経済やファイナンス理論を勉強するだけでとれます。でももしアナリストの資格試験に環境問題の科目があったらどうなるか？

証券アナリストは、人から預かったお金を色々な会社に投資する分岐点にいます。だから彼らがお金をどこに動かすかによって社会が変わってくる。非常に責任の重い仕事です。それだけ責任が重い仕事であるなら、目先の儲けだけでなく、自分がそこに投資をしたら環境や社会はどうなるのかということについての考えや責任を持つべきだし、そういうことが分かるだけの知識がなければやってはならない仕事だと思うんです。

あるいは、それだけの知識と見識があるからこそ高い給料をもらえるという仕事にしなければならない。多分、もともとはそうだったんですね。金融の世界は給料が高い。もちろんそれは規制産業で競争が制限されているということもあるけれど、公共性が高い仕事であり責任が重大だから、優秀な人材を集めなければいけないし、そうすると給料も高くなってしまいうことだったのでしょうか。でも、いまは本当にそうになっているのか。

Q お金の動きで社会は大きく変わる。ならば、そのお金の流れに携わっている金融分野の人たちはそのことを自覚しなければならないし、自覚してもらうためにはまずはアナリスト試験の内容を変えていくのが手取り早いだろうという



ことですね。儲けだけを考えるというのは20世紀では当たり前だったかもしれないけど、これからはそれしか考えないなどというのは知的怠慢だということになるでしょうね。

水口 今までは社会全体のことを考えるのは政治家の仕事でしたけど、政治家の力だけでは社会はよくならないので、投資家もそれを考えないといけない。金融は新しい社会をつくっていく上でとても重要な役割を担っているんです。

どうもありがとうございました。



水口 剛

高崎経済大学経済学部経営学科教授。
筑波大学第三学群社会工学類卒業。ニチメン㈱、英和監査法人、
TAC㈱などを経て、1997年に講師として本学に着任。
2008年より現職。

「資格」を狙うなら、こんな授業科目

ー 各種資格の試験科目と経済学部カリキュラム設置科目の対照表 ー

資格	公認会計士	税理士	不動産鑑定士	中小企業診断士
試験科目	【短答式】 ①財務会計論 (簿記・財務諸表論) ②管理会計論 ③監査論 ④企業法 (商法等) 【論文式】 ①会計学 (財務会計論・管理会計論) ②監査論 ③企業法 (商法等) ④租税法 ⑤経営学、経済学、民法、統計学から1科目選択	【会計関係科目】 ①簿記論 ②財務諸表論 【税法関係科目】 ①法人税法 ②所得税法 ③相続税法 ④消費税法または酒税法 ⑤国税徴収法 ⑥住民税または事業税 ⑦固定資産税、以上から3科目選択。ただし①または②のいずれか1科目は必須。	【短答式】 ①行政法規 ②鑑定理論 【論文式】 ①民法 ②会計学 ③経済学 ④不動産鑑定評価理論	【1次試験】 ①経済学・経済政策 ②財務・会計 ③企業経営理論 ④運営管理 ⑤経営法務 ⑥経営情報システム ⑦中小企業経営・中小企業政策
設置科目・重要関連科目名	企業と会計 会計学 簿記論 税務会計 租税法 管理会計論 会計監査論 原価計算論 企業統治法 有価証券法 (以下、「論文式試験」) ⑤選択科目関連) 経営学総論 経営管理総論 経営戦略論 戦略的経営論 市場と経済 基礎ミクロ経済学 応用ミクロ経済学 基礎マクロ経済学 応用マクロ経済学 経済政策論 財政学 地方財政論 租税論 金融論 国際経済学 現代民法総論 物権法 債権法総論 債権法各論 統計学概論 基礎統計学 統計学 応用統計学	企業と会計 会計学 簿記論 税務会計 租税法 財政学 地方財政論 租税論	現代民法総論 物権法 債権法総論 債権法各論 市場と経済 基礎ミクロ経済学 応用ミクロ経済学 基礎マクロ経済学 応用マクロ経済学 経済政策論 財政学 金融論 国際経済学 企業と会計 会計学 簿記論	市場と経済 基礎ミクロ経済学 応用ミクロ経済学 基礎マクロ経済学 応用マクロ経済学 経済政策論 財政学 金融論 国際経済学 企業と会計 会計学 簿記論 管理会計論 経営分析 会計監査論 原価計算論 経営学総論 経営管理総論 経営組織概論 経営組織各論 企業財務論 企業統治法 有価証券法 イノベーション論 ベンチャービジネス論 経営戦略論 戦略的経営論 経営情報論 経営情報システム論 中小企業論

(注記)

*1 試験制度は変更されることがあります。受験資格・試験科目・試験免除等、各種試験制度の詳細については、下記のホームページを参照するなど、各自で確認してください。

【公認会計士】	金融庁ホームページ	http://www.fsa.go.jp/
	日本公認会計士協会ホームページ	http://www.jicpa.or.jp/
【税理士】	国税庁ホームページ	http://www.nta.go.jp/
	日本税理士連合会ホームページ	http://www.nichizeiren.or.jp/
【不動産鑑定士】	国土交通省ホームページ	http://www.mlit.go.jp/
	日本不動産鑑定士協会連合会ホームページ	http://www.fudousan-kanteishi.or.jp/
【中小企業診断士】	中小企業庁ホームページ	http://www.chusho.meti.go.jp/
	中小企業診断協会ホームページ	http://www.j-smeca.or.jp/

*2 設置科目名からは「I・II」の区分を外しています。また、隔年開講科目も含まれます。

*3 どの授業科目も資格試験対策に特化してはならず、上記対照表はあくまでも参考資料です。

経済学会紹介

本会は、学術研究およびその発表を通じ社会に寄与することを目的とし、50年以上の伝統を誇る学術団体で様々な事業を行っています。

学術講演会

経済学会主催の学術講演会は、外部講師を招いて年に4回開催されます。これらの講演会抄録は、『高崎経済大学論集』に掲載されています。

第1回学術講演会

「中国明清時代文学と商業」

講師：大木 康氏
(おおき やすし)

国立大学法人東京大学東洋文化研究所教授・
所長
平成24年6月15日(金)



第2回学術講演会

「群馬の養蚕と暮らし」

講師：板橋 春夫氏
(いたばし はるお)

國學院大學兼任講師・日本民俗学会会員
平成24年10月15日(月)



第3回学術講演会

「外国人移民が受け入れ国に与える影響について」

講師：Nicola Coniglio 氏
(ニコラ コニーリョ)

パーリ大学准教授
平成24年10月16日(火)



第4回学術講演会

「地域金融機関としての信用金庫の役割」

講師：森 映雄氏
(もり てるお)

早稲田大学名誉教授
平成24年12月11日(火)



記念講演会

平成25年1月16日（水）

退職記念講演会

「中心地理論の内容・意義」

講師：北條 勇作氏
（本学経済学部教授）



平成25年1月30日（水）

退職記念講演会

「経営情報の学問的探究」

講師：石川 弘道氏
（本学学長）



研究会

会員による定期研究会で、年間2～3回開催されます。教員・学生、専門分野の垣根を取り払い、熱心な議論が展開されます。

第1回研究会

平成24年7月10日（火）

「支配株主による会社支配をめぐる法的問題
—スウェーデン法を参考として—」

報告者：尾形 祥 講師
コメンテーター：谷口 聡 准教授



第2回研究会

平成24年12月4日（火）

「90年代スウェーデンにおける
財政再建過程について」

報告者：秋朝 礼恵 講師
コメンテーター：加藤 健太 准教授



第3回研究会

平成24年12月11日（火）

「中小企業の国際化 —事例を通じた検討—」

報告者：清水さゆり 准教授
コメンテーター：佐々木 茂 教授





『高崎経済大学論集』刊行・配布

専門学術誌『高崎経済大学論集』は、年4回発行しています。卒業論文執筆時の参考文献にもなります。

「学生向け学習・研究支援プログラム」の助成

論文の読み方の徹底指導、TOEICハイスコア獲得に向けた勉強法など、日常の学習に直接役立つプログラムの講師招聘に関し、経済学会が補助金を出しています。



- ・平成24年5月2日 「第6回読み方指導講座」
- ・平成24年6月12日 「医療・介護分野における経営の現状」
- ・平成24年7月2日 「人生の日曜日～大学ってなんだっけ？」
- ・平成25年1月26日 「ジョジョの奇妙な超越論的座談会
アートとしてのポップカルチャー」

学生懸賞論文の募集

学生(学部生・博士前期課程大学院生)を対象とする学生懸賞論文を募集しています。

平成24年度入賞論文

- ・銀 賞 … 論文タイトル「自動車メーカーにおけるモジュールの考察
—VWを事例として—」
- ・佳 作 … 論文タイトル「レクサス 日本市場への参入
—日本市場でのプレミアムブランドの構築—」
- ・佳 作 … 論文タイトル「日本における非伝統的金融政策の有効性」

各ゼミナールによる「卒業論文集」の印刷・刊行補助

本学部では、ゼミナールごとに卒業論文集を発行していますが、本学会から発行費の一部を補助しています。



先輩たちの卒業論文を読むことができます。図書館2階に配架されていますので、閲覧可能です。(但し、すべてのゼミではありません。)





秋朝 礼恵 准教授

【あきとも あやえ】

東京大学経済学部卒、人事院勤務を経て、早稲田大学大学院博士課程満期退学。修士（学術）。音楽なら中島みゆきとラフマニノフ。小説なら山崎豊子と宮本輝。

- 社会保障原理
- 社会保障制度論
- 社会政策論 II

どんな社会で暮らしたい？

研究テーマ

スウェーデンと関わる約15年。最も長く研究しているテーマは保育政策です。救貧対策として始まった「保育所」は、いまや生涯学習の最初のステップに位置付けられ、「就学前学校」として教育政策の範疇にあります。これまでの長い歴史のなかで幾度も改革が行われてきましたが、私の関心は、「なぜ、その改革が可能だったのか」「どのようにその改革案が生み出されたのか」にあります。一つの施策が生まれてから、実行に移されるまでの過程に焦点を当て、保育政策（スウェーデンの現実に即せば「教育政策」ですが）を研究しています。

大学に入るまでは、顕微鏡のなかの小さな世界が大好きでした。人為が入り込まないミクロの世界の秩序ある美しさが好きでした。一方、政治の世界、例えば政治家の討論番組は本当に苦手でした。ところが不思議なもので、公務員生活を経たせいか歳を重ねたせいか、利益の表出や調整に関心をもつようになり、大学院では政治学を学びました。

私がスウェーデンをフィールドとするのは自分の価値観に合致するところがあるからです。授業では主に社会保障を担当していますが、社会保障を学ぶことは、自分の価値観について考えることでもあります。社会保障制度の体系は国によって異なっており、そのありようは、その国がよってたつ基幹理念を反映しているといっても過言ではありません。社会保障を学びながら、自分が理想とする社会のありように思いを巡らせる過程で、自分が重きを置く価値が何かに気付くでしょう。

ゼミの内容

社会保障または社会政策の範疇でゼミ生各自が関心のあるテーマを設定し、研究します。どの国や地域のどんなテーマを設定するかは自由です。2年生後期の基礎演習では「読む、書く、発表する、質問する」ことに重きを置きます。特に「発表する、質問する」ことは、少人数学習であるゼミの場では重要です。質問は「高度なこと」や「格好いいこと」でなくていい。「素朴な疑問」が考えるヒントを与えてくれることが多くあります。また、「不思議だ」という好奇心をもつことも大事。「当たり前」と万人が納得できることなど、世の中にはそうそうありません。

秋朝ゼミは2011年から開講したゼミで、社会保障制度をメインの題材に毎時間二人ずつの発表を行っています。ゼミは単に問題意識を持つだけでなく発表の仕方を学んだり、他者の意見に耳を傾けることができる良い機会となります。先生も明るく気さくな方なので、皆で仲良くゼミに取り組むことができます。

秋朝ゼミ1期生

ゼミ生のひとこと



阿久津 由佳 准教授

【あくつ ゆか】

上智大学外国語学部英語学科卒業後、シティバンク、群馬県庁に勤務。その後スタンフォード大学大学院で外国語教育を専攻し修士号を取得。趣味は映画観賞、旅行。これまでに訪れた国は約30カ国。



- Current English 3・4
- ビジネス・コミュニケーション・スキルズA・C
- メディア英語に見るアメリカ社会と文化I・II

研究テーマ

「仲のいい友人」と話するときと「知り合い程度の人」と日本語で話するとき、皆さんは同じ話し方をしますか？ 伝えたいことが同じでも言い方を変えますよね。では、英語ではどうでしょうか？「英語ってフランクでしょ？ 敬語ないし。あんまり変わらないんじゃないの？」と思った方もいるのでは？ いえいえ、英語でもやっぱり違ってくるんですよ！ 丁寧な言い方もちゃんとあります。私の研究テーマは「語用論」というもので、とても大雑把に言うとなんな「話し方・伝え方」を研究するものです。

言葉を使うとき、私たちは文法や語彙や発音の知識（言語知識）だけでなく、その言語社会のルールやマナー、決まった言い回しなどの知識、つまり「語用論的知識」も使っています。例えば日本語だと「目上の人には敬語で話す」というのもその一つです。これらのルール等は言語や社会によって違うことが分かっています。例えば、アメリカ英語では「目上」だからではなく、むしろお互いの「心的距離」によって丁寧表現の使われ方が変わると言われています。つまり、きちんとした言語コミュニケーションのためには、言語知識と語用論的知識の両方が必要なのです。

私は特に外国語学習者の語用論的能力とその習得に興味を持っています。というのも、社会に出て外国語を使うときには語用論的能力が絶対に必要になるにもかかわらず、文法や語彙を学ぶことによってそれが身に付かないからです。ところが、これまでの外国語教育は言語知識の指導に偏り、語用論的能力に関してはほとんど触れてきませんでした。私はこの問題点の改善を目指して研究をしています。

英語の敬語!?
見えない言葉のルール「語用論」について



安達隆史 講師

【あだち たかし】

新潟市出身。新潟大学理学部数学科卒業後、東北大学大学院理学研究科（気象学専攻）に進学、博士課程在学中に第12次日本南極地域観測隊（気象研究担当隊員）に選ばれ、南極昭和基地にて1年間の越冬観測（約40年前のこと）。帰国後、財団法人日本気象協会（現在、池袋のサンシャイン60ビルの55階）に就職。理学博士（東北大学）。山梨大学教育人間科学部理科教育講座・地学分野の教授に転身し、定年退職後、高崎経済大学経済学部非常勤講師5年目。

- 地球科学
- 環境科学

「生命の源は宇宙からやって来た。」
という説がある。

研究テーマ・担当科目

「君たちは、宇宙人である。たまたま、天の川銀河・太陽系第3惑星に住んでいるだけだ。」と言われたらびっくりするだろうか。宇宙にはたくさんの星があるので、その中には地球に似た惑星がきっとあるだろう。地球以外にも生命体がいると考えるのが普通である。「宇宙経済学」というものがあるかという学生の問には、宇宙人と交易する場合、地球人の価値観が宇宙人に通用するかどうか心配であると答えた。地球人の中でさえ、互いに理解しがたい場合がある。我々は、いわゆる「常識」が生活空間に規制されていることに気付く必要がある。例えば、北風は寒さの代名詞であるが、それは北半球のことであって、南半球では、北風は温かさの代名詞なのである。また、気象衛星や通信衛星には静止衛星と呼ばれるものがあるが、呼び名に反して静止していない。実は、地球の周りを地球の自転に合わせて回転しているので、地球上の人からは衛星が静止しているように見えるだけなのである。このように、立場を変えた物の見方が必要になるのは、理系文系を問わないと思う。さらに、経済大学でのサイエンスの講義は何に役立つかと聞かれたら、企業や国が、今、将来を見据えて、何にお金を使うべきなのかを判断する時に自然科学の知識と科学技術への展望が必要になると答える。

私の専門は「気象学」であるが、もっと幅広く地学や環境問題に関心があり、大気汚染の研究もしている。講義は、前期に「地球科学」、後期に「環境科学」を担当している。「地球科学」では、まず地球をとりまく環境を知るという意味で、宇宙、銀河系、太陽系、惑星、地球、磁気圏、大気圏、水圏、地圏、という順番で講義を行い、宇宙の中では、地球が特別な存在であることと、ありふれた存在であるという複眼的思考を指導する。「環境科学」では、地球温暖化、オゾン層破壊、大陸間大気汚染、国内の大気汚染、環境アセスメント、放射線、エネルギー問題、局地気象など身近な環境問題を扱う。地球環境を観測している南極観測隊での越冬経験談や発電所建設に関わる環境アセスメントの審査経験を適宜取り込む。

阿部 圭司 教授

【あべ けいじ】

新潟市生まれ、特に考えもせずに地元の国立大に進学。バブル景気で日本中が浮かれています、何かの間違いで東京の大学院に進む。卒業後、運よく本学でお世話になることに。新潟→東京→群馬と高崎〜上越線沿線が生息域。専門は証券市場分析、企業財務、コンピュータ・リテラシ。



●企業財務論I・II
●デリバティブ論

研究テーマ

(1)新規公開株の価格形成：取引所への株式の新規公開（IPO）時、公開直後の初期収益率が極めて高くなるという現象、また、新規公開株を長期で観察すると低パフォーマンスとなる現象が観察されています。これらの要因分析と投資戦略への応用が研究テーマです。

(2)利益予測情報と株価：経営者や証券アナリストによる企業業績（利益）の予測は市場参加者にとって重要な情報源の1つです。彼らの出す情報の精度と予測改訂行動、また予測情報と株価の反応を検証すること、その利用が研究テーマです。

(3)企業価値評価：会計数値に基づいて求められる企業価値の算出方法に関心があります。求められた価値は株式・債券投資、信用リスク評価・貸出審査、M&A・リストラクチャリング時の買収・売却価格の基礎など、多くの実務上の用途を有しています。この精度を向上させる手法の構築が研究テーマです。

ゼミのテーマ

ゼミで学ぶ内容はコーポレート・ファイナンス（企業財務）と呼ばれる分野です。資本調達と投資プロジェクトの評価、利益配分、資金管理、企業評価等、企業の財務活動（資金の流れ）に関わる分野で、経営学、会計学、金融・証券、法学等、様々な分野にまたがる企業活動にとって重要な分野です。学んだ知識は、金融関係では十二分に生かせると思いますが、すべての業種において、財務担当、米国流に言えばCFO（Chief Financial Officer）などの要職に就く人材には必須といえる領域となります。

2年次では、会計学と経営分析の基礎を学びます。同時にコンピュータを利用したレポート・論文作成、プレゼンテーション手法の習得を目指します。

次に3年次では、企業価値評価に関するテキストを輪読します。企業の経営戦略、会計情報を元に企業価値を評価する複数の手法を学びます。また、平行して市民向けセミナーの企画・運営を証券会社と協同で行っています。

4年次は主に卒業論文の作成です。テキストを輪読と平行して論文作成指導を行います。

企業評価、企業財務の研究

ゼミ生のひとこと



証券論は株式・債券・投資信託の基礎が学べる上、卒業生（阿部ゼミ卒）の話が聞けたり発展的な内容も学習できたりするので、阿部ゼミ入門者にとってはおススメの講義です。企業財務論に関しては、ゼミ生の私でさえ難しいと感じる講義なので、それなりの覚悟をもって真剣に取り組むことをおススメします。阿部先生に関しては、分け隔てなく誰に対しても平等に接してくれるという印象があります。

阿部ゼミ12期生



天羽 正継 講師

【あもう まさつぐ】

1978年生まれ。千葉県出身。慶應義塾大学卒業。東京大学大学院博士後期課程単位取得退学。専門は財政学、地方財政論、財政金融史。趣味は（いまだき）CD収集（特にジャズやソウル、あと落語も）。

- 財政学Ⅰ・Ⅱ
- 市場と経済

財政の歴史と未来を考える

財政とは、国や地方自治体などの政府が、国民や住民から租税を徴収し、主にそれを財源としてサービスを提供する活動のことです。財政は私たちの生活に実に深く関わっています。例えば、皆さんの多くは公立学校に通った経験があると思いますが、それらは地方自治体が設立したものです（この高崎経済大学もそうです）。また、毎日利用する道路は、国や地方自治体が舗装したものです。さらに、皆さんが社会人になれば、所得税や社会保険料を支払うなど、財政と関わる機会はますます増えてくるでしょう。財政なくして私たちの生活は成り立ちません。

そのため、財政は常に大きな政治的争点になります。「政治に何を望むか」といったアンケートを実施すれば、「社会保障の充実」が必ず上位に来ます。また、財政は経済にも大きな影響を与えます。最近ではEU諸国の財政赤字がユーロ危機の引き金となり、アメリカの「財政の崖」が景気に大きな影響を与える可能性が懸念されました。さらに、社会の変容が財政に与える影響も見逃せません。近年、少子高齢化の進行によって、年金などの社会保障制度の持続可能性が盛んに議論されています。

このように、人々の生活に深く関わり、政治・経済・社会との間で相互に影響を及ぼしあう財政について考えるのが、私の専門とする財政学です。その中でも私は、主として日本の財政の歴史について研究してきました。なぜ歴史を研究するかというと、政治的・経済的・社会的要因が絡み合いながら変化する財政を明らかにするには、歴史的な視点が有効だと考えるからです。例えば、日本は現在、先進国の中で最大の財政赤字を抱えていますが、その要因は、景気の低迷、公共事業の拡大、複雑な予算制度、少子高齢化、増税を忌避する社会的意識など様々です。これらは同時にではなく、異なる時点において生じ、相互に絡み合いながら巨額の財政赤字をもたらしました。

ですから、その仕組みを明らかにしようとするならば、歴史的に、つまり時間をたどりながら考えなければいけません。

しかし、歴史的に考えることの目的は、単に過去を振り返ることだけではありません。現在ある財政制度が形成された背景には、必ず歴史的な経緯があります。その経緯を知らなければ、私たちは現在がどのような時代なのかを知ることができず、あるべき新しい制度を作ることではできません。また、人間の能力には限界があり、過去に数多くの「失敗」がなされてきました。そうした過去に学ばなければ、私たちは同じ過ちを繰り返すことになるでしょう。つまり、未来を創造するために歴史を学ぶのであり、そうした視点から財政について研究していきたいと考えています。

池野 正晴 教授

【いけの まさはる】

東北大学大学院教育学研究科博士課程前期課程修了。大学附属の学校に勤務の時には、毎年の研究会で、2日間連続の授業公開をしました。全国から教師が参加し、授業後、協議会をもちます。1日目の子どもたちの出方で授業計画は大きく修正を迫られ、翌日の授業までの準備はたいへんでした。学級通信も毎年まとめて冊子にしたものです。現場でのよき思い出です。



- 教育哲学
- カリキュラム論
- 教育方法学
- 教育実習Ⅰ・Ⅱ
- 教職実践演習

1 学校における授業づくりを考える

- 教育においてどのような世界観や人間像をめざすべきであろうか。
- どのような力をつけるために、多くの文化遺産からどのような内容を教育の内容として考えていくべきであろうか。
- 考える力や創造力を高めるために、どのような授業づくりをしていったらよいだろうか。

このようなことを明らかにするために、これまで、教育人間学（教育哲学）や授業論、教科教育学の研究を重ねてきました。

特に、授業づくりにおいて、多様な考えを生み出す授業を構想し、その多様な考えをどのようにとらえ、どのようにまとめていけばよいのかについて考えています。授業のコミュニケーション活動について、妥当性、関連性、有効性、自己選択等の用語を用いて授業づくりについて考えています。これまで、フィンランドやアメリカ、イギリス、ドイツ、スペイン、シンガポール、オーストラリア、中国等で、いくつかの学校において様々な授業を見てきましたが、この点についてはまだ弱いように思いました。

2 考えることなくして身につくものなし

教職科目を中心に担当しています。教職科目は、教師としての基本的な力量をつけるものです。どの授業にあっても、できるだけ実例を挙げながら具体的に考えてもらうように展開しようと腐心しています。「実際に頭を使って考えることなくして、身につくものなし」です。教室内を回りながらの対話型の授業をめざしています。

3 合同ゼミで本当にやりたい研究を

一つのゼミを3年生と4年生が合同で運営していく形をとっています。4年生は、下級生をリードし、3年生は、自分たちの発表や係の仕事等について、上級生よりアドバイスを受けながら、いろいろなことを吸収することができます。3年生の輪読と4年生の卒業論文発表を通して、お互いに刺激を受け、追究を深めていきます。両方の立場も体験でき、学年間の縦のつながりも強くなります。

研究テーマも特に限定することはないで、自分が本当にやりたいテーマについて深めてもらい、そこからお互いが学び合うようにしています。いろいろな考えをもっているゼミ生がお互いに議論し合うことをたいせつにしています。

教師修業は果てしなく

ゼミ生のひとこと



池野先生の専門は教育学であり、教育学部のない高経大において教育者を志す者にとってなくてはならない存在です。

ご自身の学校現場での教師としての体験を授業に活用される点も先生の特徴のひとつです。教育に興味や関心があれば、先生のお話を伺うだけでも刺激的なお話が聞け、確かなプラスになると思います。

池野ゼミ18期生 ゼミ長 鈴木 史哉



石井 久子 教授

【いしい ひさこ】

慶応義塾大学を卒業後、日本 IBM 株式会社勤務を経て、コロンビア大学大学院に留学。最近フランス製の圧力鍋を購入した。このお鍋で料理すると時間を短縮できるが、煮込み料理はじっくり時間をかけた方がやはり美味しいようだ。学ぶことにも近道はなさそうだ。

- 労働経済学Ⅰ・Ⅱ
- 国際雇用論Ⅱ

労働市場について学ぼう

その昔、ニューヨークにあるコロンビア大学院に留学した。その当時、大学のゼミの指導教官、従兄弟、そしてIBMに勤務していたときの上司もニューヨークに在住していたので、それはとても快適な海外生活であった。

あるセミナーで、Gary BeckerのHuman Capitalを精読する機会を得た。その本からある種の衝撃を受けたことを今でもはっきりと記憶している。後にGary Beckerは経済の分野でノーベル賞を授与された。この本がきっかけで、人的資本の視点から労働市場を分析することとなる。

初めは、企業規模間におけるキャリア形成の違いに注目して分析に着手した。その後、男女間のキャリア形成や処遇の違い、若年雇用、最低賃金や失業について、分析の対象を広げていった。昨年、オーストラリア国立大学との共同研究において、"The changing role of skill, wages, employment and education in the Japanese labour market, 1985-2005"を発表した。

現在は、失業における男女間の違いに着目している。国際比較で見ると、女性の失業率のほうが男性より高いのが一般的だ。ところが、アメリカでは1980年代に、男性の失業率が女性より高くなる傾向がみられた。その理由として、景気に敏感な製造業において男性がより多く働いていることがまず理由として挙げられた。それから、サービス業において雇用が力強く創造され、また特に不況に強い分野における女性の就業が伸びたからだそうだ。ところが、1990年代の不況では、また女性の失業率が男性より高くなった。

その理由の一つとして、人材派遣の分野での不況が深刻で、女性とその影響を強く受けたという。アメリカでもお正月に派遣村が出現したのだろうか。

講義では、労働経済学と国際雇用論を担当している。労働経済学ではミクロ・マクロ経済学の視点から雇用を分析して、日本の労働市場の現状を理解することを目的としている。国際雇用論では、世界の労働市場と日本の労働市場を比較検討することから、日本の雇用について理解を深めることを目的としている。

ゼミでは2年の後期は経済学の基礎を学び、3年の1年間は英語のテキストを使い学習しました。初めは、英語で経済を勉強することはとても難しいように思われましたが、3年の後期になると英文にも慣れ、英語と経済の実力がついてきたことを実感できるようになりました。石井久子ゼミは英語と経済を真剣に勉強をしたい人にお勧めです。

石井ゼミ11期生 斎藤 正志

ゼミ生のひとこと



石渡 華奈 准教授

【いわたり かな】

東京外国語大学英米語学科卒業後、千葉県高等学校英語教諭。東京外国語大学大学院博士後期課程満期退学後、東海大学外国語教育センター専任講師、文京学院大学外国語学部准教授を経て現職。猫をこよなく愛し、趣味は猫。猫グッズや猫本コレクターです（本当は生きている猫に囲まれて暮らしたい）。



- 外国語学習の理論と実践Ⅰ・Ⅱ
- キャリア イングリッシュⅠ・Ⅱ
- 英文法Ⅰ・Ⅱ

わたしの専門は大きな分類では「英語教育学」という分野になりますが、この分野ではあまり主流ではない（むしろきわめてマイナーな）領域、テーマに関心を持っています。たとえば、母語の表記体系は学習対象言語の語認知・語習得にどのような影響を与えているのだろうか、「読みやすい」ってなんだろう、より良い英語教材開発のためのレイアウト論を構築できないだろうか、などです。“文字”つまり書き言葉の物理的な側面にどうにも魅力を感じてしまうのです。

英語学習を始めた子どもたちは、口頭であいさつや単語ゲームなどをしていう期間はそれほど大きな違いはないのに、読み書きの学習を始めた途端にどんどん能力差（学力差）が出てきてしまうといわれます。それはなぜなのでしょう？

母語ですでに獲得した知識や技能、習慣が第二言語の習得に影響を与えることを「転移」といいますが、実は皆さんの英語学習でもさまざまな転移が起こっています。皆さんは初めて見る英単語を発音することはできますか？英語の発音は難しいですか？単語のつづりを覚えるのはたいへんですか？それはなぜでしょう？

これらの「なぜ？」を知ることは、「じゃ、どうする？」をみつけるためにとても役に立ちます。脳の働きや記憶のメカニズムを知れば、単語学習は努力と根性だけでは報われないということがよくわかります。単語の意味を必死に覚えても、それだけでは使える英語は身につかない。ではなにが必要かということが、言語情報処理のしくみや知識の構造などを知ると見えてきます。「外国語学習の理論と実践Ⅰ・Ⅱ」の授業では、皆さんにこの「なぜを知る」ことによって、日常ほとんど英語を使う必要性のない環境にある者が英語を身につけようとする場合の効果的な学習法を一人ひとり探ってもらいたいと思っています。必修英語科目では、履修を終えても一人で続けていけるようなトレーニング方法を身につけてもらえたらと思いメニューを考えています。

英語というツールが使えると、得られる情報やサービスの幅と選択肢が増えます。知識が増え、情報やサービスをどう利用するかという知恵が働きます。英語は嫌いと言っていた人も、英語が使えるようになりたいとやる気のある人も、違う方向から英語（学習）を眺めてみませんか。

外国語学習の「なぜ？」を知る

母講生のひとこと



外国語学習の理論と実践は記憶の原理を理解し、どのように日常の英語の学習に生かしていくかを探究する内容です。講義は英語で進められ、積極的な講義への参加及び発言が求められます。本学の中でも英語で進められる講義は珍しいので興味をもった方は是非履修してみたいかと思いますが、他の講義とは違ったおもしろさを実感することができます。

2009年入学 稲毛 和磨



●社会心理学

井出野 尚 講師

【いでの たかし】

高崎経済大学をはじめ、複数校で心理学関連科目の非常勤講師をしています。近年では他領域との共同研究が多く、脳機能画像や眼球運動なども使います。好きなものは、コーヒー、グミなど、たまにサッカーもします。

意識化できないこころの探求

「どうしてあの時あんな事をしたのだろう」、とか、「あの人の言っていることの本当の意味は何だろう」、といったことを、皆さんも一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。日常的に感じる心に関する問題をどのように考えれば良いのか？ 私が心理学へ興味を抱いたのは、そうした素朴な疑問がスタート地点でした。

私たちが心の問題を考える時、それは他の人がいる状況についてであることが多いと思います。そして、他の人がいる状況を社会と位置づけるなら、心の問題は社会と切っても切れない関係を持つということになります。日々体験する心に関する不思議を研究したいと思っていた私にとって、社会心理学へ興味を抱いたのは自然なことだったと思います。

私たちの日常を観察していると、分かっているやってしまうこと、あるいは、知らず知らずのうちにやってしまうことなど、思うようにいかないことが多々あると思います。私たちの心の働きには、自分では意識化できない部分があるようです。私が一貫して扱ってきたテーマは、潜在的認知と呼ばれています。ここでいう潜在とは、本人が意識できないといった意味です。また、認知とは、認識に関わるシステムやプロセスを指します。

一つ例を挙げます。「90%の確率で成功する手術」と言われた場合と、「10%の確率で失敗する手術」と言われた場合では、手術への印象が全く変わってしまうのではないのでしょうか。この現象は、ノーベル経済学賞を2002年に受賞したダニエル・カーネマンが発表したもので、フレーミング効果と呼ばれています。我々の判断は、表現の仕方といったものに、知らず知らずのうちに影響を受けているのです。

潜在的認知は、主に社会心理学や認知心理学で検討されてきましたが、人の振る舞いを考察する、様々の領域との共同研究を可能とします。そのため、私の研究領域は経済学や消費者行動研究、臨床心理学や工学など、多岐に及んでいます。

講義では、様々な社会場面での人の振る舞いの特徴を紹介して行きますので、一緒に日常的な問題を考えていきましょう。

誰もが一度は経験したことのあることが、どんな心の働きによるものだったのか。井出野先生の社会心理学は新鮮かつ、共感を得られる話が満載です。講義の内容を一方的に聞くだけではもったいないです。見た目はとっつきにくい印象ですが、先生は研究者にしては少し変わった経歴をお持ちなので、僕らと近い目線で話してくださいます。いろんな意味で「おもしろい勉強」ができました。

2008年入学 鎌田 浩平

段講師のひとこと



伊藤 宣広 准教授

【いとう のぶひろ】

1977年生まれ。京都大学博士（経済学）。担当科目は経済学方法論、学問研究入門。専門はケンブリッジ学派の経済学。趣味は音楽鑑賞。好きな音楽家はベートーヴェンとワーグナー。



●学問研究入門
●経済学方法論Ⅰ・Ⅱ

伊藤ゼミでは主に、過去から現在に至る様々な経済学説、経済思想を勉強しています。経済学部ゼミの中ではやや歴史寄りの内容ですが、合宿では時事的な経済問題も扱います。なぜ不況が起こるのか、不況に対する処方箋としてどのようなものが考えられるか、といった問題を議論する上で、過去から学ぶべきことはたくさんあります。

経済学部の教育システムは基本的に講義とゼミの二本立てですが、ゼミでは「ゼミでしかできないことをやる」という点に重点を置いています。知識を得るだけであれば、講義でも間に合いますし、そもそも自分で本を読んで勉強すれば済むことです。

ゼミの基本スタイルはテキストを決めて輪読・討論するという古典的なものです。それが上手に機能するためには、参加者にもそれなりの努力が求められます。発表された内容をもとに討論するといっても、ある程度の予備知識がないと議論にならないからです。ゼミの進行にあたっては、発表者にばかりスポットライトが当たりがちですが、むしろフロアで発表を聴く側の態度もそれに劣らず重要です。ただ教室にやってきて話をきいて帰っていくだけではあまり得るものはないでしょう。能動的に参加してこそゼミですので、どの参加者も最低一日一度は何か発言することをルールにしています。良い質問が出れば議論は盛り上がりますが、的確な質問をする、というのが実はなかなか難しいのです。しかしこれを意識的に試みるだけでも確実に思考力は養われます。

ゼミは、学生の皆さんが自分の頭でものを考える良い機会であり、また、人前で話をする練習の場としても重要です。大学は社会人になるための予備校ではありませんし、大学の教育カリキュラムは就職活動に役立つことを意図して設計されているわけでもありませんが、ゼミ形式で議論の訓練を重ねることは、結果的に、今後の人生においても役に立つことが多いのではないかと思います。

私自身、まだまだ教師として未熟ですので、ゼミ生とともに成長できるように、思考錯誤中の毎日です。

過去の経済学説・経済思想から 何が学べるか

ゼミ生のひとこと



私達のゼミは指定教材の内容を、レジュメを作成してグループで発表するという形式の輪読学習を行っています。経済学の知識の吸収は勿論ですが、相手に分かり易く簡潔に発表する能力と、発表者に対して良いコメントが出来る能力を磨く事に重点を置いています。将来役立つ能力を身に付けられる様、しっかり取り組んでいます。

伊藤ゼミ2期生 宝木 祐樹



井上 真由美 講師

【いのうえ まゆみ】

岐阜県出身。博士（経営学）。

- 経営学総論
- 企業論
- コーポレート・ガバナンス

投機とプロジェクト

研究テーマ

現在わたしは、日露戦争後の企業勃興期において鋭い対照を示していた（ように思われる）何人かの財界人の生き方を理解することを通じて、その後形成されてきたいわゆる日本的経営の原型のようなものを探りあてると、というようなことをやっております。

取り上げようと考えている財界人の候補についてはまだ絞り切れていないのですが、おおまかにいえば、激しい仕手戦を繰り広げていた相場師たち、相場師から大実業家へと転身した人たち、すぐれた実業家ではあったが人間組織をうまく使いこなせなかったワンマン経営者たち、そして今も経営史にその名を残している著名企業の創業者たち、といったような感じです。

冒頭で鋭い対照と述べたのは、結局、彼らが行っているのは投機的ビジネスであるのかそれともプロジェクト（事業）であるのか、という違いのことです。前者の場合なら、利己的動機、利己的行動、短期的利益の最大化、後者の場合なら、国民経済への貢献、リーダーシップの発揮、組織の活用、などというふうの特徴づけることができるように思います。

いずれにしても、その後の日本でも後者が財界のリーダーになっていく展開を見た訳ですが、この展開をどのように整理し、どのように解釈して行くのかということが、わたしの研究にとって、非常に大きなポイントとなっております。

ゼミの内容（昨年度秋学期から今年度春学期までの内容）

（輪読）P・F・ドラッカー 『企業とは何か』

前川正雄『世界を変える「場所的経営」 一共同によるモノづくり立国の再興へ向けて一』

（夏合宿）日本企業の事例・業界研究

ゼミは輪読を中心に行います。企業それ自体、あるいは経営活動の本質を描いていると思われる本をテキストとして使用します。また、抽象度の高いテキストにもとづきつつも、個別企業の事例研究や業界研究なども同時に行っております。

担当科目「企業論」について

この授業では企業の形態や日本的経営について学んでいきます。企業についてニュースで見たりすることと繋がりがあったり、自分の見識を広げることができます。授業は具体例を使いながらゆっくり行うので全体として流れをつかみやすく理解しやすかったです。

井上ゼミ1期生 柄澤 拓弥

ゼミ生のひとこと



大石 恵 准教授

【おおいし めぐみ】

1973年生まれ。山口県出身。中国経済論・アジア経済史担当。これまで、通算で1年以上の台湾生活を経験しているからか、地元の人からも中国語で話しかけられること多数。最近、伍伯の“妳是我的花朵”にはまっている。



- 中国経済論Ⅰ・Ⅱ
- アジア経済史Ⅱ
- 外書講読Ⅰ・Ⅱ（中）

研究テーマについて

みなさんは、海外旅行の経験がありますか？その時、どの航空会社を利用しましたか？2012年、日本で格安航空会社（LCC）が誕生し、注目を集めました。LCCは、機内で提供する様々なサービスを有料にしており、必要なサービスだけ購入することが可能です。これに対して従来型の航空会社は、食事や飲み物、新聞、雑誌などのサービスを無料で提供する分、価格をより高く設定しています。さらに、共同運航便（コードシェア便）や複数の航空会社で連携して（アライアンス）路線を拡充したり、利便性を向上させてきたりしました。航空会社ごとに価格やサービスで差別化が進み、消費者の選択肢が増えた現在、「空の旅」はより身近なものとなっています。

こうした航空輸送の進展は、航空会社の営業内容や運航形態の変革だけでなく、航空機を製造する企業や、各国政府・国際組織の政策によってもたらされてきました。例えば技術進歩は、航空輸送の発展に欠くことのできない要因の1つです。1950年代末に到来したジェット時代は、機材の高速化、大型化への転換点となりましたし、1970年代に就航したジャンボ機（ボーイング747型機）は、空の大量輸送時代の立役者とも言えるでしょう。また、国連専門機関の1つであるICAO（国際民間航空機関）の発足（1947年4月）も、民間航空の発展に寄与してきました。ICAOでは、国際的な民間航空の運営原則や条約の作成などを行い、安全かつ円滑な航空輸送の実現に努めています。さらに重要なのが、外交という国家・地域間の問題です。各国間の利害が、民間航空路線の開設・増設、就航地の決定過程などに正の効果をもたらすこともあれば、時として、負の影響を及ぼすこともあります。

現在は、冷戦初期の台湾を対象に、国際関係や外交問題と密接にかかわる民間航空路線の拡張や、政府の航空会社育成政策について研究をすすめています。

ゼミの内容について

ゼミでは、広く中国・アジア経済について学習を進めていきます。アジアという空間的な広がりだけでなく、歴史という時間的な広がりを組み合わせることで、各国・地域への理解を深めていくことを目標としています。単に現代の中国・アジアの動向だけでなく、その背景にあるものを読み解く力を養う手助けができればと考えています。

ゼミ生のひとこと



中国の経済や政策を歴史的観点から学び、現代中国が抱える様々な問題などにも言及します。また、中国のみならず、東アジアから南アジアの各国・地域についても学べます。ゼミでの発表回数が多いので、資料作成やプレゼンテーションの練習になります。大石先生の指導は親身でとても丁寧なので、学びやすい環境です。

大石ゼミ1期生（2009年卒）

「空の攻防」をめぐる研究



大島 登志彦 教授

【おしま としひこ】

1954年群馬県生まれ。工学部や教育学部・教育学研究科に在学して学んだ後、高等学校、高等専門学校での勤務を経て、1999年から本学経済学部勤務。

- 交通論Ⅱ
- 世界地誌
- 日本地誌

公共交通や産業遺産 ロマンを感じつつ先人に学ぶ

経済学部の授業では、日本地誌と世界地誌、交通論Ⅰ・Ⅱ、そして大学院では、交通論の講座を担当しています。専門分野は、交通地理学、歴史地理学、産業考古学で、具体的には、地方の鉄道や路線バスを主体とする公共交通の変遷と地域の関わり、地域の産業史とその遺産などを題材とし、歴史を重視して地域を学ぶ視点で研究を進めています。

地域住民の足となる公共交通は、有識先人達が、明治期から昭和初期にかけて、苦労を重ね、私財も投じながら開業にこぎつけた路線が多いなかで、地方都市や中山間地域では、戦後の高度経済成長期以降のモータリゼーションの影響などによって、利用者は減少し、一部は廃止されたり、現在各地で存続の危機にあります。しかしその一方で、高崎市内の循環バス「ぐるりん」にみられるように、多くの自治体がコミュニティバスを運行し始めるなど、公共交通の重要性と活性化が叫ばれています。

群馬県における産業経済の発達の基盤にもなった製糸工業を初めとする近代初期の鉱工業は、衰退したり老朽化して取り壊された施設も多いなかで、群馬県では、富岡製糸場の世界遺産に推薦されるなど、地域の産業遺産の社会的価値が認知されるようになりました。そうした近代産業の盛衰を把握することも、経済・経営学を学ぶ上でも、貴重な指針になっていくと思います。

私の研究及び授業・ゼミナールでは、このように日本が貧しかった時代に構築されてきた公共交通や産業遺産にロマンを感じながら、先人の苦労の軌跡や時代的背景などを学びとって、それが現在の日本を構築してきた意義を認識しながら展開される調査・研究を、目指しております。

大島ゼミでは地域交通の盛衰と沿線地域の関連性などについて、実際に現地に出かけて勉強する臨地研究を行っています。学生にとって非常に難しい問題に対しても、先生から熱意あるご指導を頂き、実際に机の上だけでは分からない、五感を使って「現実」を学ぶことができました。

ゼミ生のひとこと



大島ゼミ (2011年3月卒業) 高橋 智恵

大村 和人 准教授

【おおむら かずひと】

1976年生まれ。博士（文学）。高校を卒業するまでは英文学と仏文学と中国文学のどの道に進もうかと迷いましたが、大学で様々な人々と出会い、現在の道に進みました。



- 中国語b1・b2・c1・c2
- 中国現代文化入門
- 日中文化比較

◎研究テーマについて

私の研究対象は大まかに言えば「中国古典文学」ですが、更に詳しく言えば、南朝齊(479-502)梁(502-557)時代の文学作品や文学思想ということになります。この時代は門閥貴族の繁栄に陰りが見え始めたころですが、当時の文学は所謂「中国古典」に対する一般的なイメージからかけ離れたものかもしれません。

齊梁時代に大流行したのは、女性の媚態を主題とした「艶詩」でした。後世の人々はこれらの作品が類腐的で千篇一律だとして厳しく批判し、そのような作品が量産されたのは作品制作の担い手であった皇帝・皇族・貴族とその取り巻きたちが類腐的な生活を送っていたからであり、それらの作品が「中国文学の「伝統」から乖離したものだ」と考えてきました。更に、それらを中国詩歌史における「黄金時代」と評価される唐(618-907)宋(960-1279)時代の作品と比較し、「未熟」「無内容」「無価値」と断定する論調も少なくありません。これらのことは現在出版されている数多くの『中国文学史』に類する書物に記されており、中国文学史上の「常識」となっているようです。

仮に「黄金時代」のような時代が過去にあったとして、それを知る現代人の眼でそれ以前の時代の文学を「未熟」だと決めつけることは簡単です。しかし、それはフェアではありません。それぞれの時代に、作者たちは彼らなりにベストを尽くして作品を制作したはずで、また、どの国のどのような文学であれ、一世を風靡したものは突然変異的に発生したものではありません。「伝統」を重視する中国では尚更です。齊梁「艶詩」も「伝統」を継承発展させた結果、生まれたものであると考えられます。見方を変えれば、このような作品の研究が、中国文学の「伝統」の中で従来の説が見落としていた一面に光を当てることに繋がるのではないのでしょうか。また、齊梁「艶詩」は和歌などにも大きな影響を与えたとされるだけに、その本質の再検討は日本文学を研究する上でも看過できません。

以上の問題意識から出発して資料を洗い直し、作品そのものや、作品制作の場、作者たちの文学思想、そして後世における受容などの多角的な視点から、齊梁「艶詩」の本質とその東アジア文化史における役割を再検討しています。「常識」に挑むことはスリリングですが、研究の方法には慎重を期すように心がけています。

◎担当科目について

「私の授業全般について」

授業中、質問は随時受け付けていますが、各回の授業で小アンケートを実施し、授業の内容や中国のことに対する感想や疑問などを受講生のみなさんに自由にお書きいただき、次の授業の冒頭でそれにお答えしています。

「中国語」

1年次の授業では基礎的な事項を、2年次ではより高度で実用的な事項を受講者のみなさんが身につけることを目指します。他に、教科書の内容に即して中国の習慣や年中行事なども紹介します。

「中国現代文化入門」

この授業では最初に中国近現代文化史や中国の憲法、また中国の国家の仕組みなど、現代中国の文化を理解する上で必要な基礎知識の習得を目指します。その後で文学や音楽、映画などの各トピックを取り上げ、幾つかの資料や先行研究を参照しながら、現代中国の文化と社会における諸問題について考えていきます。

「日中文化比較」

「中国現代文化入門」が主に近現代中国の文化事象を取り扱うのに対して、この授業では近代以前の日本と中国の様々な文化事象を取り上げます。幾つかのテーマを設定し、それらに関する日中の資料や先行研究を参照しながら、日本と中国の文化の共通点や相違点を探っていきます。

「常識」を疑う

受講生のひとこと



「中国語」

丁寧に教えてくれたので、とても分かりやすかったです。
(2009年入学)

「中国現代文化入門」

中国の歴史や文化、今まで自分が知らなかった事を多く学び取ることが出来た。
(2006年入学)

「日中文化比較」

日本と中国の違いを学んできましたが、海を隔てただけでこんなに考え方が違うのかと面白く学べました。
(2007年入学)



岡田 和彦 教授

【おかだ かずひこ】

広島県出身。東京大学大学院修了。経済学博士（東京大学）。「資本主義経済の理論」「経済システム論」担当。若者は、よく学びよく遊ぶというメリハリのきいた生き方をするなかで成長する、との信念は、ナイーブだとの評もある。

- 資本主義経済の理論Ⅰ・Ⅱ
- 経済システム論Ⅱ

希望を与える経済システム

研究テーマ

普通の人々の希望を育み、現実の社会に活力を与えるような、新たな経済システムとはどのようなものなのか。このような問題意識にもとづいて、かつての「社会主義」国とりわけソ連・東欧諸国の徹底した市場経済への移行、つまり資本主義経済へのシステム転換について、理論的および実証的に分析してきました。最近ではその関心を、今日の中国経済さらには日本経済の現状にも拡大しています。

担当科目

「資本主義経済の理論Ⅰ・Ⅱ」では資本主義経済の基礎理論を講義します。それは、市場経済・資本主義経済の基本的な仕組みと運動のありかたについて、一般的に、つまりいかなる国の資本主義経済にも基本的には共通するような経済システムとして、理論的に説明するものです。「経済システム論Ⅰ・Ⅱ」では「資本主義経済の理論」で習得した基礎理論にもとづいて、1980年代から1990年代にかけてソ連・東欧諸国や中国で展開された市場経済への移行過程のより具体的な現実を、理論的に解明します。「基礎演習・演習Ⅰ・Ⅱ」では、市場経済がよりよく機能するために不可欠の制度であるセーフティネットとはどのようなものか、その理論と現実について研究します。こうして、われわれに希望を与えてくれる実現可能な経済システムについて、学生とともに悩み考える、という姿勢で講義・ゼミを進めています。皆さんの積極的な参加を心から期待しています。

岡田先生は、なぜか「僕は性格が悪いから」というのが口癖ですが、学生の話によく耳を傾けてくださる、とても優しい先生です。そんな先生のゼミでは、セーフティネットについて研究しています。現代のグローバリゼーションのなかで、市場経済のもたらすリスクがさまざまな領域で拡大しています。セーフティネットとは、このリスクを社会全体で共有するための制度です。その具体的なありかたについて考察することが、私たちゼミ生の課題です。

岡田ゼミ11期生（2008年入学） 三島 佳

ゼミ生のひとこと



尾形 祥 講師

【おがた しょう】

福島県出身。早稲田大学法学部卒業。同大学院法学研究科民事法学専攻博士後期課程満期退学。早稲田大学法学術院助手等を経て、2012年より現職。趣味は野球観戦。



- 会社法Ⅰ・Ⅱ
- 有価証券法

研究テーマ

私の主たる研究テーマは、スウェーデンにおける支配株主による会社支配です。スウェーデンでは、Wallenberg一族といった有力なファミリーが持ち株会社の支配株主となり、その傘下にある同国の重要な事業会社（H & MやIKEAなどがその例です）を支配する構造をとることが通例となっています。かかる支配株主が会社支配権を濫用することは稀であり、むしろ支配株主が存在するスウェーデンの会社では安定した会社支配の下で効率的かつ健全な経営が行われることが多いようです。スウェーデンにおける支配株主による会社支配権行使を適正化する法理や支配株主の責任追及法理を研究することにより、日本法への示唆を得たいと考えております。

担当科目

2012年度の担当科目は会社法ⅠⅡと商法総則・商行為法、基礎演習です。

会社法や商法を理解する上でそれらの基本的な知識や考え方を身につけることは必要不可欠ですが、それと同時に会社や「商」の世界に素朴な疑問を持つことが重要であると考えています。たとえば、会社は私たちに様々な財やサービスあるいは働く場所を提供し、社会において必要不可欠な存在といえます。しかし、会社はその巨大な「規模」ゆえに、不祥事が起こり、あるいは会社が倒産すれば、社会に及ぼす負の影響は計り知れません。こうした「必要悪」としての会社を会社法は規制していますが、それでもなお不祥事は後を絶ちません。ここで、なぜ不祥事は繰り返されるのか、なぜ監査役は代表取締役役に物がいえないのであるのかといった素朴な疑問が生まれます。もとより、そうした問題に対処するために様々な法規制や判例法理が生み出されてきており、それらを理解する必要はありますが、さらに、現行の法律や既存の判例法理にはどのような限界があるのか、それを克服するにはどのようにすればよいのかを根源に立ち返って具体的に考えるこそが法律学の醍醐味であるように思われます。学生の皆さんには身近で当たり前のことに「なぜ」と素朴な疑問を持ち、自ら調べ、自分の考えを捻り出す「癖」を大学時代に身につけてほしいと思います。

素朴な疑問から根源的な問いへ

ゼミ生のひとこと



尾形先生の“学生と真摯に向き合う姿”に惹かれて入ゼミしました。ゼミでは学生主体の活動を促す一方、初学者にもわかる授業を展開しているので、安心して積極的な活動ができます。

また、先生の講義は役員や会計経理職、銀行などの融資関連職を希望する学生にはぜひ受講を推薦したいです。

尾形ゼミ1期生 2011年入学 石井 哲也

私の夢は、pre-schoolからuniversityを一つの町として運営していくことです。

そこで、会社運営の大綱である会社法を尾形ゼミを中心として学び、know-howを構築したいです。

尾形ゼミ1期生 2011年入学 阿部 恒幸



岡田 知之 准教授

【おかだ ともゆき】

愛媛県出身。福岡大学経済学部卒業。慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程修了、博士課程単位取得満期退学。趣味は散歩。(何の目的も持たず、何も考えずにふらふらと歩くことが好きです。)

- 経済変動論
- 公共経済学Ⅰ・Ⅱ

競争のメリットとデメリットを慎重に検討すること

担当科目は、公共経済学・経済変動論で、研究分野は経済成長論です。公共経済学と経済成長論というと両者の間には関連が無さそうに思えるかもしれませんが、私には両者の間に、密接な関係があるように思えます。

1980年代以降、論じられるようになった内生的成長理論と呼ばれる考え方によれば、例えば(利潤の獲得を目指して企業によって行われる研究開発により生み出された)新技術が経済成長の原動力となりうる可能性があります。技術は、通常の財・サービスとは異なった性質をもっているため、規制緩和などの自由競争の促進を目指した政策が、新技術の開発を阻害し、経済成長を鈍化させてしまう可能性があると考えられています。自由競争が世の中に弊害をもたらす場合、規制を行うことなどにより弊害を是正する役割を政府が担うことがあり、そうした政府の役割は公共経済学の考察対象となっています。(経済成長をもたらす)新技術の開発が自由競争のもとで効率的に実施できないのであれば、状況を改善する為に、政府の介入が必要となるかもしれません。もしそうであるならば、公共経済学と経済成長論は無関係であると言えなくなるのです。

これまで私は、経済成長という観点から研究を行ってきましたし、今後もしばらくは経済成長を中心として考察を行って行きたいと考えています。しかし、心の中には、「競争は万能ではない」という問題意識をもっています。競争を促進することで効率的な経済活動を行えるようになり、より豊かな生活がもたらされるかもしれません。しかし、競争が私たちの生活を脅かす原因となるケースも否定できないのです。私は、競争がもたらすメリットとデメリットを慎重に検討するという姿勢を大切にしたいと考えています。経済学は万能ではないので、万人を幸福にする処方箋を提示してくれることはありません。しかし、

私たちの生活が少しでも豊かになるように政府がどのような政策を実施できるのかを検討することは十分に価値のあることのように思えます。そして、そのような政府の役割を考察する公共経済学は十分に魅力的なのではないでしょうか。

板書を丁寧にする先生で、説明上必要な基礎的な経済用語の解説や前回の復習もしてくれるので理解のしやすい講義をしてくれている。本人曰く、半年間ある講義のうちどの1回の講義を受けてもそれ単発で分かることを目指しているらしく、その考えが反映された結果ともいえる。また、マメな性格で区切りごとに質問はないか聞くようにしている。とはいえ、半年の講義中何度も同じ用語説明をするのもどうかと個人的には思う。

岡田ゼミ3期生 金原 健美

ゼミ生のひとこと



岡村 晃子 教授

【おかむら あきこ】

1999年より高崎経済大学で英語を担当。それ以前は、1991年から1999年まで英国ニューカッスル大学で日本語専任講師。2000年にニューカッスル大学より応用言語学で博士号 (Ph.D.) 取得。主な専門分野は学術論文分析、語用論。



- アカデミック イングリッシュ1・II
- Practical English1・2
- 言語と社会
- 言語と文化

研究テーマについて

私は経済学部で英語を教えています。経済学部で英語？ 何を研究しているのだと思うられるかもしれません。

私は、社会の中で言葉はどのように使われているのか？ 聞き手、読み手に分かってもらい、よりよい人間関係を作るために私たちはどのように言葉を使っているのか？ ということを調べています。一見漠然としてつかみどころのないテーマのようですが、実は身近に話題はあります。

例えば、友達にメールを送るとき、先生にメールを送るとき、たとえ同じ内容でも微妙に話のもっていき方が違うかもしれません。また話の内容によって、いつもの書き方と変えることがあるかと思います。友達の中でも“ちゃん”付けで呼ぶ人と、呼び捨て、苗字を使う人など結構呼び方でも違いがあるかもしれません。それはどうしてでしょうか？ 私たちは案外意識をしないレベルでも、いろいろと言葉を選んで使っているのかもしれないのです。文法的には正しくても使わない表現もあると思います。ということは、言葉って文法以外の要因も大きく作用しているということですね。

私の研究は、このような言葉の使い方に隠れたルール、使い方のパターンを調べ、社会の中で私たちがどのように言葉を使っているか、効果的な使い方とはどんなものなのかを調べています。

言葉は辞書の中に存在するものではなく、それを使う人間が新しい意味を作っていくものです。英語を使う人間の数は、英語を母語としない人々の方がずっと多くなっています。ということは、英語を変えるのは私たちなのです。そう思うと少し気が楽になりませんか？

担当する科目

2010年度はPractical English 1/2、Academic English 1/2、言語と社会、言語と文化

Practical English は英語を話す力を伸ばすことを目的としています。会社でプレゼンテーションの際に使える英語を学生が習得できることを大きな目的としています。

Academic English, 言語と社会、言語と文化は選択科目で、言葉が社会の中、大学の授業で英語がどのように使われているか紹介しています。

私たちはどのように言葉をつかっているか？



加藤 健太 准教授

【かとう けんた】

青山学院大学経営学部卒業。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。主な研究テーマは、M&Aと株主総会と総合商社の歴史分析。

- 戦前期日本経営史
- 外国経営史
- 戦後日本経営史

ぼくたちはどんな時代を 生きているか？

研究テーマ

最近、関心を持っている研究テーマは、消費社会。長期不況の中で、消費の低迷をはじめさまざまな問題に直面しているとはいえ、世界を見渡せば、日本は豊かな社会である。消費者は自分の欲しいモノだけを手に取り、買ったり買わなかったりする。それ以外のモノには見向きもしない。と、よく言われる。しかし、そうした社会は突然現れたわけではない。ほんの50年前までは、みんなが競って3種の神器(白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫)を買い求め、みんなが「マイカー」に憧れた。日本で消費社会が本格的に開花した高度成長期のことである。このように、現在の社会は長い歴史の中で形成されてきたのであり、当然、大きく姿を変えている。それは何を契機に、いかなる変容を遂げてきたのだろうか？この問いを、消費社会をキーワードに考えてみたい、と思っている。

担当科目：経営史

経営史は、企業発展のダイナミズムを描き出す分野で、そのアプローチはいろいろな側面から可能だから、その特徴を一言でいうと、“学際性”となる。戦略、組織、企業家・経営者、コーポレート・ガバナンス、製品開発、資金調達、生産システム、流通政策、広告宣伝活動など、自分の興味のある側面から興味のある企業にアプローチすればよい。もちろん、その企業の成長にとって重要な側面であることが望ましいけど。たとえば、セブンイレブン。本学の敷地内にも店舗を構える、言わずと知れたコンビニ業界のトップランナーである。

この企業のダイナミズムを描き出す時に、鈴木敏文という経営者の考え方や行動に注目してもいいし、特定の地域に集中的に出店するドミナント戦略の実態と意義に光を当ててもいいし、セブンプレミアムというプライベートブランド(PB)商品の開発プロセスを取り上げてもいいし。ただ、その際、ある一時点だけを対象にするのではなく、ある程度長いスパンをとって、その間の変化を探り出すことが大切になる。それこそが、“ぼくたちはどんな時代を生きているか？”ということを知る手がかりをくれるからである。

加藤先生の講義は、1つの企業にテーマをあてはめ、それを様々な面から研究するという、非常に興味深いものです。また、生徒に多くの発言の機会を与えてくれるため、1人1人がそのテーマについて、深く考えながら講義を受けることができます。講義、ゼミ共に学ぶことが多く、とても楽しいです。ぜひ加藤先生の講義を受講してみてください。

加藤ゼミ5期生 有志

ゼミ生のひとこと



唐澤 達之 教授

【からさわ たつゆき】

好きなものはジャズ。学生時代によく聞いたものは、歳をとった今でも聞き続けますね。デヴィッド・サンボーン、ジョン・スコフィールド、マーカス・ミラー等々、新譜が出るとついつい買っちゃいます。



●経済史概論Ⅰ・Ⅱ
●西洋経済史Ⅰ

都市の歴史

研究テーマについて

ぼくが長らく取り組んでいる研究テーマは、都市の歴史です。特にイギリスの都市を、他の国・地域のそれとの比較を意識しながら研究しています。「都市」のことを勉強していて面白いのは、多様なバックグラウンドを持つ人たちが集まり住み、お互い知らない者どうしが新たな秩序を作り出していくダイナミックなプロセスがそこにあるからです。また、「歴史」というアプローチの面白さは、昔の人が残した証拠を集めて、自分とは異なる時間・空間に生きていた人々の社会を復元していくことにあると思います。仕事柄、数百年前のイギリス人が書き残した、ほこりやカビにまみれた文書史料をたくさん扱いますが、ぼくはアレルギー性鼻炎なので、この仕事を選んで本当によかった、と今では後悔しています。

ゼミについて

ぼくのゼミでは、歴史や比較という観点を生かして、経済発展のレベルやその道筋に国・地域の間で違いがどうして生まれてくるのかについて研究しています。一昔前、西ヨーロッパ以外の地域や国は、西ヨーロッパをモデルとしてキャッチアップを目指す「後進」として位置づけられる傾向がありました。が、しかし、現在は、近年の東アジアを中心とした急速な経済成長を目の当たりにして、ヨーロッパとは異なった経済発展の道筋があるのではないかと考えざるを得ない状況にあります。そのため、ヨーロッパとアジアの比較を意識して両地域の経済発展の歴史を見直す動きが近年進んでおり、ゼミではこうした動向に留意して研究を進めています。

ゼミは、グループ研究を中心に進めています。ぼくは、ゼミを、ひとつのワークショップworkshop（工場、こうば）だと思うからです。ひとつ屋根の下で、職人＝学生たちが、それぞれの異なった技を生かしながら、ひとつのものを作り上げていくプロセスで繰り返されるコミュニケーションにこそ、ゼミの醍醐味があります。このコミュニケーションは2通りあります。ひとつは、お互いに異なる価値観・考え方をもった学生どうしのコミュニケーション。もうひとつは、自分とは異なる時間・空間に生きていた過去の人々（＝歴史）とのコミュニケーション。これらを通じて、想像力・問題発見力・コミュニケーション力を自然に身につけていってもらいたいと思います。

ゼミ生のひとこと



ゼミでは主にグループで活動を行っています。議論が横道に逸れたり行き詰ったりした時などに先生からアドバイスを受けるのですが、とても分かりやすいです。普通の講義の雰囲気とは全く違って、仲間どうして進めていく授業なので、とても有意義な時間を過ごせると感じます。サークル以外で人間関係を増やしたいという方にもお勧めします。

唐澤ゼミ14期生（2012年卒）



國分 功一郎 准教授

【こくぶん こういちろう】

1974年生まれ。千葉県出身。2008年4月より経済学部講師。専門は、17世紀哲学、フランス現代思想。東京大学博士（学術）。著書に『スピノザの方法』（みすず書房、2011年）。『暇と退屈の倫理学』（朝日出版社、2011年）。

- 倫理学
- 現代社会哲学
- 学問研究入門
- 哲学入門
- 哲学

哲学は難しいか

研究テーマについて

専門は哲学です。特にフランスの現代哲学を研究しながら、現代社会の中で我々がどう生きていくべきかについて考えています。

よく学生の皆さんから「哲学は難しそう」と言われます。もちろん哲学は簡単でも単純でもありません。ですが、それは「役に立たない」ということではありません。哲学は概念を使ってものを考えていきますが、この概念というものは私たちのものの見方を変え、新しいものを発見させてくれます。

例を挙げてみましょう。パスカルという哲学者が「気晴らし」について語っています。人間は気晴らしを求める。なぜなら人間は部屋の中で一人でじっとしていることができないからだ……。これだけのことから実に多くのことが考えられます。なぜじっとしてられないのか？ それは人間が何か余計なエネルギーを抱えているからです。人間はそれを消費しなければならない。気晴らしはそのためのものですが、その目的は余計なエネルギーを使い切ることなので、気晴らしとして行われることは実際には何でもよいことになる。

我々が「これが好きだ」と思ってやっていることも、実は単なる気晴らしかもしれない。でも、なぜ私はこれを「好きだ」と思うのだろうか？ 何かを好きであるとはどういうことだろうか？ 「気晴らし」の概念は我々に実に多くの問題を提起します。哲学は概念をもとにして様々な問題について考えていくのです。

担当科目について

担当の授業は、様々な哲学者の考えを紹介しながら、一つのテーマを追求するという仕方で進めています。最近では、暇と退屈、戦争といったテーマを取り上げています。

ゼミの内容について

ゼミは哲学の原典を精読することに主眼を置いています。本を読みながら、概念でものを考えていく訓練をしていきます。また、就職支援にも力を入れています。哲学の訓練は実社会でも様々な場面で役に立ちます。何かを理解し、説明するにあたっては概念が大きな役割を果たすからです。「哲学のゼミなのに就職がいい」のではなく、「哲学のゼミだから就職がいい」、そんなゼミを目指しています。

高経のガリレオこと國分先生をはじめ、個性あふれるメンバーが揃っている國分ゼミ。ゼミは哲学書の輪読と、各自の研究課題に関するプレゼンという形式で行われています。哲学が好きなら、じっくりものを考えてみたいひととはぜひうちのゼミへ！

國分ゼミ1期生 ゼミ長

ゼミ生のひとこと



今野 昌信 教授

【この まさのぶ】

学部卒業後、銀行、大学院、研究所を経て大学に勤めるようになりました。「怠け者の天国」という絵が好きです。バス、水泳など、少しかじりました。最近運動不足です。



- 金融論Ⅰ・Ⅱ
- 外書講読Ⅰ・Ⅱ（英語）
- 国際金融論Ⅰ

担当講義科目

「金融論Ⅰ」「金融論Ⅱ」「外書講読Ⅰ」「外書講読Ⅱ」「国際金融論Ⅰ」「国際金融論Ⅱ」を担当しています。「金融論Ⅰ」は前期開講、全学年受講できます。「金融論Ⅱ」は後期開講、同じく全学年受講できます。平成21年度までは前期集中、全学年配当の「金融論」を担当していました。4単位ですが、木曜日に1コマ、金曜日に1コマと週2日2コマ拘束されることに不満の声が大きく、前期と後期をバラバラに受講できるようにしてほしいと要望がでましたので、そのように変えました。「金融論Ⅰ」だけ、あるいは「金融論Ⅱ」だけを受講することもできるし、前期と後期に続けて受講することもできます。せっかく2つに分けたので、それぞれの特色を出そうと考えています。2012年度は「金融論Ⅰ」は金融の「制度と歴史」を、「金融論Ⅱ」は「理論と政策」をテーマにしています。高校時代に歴史が得意だった人は「金融論Ⅰ」の授業で、渋沢栄一や高橋是清などの名前がでてくると嬉しくなるのではないのでしょうか。また、図表や数字が好きな人は「金融論Ⅱ」の授業で、グラフなどで表現される金融取引の大きさや躍動感を実感するのではないのでしょうか。「外書講読Ⅰ」その他の講義科目は3・4年生が主に受講しますので、1年生の皆さんとは「金融論Ⅰ」と「金融論Ⅱ」でお目にかかりたいと思います。

ゼミナール

「基礎演習」「演習Ⅰ・Ⅱ(合同)」を担当しています。2年次後期から始まる「基礎演習」では、基礎的な統計学を学び、同時にExcelを使いながら統計解析を練習します。「演習Ⅰ・Ⅱ(合同)」では、3年次前期にマクロ経済学、後期にミクロ経済学をじっくり学びます。同時にグループ研究を行います。今年のテーマは「先端技術の製品化」、医薬品、自動車燃料など新製品開発競争をウォッチングしています。国際競争の時代です。ゼミでは「国際的な経済活動」を意識しながら研究をしています。

研究テーマ

「金融システムと経済パフォーマンスや資本の移動」に関心を持っています。

金融論の授業について

ゼミ生のひとこと



今野ゼミでは、経済分析の方法を習得し、現実を理論的に理解することを目指しています。先生はゼミ生に対して、それぞれの関心を持つ分野について、丁寧な指導をしてくれました。とてもありがたいです。私はマクロ経済学などの学習にあわせ、放送・通信の技術革新と市場について1年間報告を行いました。とても勉強になりました。

(2010年 本学大学院経済・経営研究科修士入学)
願 楠



佐々木 茂 教授

【ささき しげる】

1991年高崎経済大学専任講師、経済・地域政策両研究科担当。98年商学博士。01年教授。専門は流通システム、マーケティング。行政各種委員担当、街づくりをサポート。国際交流委員長、地域政策研究センター長、地域連携戦略室長歴任。

- 商学総論 I
- マーケティング

マーケティング 基本は現場！

『研究テーマ』：流通システムの研究で得られた社会志向性というマーケティングの知見を応用すべく、現在は地域マーケティング全般を現実の地域づくり（まちづくり、農商工連携、観光）のサポートの場面に取り入れながら研究しています。リサーチは、日本国内のみならず、北米やニュージーランドやアジアまで幅広く対象にしています。

『担当科目』：マーケティングと商学総論を担当。マーケティングは、相手の立場に立って考えることを基調に、Product, Promotion, Price, Place (Distribution Channel)の最適な組み合わせを考え、市場に提供する諸活動です。企業間、企業と政府や病院・学校あるいは農業と消費者の取引関係を考察対象とします。新製品開発から街づくりまで、取引の対象がある限り、すべての分野に応用できるのがマーケティングの強みです。講義では地域企業とコラボレーションしており、受講者には実際の新製品開発にも取り組んでもらいます。

『ゼミ』：社会科学の基本は、現場にあります。まず実物を見て、何かを感じることを、しかる後に書物や理論に触れること、そして自分がこれだと確信できた専門分野や指導者に出会えたなら、そこから徹底的に理論を学んで下さい。自分を“知りたい虫”にしてしまうことが、専門分野の興味を持続させるベストの取り組み方です。ゼミ活動は、地域（現在は、安中、甘楽富岡地域、老神、伊香保と東北被災地域）との関わりの中で具体的な活性化に取り組み、日本マーケティング協会主催の10ゼミ討論会やヤンマー論文に投稿しています。

佐々木ゼミに出会っていなければ今の僕はありません。東京の学生に憧れ、不満ばかり言っていた僕を変えてくれたのはこのゼミでした。決して課題を与えてくれるわけではありませんが、自分から積極的に行動を起こせば必ず答えが返ってきました。社会人としての基本を教えて頂いたと思います。佐々木先生は新しいものを創っていく上で、お手本のような存在です。ゼミ生は仲間であり、ライバルであり、そして家族のような存在です。1+1=2でなく、3にも4にもなる、それが佐々木ゼミだと思います。

佐々木ゼミ12期（2004年卒）

㈱電通関西支社東京第1オフィス統合メディア局統合メディア業務推進2部
入澤 健太郎

佐々木ゼミは「つながり」を大切にするゼミです。卒業から17年経ちますが、先生から「君の会社の施設見学できる？」と言われ社内調整の上、学生を吾妻発電所に招待しました。合宿への参加をはじめ、OBは「現役生の為」に協力するのが佐々木ゼミの伝統。現役生は、先生やOBの熱意に応えようと一生懸命学び、今も昔も佐々木ゼミは、パワーを発揮しています。

佐々木ゼミ3期生（1995年卒） オリックス㈱ 日比野（丸下）由佳



佐藤 綾野 准教授

【さとう あやの】

早稲田大学院経済学研究科博士課程満期退学。新潟産業大学講師を経て現在に至る。北海道別海町出身なので暑いのは苦手。趣味はアメリカドラマ鑑賞。おとめ座B型。三姉妹の長女。



- 計量経済学入門
- 計量経済学
- マクロ経済統計II

研究テーマについて

最近の研究テーマは、外国為替市場における介入の効果についての実証分析です。日本の通貨当局が、2010年9月15日に6年半ぶりとなる為替介入を行ったことは記憶に新しいところですが、実際には、為替介入の効果に関しては、研究者間でも、また新聞やニュースなどの報道においてさえも、はっきりとした統一的な結論はでていません。例えば、2003年から2004年にかけて行われた35兆円もの巨額円売り介入の後の為替レートは、介入以前の水準より、円高になっていたのは有名な話です。

そこで具体的な研究内容としては、通貨当局は、介入によって為替レート水準を望ましい方向へ操作できるのか、あるいは為替レートのボラティリティを減少させることができるのか、効率的な介入の規模、最適な介入タイミングや実行する頻度について実証面から分析を行っています。

この研究の特徴は、近年入手可能となった高頻度データ(秒単位の市場で観察される取引オーダーの全て)を使用し、理論的にはマイクロストラクチャーモデルとノイズトレーダーメカニズムに基づいている点が挙げられます。

担当科目およびゼミ内容について

計量経済学は、経済理論を実際に観察されたデータを使用して分析するためのツールを学ぶ学問ですが、ツールをいったん身につければ、その応用範囲がとても広いのが一番の魅力といえます。

マクロ経済統計は、TVや新聞で報道される経済ニュースの根拠となる統計データを学ぶ学問です。統計データの性質や作成方法を学ぶと、報道されているエコノミストの主張が、どのような根拠に基づいているのか、あるいはその主張が信頼できるものなのかどうかを、自分なりの経済学的な視点で解釈したり評価したりできるようになるかもしれません。

経済理論を学んで、「あれ？ これって抽象化されすぎて、実際の経済とか離れているのでは？」「経済理論通りに、実際の経済って本当に動いているの？」と疑問に思う初学者の人も多いかもしれません。計量経済学やマクロ経済統計を学ぶ意義は、そのような経済学と経済のギャップを埋めるためにあると私は考えています。

経済と経済学のギャップを埋めること

ゼミ生のひとこと



ゼミでは、様々な経済事象についての実証分析を行っています。為替や金融の動きを実証することで、「生きた経済」を実感できました。佐藤先生のおかげで「経済は楽しい！」って思う毎日です。ゼミでの発表・初合宿・工場見学……先生と過ごした3年間は笑いの連続でした。バブル経済の話にとっても熱い、信頼度ナンバーワンの先生です。

佐藤ゼミ1期生



佐藤 敏久 准教授

【さとう としひさ】

＜略歴＞神奈川県生まれ。明治大学商学部卒、明治大学大学院商学研究科 修了（博士（商学）、2007年高崎商科大学流通情報学部専任講師、2010年商学部准教授、商学研究科准教授、を経て、現職。＜趣味＞料理、音楽を聴くこと、演奏すること、読書。＜座右の銘＞「行蔵するは我に在す、毀善は他人の主張、我に在せず」勝海舟の言葉。

＜学生に一言＞色々なことに挑戦して、沢山、成功や失敗をしてください。それが5年後、10年後に糧となって、人間形成に生きてきます。そのための協力は惜しみません。

- 消費者行動論
- マーケティング・コミュニケーション
- マーケティング・リサーチ
- 外書講読

競争優位に関する理論的・実証的研究 ブランディングにおける消費者行動の変容と

主として、マーケティング領域である、消費者行動論、マーケティングリサーチ、マーケティング・コミュニケーションを担当いたします。

マーケティングは簡単に言うと「売れる仕組み」です。「売る仕組み」は販売です。「売れる」ということは、企業側から考えれば、「ある程度売れてもらわなければ困る」ことを指しています。それ故、これを事前に行うには、さまざまな学問領域の事柄を理解していないと、いけません。マーケティングを学ぶということは、大きな枠組みでいえば、経営学、経済学、心理学、社会学、会計学、歴史、数学、情報学などを学ぶことであり、簡単なことではありません。

私の研究テーマは、大きく分けて、二つです。一つは、消費者が「これはブランドだ」と思ってくれ、購買してくれるまでのプロセスの間に、いくつかの段階があり、その段階に応じて、企業は消費者とコミュニケーションをとる必要があります。そこで明確にしたいのは、どうしたら、これはブランドだと思ってもらえるようになり、購買に至るまでに、企業は何をしなければならぬのか、です。ひとくちに、消費者、顧客といっても、個人個人で、製品やサービスに対して思い入れや感情など、段階があります。「こうすれば誰にでもブランドと思ってもらえる」という法則があるわけでもありません。

もう一つは、「企業の業績差を決める要因は何か」ということです。同じような製品やサービスをしている企業は、世の中にたくさんあります。でも、成功しているところ、上手くいっていないところ、成功していたけれど、業績が悪くなってしまったところ、様々です。何がこれを決定しているのでしょうか。

これらを解明するには理屈だけでは無理です。それは「企業特定の」だからです。だから、成功している企業のまねをしてもうまくいくとは限りません。それ故、実際に企業行動について調べ、話を聞くという定性的調査やエスノグラフィー、また、定量的に調査を重ねるしかありません。

これが私の大きな研究テーマであり、同様のことを研究している研究者は日本に限らず、世界中にいます。大学教員をしている間に、爪の先のようなものでも貢献できるような成果を出したいと考えています。

清水 さゆり 准教授

【しみず さゆり】

早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程満期退学。修士（商学）。早稲田大学商学術院助教、中央学院大学商学部専任講師を経て、2012年4月1日より現職。



- 国際ビジネス概論
- 国際経営論
- 多国籍企業論
- 貿易論
- 外書講読

研究テーマ

研究テーマは「国際ビジネス」。企業の国際化、国際経営や戦略について日本企業を中心に調査・研究しています。国際ビジネスというと、トヨタやパナソニックなど規模の大きな企業の活動が思い浮かぶかと思いますが、企業規模には拘らず、技術があり、それを活かしている企業の活動に関心をもっています。

多くの企業は必ずしも有名ではないかもしれませんが、実は素晴らしい気概をもった経営者と従業員がいきいきと働いています。ただ、成熟した日本で、既存の事業をそのまま行っているだけでは企業を存続、成長させることは極めて難しいと考えられます。その際、海外へ出ていくとか、新しい事業を始めるといったことが考えられます。そうした現象とその現象の背景にある「何か」を探ることが私の研究の焦点です。

「足で書く」をモットーに、自分で「行って、見て、感じて、考える」ことを大切にしています。先日ある造船所を訪問し、社長の手を見ました。とても大きくゴツゴツした一生懸命仕事をしてきた手でした。そして社長は「船の形は変わっても、木造に拘る。その時々の変化に対応し、自分たちの技術をつかって何ができるか」ということを常に考えているとおっしゃっていました。従業員3名の小さな企業ですが、海外からの引き合いもあるそうです。技術と技能を蓄積し、変化に対応しながらいきいきと働いていました。こまめでは、「行って、見て、感じる」部分です。このあと、「考える」ことが大切です。ただし、それが大変困難な作業なので、いまま日々格闘しながら、企業の活動を調査・研究しています。

ゼミ

ビジネスに関心を持ち、そこで起きている事象について自分で考えることが大事です。開講したばかりの新しいゼミですので、これからゼミ生とともにゼミをつくっていくことになります。論文や書籍を読んで、発表して、議論するという学習方法のみならず、企業訪問やゼミ内外での活動を通じて、「考える」癖をつけていきます。

遠くて“近い”「国際ビジネス」を考える

ゼミ生のひとこと



清水ゼミでは、主に国際ビジネスについて学んでいます。国境を越えて事業を展開する企業の活動について理解を深め、幅広い視野を得られます。また、ゼミの活動も幅広く、普段は輪読を行っています。企業訪問や他大学との討論会なども行います。ゼミ活動の上で分からないことや行き詰まるがあると、清水先生が丁寧に親切にアドバイスしてくれます。その為、有意義な時間を得られること間違いありません!!

清水ゼミ1期生



神宮 貴子 講師

【じんぐう たかこ】

早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、早稲田大学総合研究機構研究員等を務める。趣味はスポーツ観戦、博物館めぐり、工場見学、時々作って食べるタイ料理（学生時代にタイに留学）。

●経済・経営のための数学
c1・c2

サービスを工学する 複雑化するものづくり

研究テーマについて

現在の研究領域はSCM (Supply Chain Management) です。私たちの手元に届く製品やサービスは、多くの企業の連鎖を経て提供されます。これらの連鎖を「Supply Chain (SC)」と呼び、製品や顧客ニーズの多様化等により非常に複雑な構造となっています。高品質・低価格・短納期などの顧客満足度を高めるためには、ただ工場でのよいものを作ればよいだけでなく、工場や配送センター等施設の立地場所、原材料の供給体制、輸配送（物流）経路、在庫の持ち方など、様々な要因について考慮し、SC全体の最適化を達成しなくてはならないのです。

現在は「施設立地」と「ロジスティクスネットワーク」をキーワードとし、SCの全体最適化を達成する技法の開発を目指しています。特に、これまでなかなか同時考慮されなかった地域特性（労働力、施策等）をいかに評価項目として導入するか、という点について考える日々です。

一方、日本の全企業数における中小企業の割合は9割以上。たくさんの中小企業によってSCは構成され、支えられているのが現状です。しかし、大企業と比較すると経営の改善や効率化を実現するための人材や時間、費用は十分であるとは言えません。そこで、研究活動と合わせて中小企業の経営・教育支援活動も行っています。

担当科目について

わたしが担当している「経済・経営のための数学c1,c2」は、「経済・経営のための数学a1,a2,b1,b2」で学習する内容を幅広く扱い、さらに理解を深めることを目的としています。また本講義の大きな特徴として、Microsoft社の表計算ソフト「Excel」を活用し、基本的操作、数値計算、グラフ作成、統計処理等を演習形式で学ぶ点があげられます。みなさんがこれから学ぶ専門分野、経済・経営活動を客観的に分析・評価するためには「数学」の考え方は欠かせないものです。そこで、本講義では私たちの日常生活、あるいは経済・経営活動に関連するデータや事例などを用いた演習や、他の科目と数学との関連性を紹介することで、「あ、そういうことか!」という発見が1つでもあるような講義運営を心がけています。

経済学部に来て数学なんて使うのかな……という人も多いかもしれません。しかし様々な授業を受けていく中で、ここで学んだ事を使う場面が多い気がします。高校で学んだ数学を復習・発展させるだけでなく、エクセルなどを使って将来の研究や仕事にも役立つであろう事がたくさん学べます。とても有意義な講義だと思います。

2010年入学 受講生

受講生のひとこと



鈴木 淳 教授

【すずき あつし】

群馬大学工学部卒業、東京工業大学大学院理工学研究科
経営工学専攻博士後期課程修了 博士（工学）。電気通信
大学助手、東京都立短期大学助教授、弘前大学准教授な
どを経て現在に至る。



●生産管理Ⅰ・Ⅱ
●経営科学

研究テーマについて

最近では施設や設備の再編・再配置に興味をもっています。リーマンショック以降の需要の低迷や、天災やリスクなどの影響、企業の業績悪化などで生産拠点の縮小や移転が起きている。単純にコスト最小化、利益最大化などの効率性だけでは決められない、複雑な多基準意思決定問題としても見る事ができます。

また、製品開発と生産をどのように連携するののかも考える必要があります。従来の日本企業は、設計と生産の間で生じる課題を組織的にも技術的にもすりあわせて解決してきました。近年は、アップルのようにデザインや設計をしても実際の生産は中国などの企業に生産委託をするケースが増えてきています。これからの日本企業はどのような生産戦略をとっていくべきなのか、戦略的な意思決定も重要になってきています。

これまで生産管理は、工場での生産活動の効率化や、研究開発のプロジェクト管理など、どちらかといえばオペレーショナルな視点で論じられることが多かった印象があります。技術のことは理系に、経営のことは文系に、と暗黙に投げられてきたからかもしれません。しかし、これからはテクノロジーとマネジメントをつなげられる人がもっと必要になることでしょう。そういう人を育てる手助けができればと思います。

担当科目について

生産管理Ⅰ・Ⅱは、より良い生産のためのマネジメントの考え方と手法を学ぶ科目です。「生産」と付いていますが、サービス業や流通業のオペレーションでもこれらの手法は活用されています。生産管理Ⅰでは戦略面から、生産管理Ⅱでは技術面から、それぞれ学びます。

経営科学では、経営における問題を数学的に表現して解くための技法を学びます。経営資源の最適配置と運用という視点から、いくつかの問題のモデルと代表的な解法を紹介しています。

基礎演習、演習Ⅰ・Ⅱでは、経営科学の手法をPCを使った実習から学びつつ、レポート作成やプレゼンテーションなどを通じて表現力や問題意識を体験的に向上させ、自主的に卒業論文を書けるようになるための指導を行っています。

ゼミ生のひとこと



経営科学は理系っぽい話が入ってきますが、パワーポイントで要点をまとめたり図を使ったりして先生が説明してくれるので、意外にわかりやすいです。演習では、Excelを使って経営の問題をいろいろ解きました。Excelの知らない使い方を知ることができて、おもしろかったです。

鈴木ゼミ1期生（2012年3月卒業）

テクノロジーとマネジメントをつなげられる人を



関根 雅則 教授

【せきね まさのり】

1997年明治大学大学院博士後期課程単位取得。同年高崎経済大学経済学部にて講師として就任。2009年から教授。現在の担当科目は、イノベーション論、ベンチャービジネス論、経営戦略論、戦略的経営論。

- イノベーション論
- 経営戦略論
- 戦略的経営論

イノベーションはなぜ不可欠か？

研究テーマおよび担当科目

私の研究テーマを一言でいうと「企業がいかに効果的なイノベーションを遂行するか」です。イノベーションとは、直訳すると「革新」とか「刷新」という意味になりますが、企業との関係で用いる場合、「新しい製品やサービスの開発」、「新しい生産方法の確立」、「新しい市場の開拓」などといった意味になります。これらの活動は、企業の存続あるいは発展にとって極めて重要、というより、むしろ不可欠です。例えば富士フィルムという会社が、写真用フィルムだけを生産・販売していたらどうなっていたでしょう。おそらく現在のような規模まで成長していなかったと思います。写真用フィルムで培った技術を応用し、液晶ディスプレイ用高機能フィルムや医療機器、化粧品などを開発し販売しているからこそ今の会社があるのです。イノベーションというのは難しい話ではなく、この事例のようなことを意味します。私は、こうしたイノベーションが企業においていかにうまく実現されるかについて研究しています。

ところで、私の担当科目は4つあります。それは「イノベーション論」、「ベンチャービジネス論」、「経営戦略論」、「戦略的経営論」です。イノベーションについては、上述したとおりですので説明を省きます。ベンチャービジネスとは、イノベーションを遂行する新興の中小企業を意味します。講義では、ベンチャービジネスの概念や支援機関、さらにはそのマネジメントなどについてお話しします。経営戦略とは、企業においてイノベーションの指針となるものです。講義では、先の事例のような企業による新規事業の確立や企業が同業他社との競争に勝つための方策などについてお話しします。戦略的経営は、戦略と組織の関係をテーマとします。講義では、イノベーションや戦略を創出ないし実行しやすい組織マネジメントのあり方などについてお話しします。

なお、私の担当するゼミですが、何をやっているのかについて簡単に説明すると、2年次には、専門分野に限定せず経営学全般（経営学の基礎）について研究します。3年次には、専門分野の教科書に加え、「日経ビジネス」という雑誌を使って実存する企業の事例を研究します。4年次には、それぞれのゼミ員が自分自身で研究テーマを決め卒業論文制作に取り組みます。みんな和気藹々とやっています。

この先生と出会えて本当に良かった！と思います。常に学生目線で、学生の考えを汲み取った上で経営戦略論などを中心に経営学の基礎から細かい所まで分かりやすく伝えてくれるのはもちろん、幅広い知識の中から、学生一人一人に向き合い的確で説得力のあるアドバイスで我々を後押ししてくれます。身近な存在でありつつも、尊敬できる教授です。

関根ゼミ14期生 ゼミ生

ゼミ生のひとこと



高橋 章 講師

【たかはし あきら】

日本体育大学卒業。地元高校教員を経て、本学に奉職。高崎経済大学助手、講師、助教授を経て、1992年教授。経済学部教養教育科目、健康スポーツ概論(1年時必修)、スポーツ科学論・生涯スポーツ論(選択)を担当。

本学就任後、日本サッカー協会の公認指導者ライセンス(上級コーチ)を取得。その後、欧州を中心にコーチングコース(イギリス・ドイツ・オランダ)を受講し、日本サッカー協会技術委員、関東大学選抜チーム監督や群馬県サッカー協会強化委員長で20年以上群馬国体中心に指導。欧州サッカー選手権、ワールドカップサッカー5回視察研修体験を生かし、各地でスポーツ指導者養成講習会やサッカーなど男女問わず指導している。

スポーツ全般について学生相談歓迎。

現在、群馬県サッカー協会副会長。関東大学体育指導者連盟常任理事。



- スポーツ科学論ⅠA・ⅡA・ⅠB・ⅡB
- 健康スポーツ概論A1-C・A2-C
- 生涯スポーツ論Ⅰ・Ⅱ

本学では、体育科目として、1年次の必修科目である「健康スポーツ概論」(教養教育科目)および4年次まで履修できる「スポーツ科学論」「生涯スポーツ論」(半期2単位・選択科目)を開講しています。

社会における“体育”の意義

社会における様々な場面での情報化が進んでいる今日、私たちの生活の中で、知的な活動(mental activity)の量に対して、実際に身体を動かす機会(physical activity)が減少しています。このことは、皆さんの個人的な運動能力や基礎体力の低下を引き起こすのみならず、生活体力やQOL(生活の質)も低下させ、さらには、社会全体としての労働生産性の低下までも招くと云われています(生活体力は労働生産性に関連しているワークキャパシティ、すなわち生産能力の基盤をなしています)。こうした事態を回避するには、日常生活の中で継続的にスポーツや身体的な運動をすることが重要となります。こうした社会背景を受けて、大学における体育は大きな使命を期待されています。

大学体育で学ぶことができるもの

大学の体育において学ぶことができるものは多岐にわたります。毎回の授業の中では、高校までのような教育課程によって制約された中で強制的にやらされたり、放任され好き勝手に活動ができるものではなく、学生による主体的で積極的な参加が求められるなかで、自然に「自律性」を身につけることができます。チームスポーツをする際には、勝つ事への執着心や仲間との絆が重要となります。信頼関係を構築することができなければ、チームゲームは成り立ちません。こうしたなかから、「協調性」や「社会性」、「コミュニケーション能力」を学ぶことができます。さらに、スポーツにおける勝敗、成功や失敗、挫折などを経験する過程で、優れた「人格」を形成することも期待できます。

さらに、仲間とのスポーツを通じて自己を解放し他人との関係を構築する中で、受講者間での友情が育まれ「生涯の友」が得られるかもしれません。上記以外にも、脳や知能の活性化にも効果があることが医・科学的に証明されています。

社会的で健康的なライフスタイル構築のために

このように、大学における体育には、従来いわれてきたような心身の健康維持や技量構築のみならず、学生生活を充実させ、社会人として活躍していく為の様々なことを学ぶことができます。学生諸君が体育科目の受講を通して、健康的で社会的なライフスタイルを構築することを期待します。

スポーツを通じて社会を学ぼう



高松 正毅 教授

【たかまつ まさき】

専門は日本語学・言語学。「日本語概説」「文章表現Ⅰ・Ⅱ」「論文作法Ⅰ・Ⅱ」を担当。「新選組」と「白虎隊」を愛する。尊敬する人物は「榎本武揚」「土方歳三」ら多数。嫌いなものは「薩摩と長州」。誓いの言葉は「臥薪嘗胆」「捲土重来」。入場テーマ曲：「アイ・オブ・ザ・タイガー（サバイバー）」、「セバレイト・ウェイズ（ジャーニー）」、「ターミネーターのテーマ」。

- 日本語概説
- 文章表現Ⅰ・Ⅱ
- 論文作法Ⅰ・Ⅱ

文章を書くことをいかに教えるか

研究テーマ

私の専門分野は「日本語学」、つまり日本語という言葉の研究する学問です。日本語を研究するといっても、丸ごと全部を一気にとらえることはできませんから、音声・音韻、文字・表記、語彙、文法など、特定の側面からアプローチするのが普通です。

元々は、現代日本語の動詞の格支配の研究から入り、日本語の慣用表現、日英語の対照、加えて、日本語日本文学の研究史を専門にしたいと考えました。今でも、本居宣長をはじめとする国学者や、新井白石ら漢学者の著作を読み込むのは本当に楽しいです。

現在は、文章の書き方の効果的な教授法（学生諸君から見れば練習法・鍛錬法）を研究中です。文章を書くには、それ以前に文章が読めなければなりませんから、文章を読むことも非常に重要です。この読み書きの領域を、大学教育ではリテラシーと言います。最近ではさらに用法が広がって、情報リテラシーやコンピュータ・リテラシーのように用い、自在に使いこなせる能力のことを意味します。

大学で学ぶに必要なレポートや論文を書く力は、スタディ・スキルズやアカデミック・リテラシーの最も重要な核となる部分ですから、最近では大学教育そのものが、私の専門のようになってきました。

担当科目とゼミナール

担当科目は、日本語学の概論に当たる「日本語概説」、文章の書き方を教える「文章表現Ⅰ・Ⅱ」「論文作法Ⅰ・Ⅱ」です。他に、「論文の読み方・書き方」を担当する先生方とチームを組み、私が代表責任者として授業展開を考えています。

ゼミナールの研究テーマとしては「言語表現技術」を掲げています。しかし、「技術」だけを切り離して身につけ、向上させることはできません。口頭でせよ文書でせよ、言語はツールに過ぎませんから、コンテンツ（内容）が必要です。そのコンテンツは、学生諸君の一人一人が自力で創ることになります。研究テーマは完全に自由。ゼミナールでは、私は単なる支援者に過ぎません。

経済大学の経済学部にも所属しながら、経済・経営以外の分野で真剣に卒業論文を書きたいと考える人の入ゼミを待っています。

高松ゼミは、好きなこと（他のゼミでは研究できないテーマ）を自由に学べるゼミです。自分でベースを作る自主性や積極性が求められ、行き詰まっても自力で解決しなければなりません。やりたいことがはっきりしており、アニメやフィギュアなどのサブカルチャーをはじめ、さまざまなことに好奇心旺盛な人にピッタリのゼミです。

高松ゼミ9期生（2011年卒） 藤澤 桃美

ゼミ生のひとこと



田中 久夫 教授

【たなか ひさお】

1957年高崎で生まれ、謹厳実直な硬派の良品を目指して努力してきたが断念。結果50年の間、軟派の不良を続けてきた。可哀想に一妻三女有り。それでも生活信条は「(た)のしく、(な) かよく、(か) っこよく」。車、ゴルフ、酒、温泉、怠惰をこよなく愛す。今年の目標は毎日日記をつけること。



●会計学Ⅰ・Ⅱ
●税務会計

私のことを思い出してみると、高崎から東京に上京して憧れの一人暮らしが始まり、毎日が楽しくてアツという間に4年間が終わってしまいました。それでも、大学入学後まもなく行った生協の本棚から薄くて安い1冊の会計学の本を手に取り、なにかインスピレーションを感じてそれを購入して読み始めたんだ。もとより普通高校出身の私だから、簿記のことも皆目分からないままその本を読んでた。でも、あとで考えるとこれが名著だったんだ。高名な先生が斯界を代表する出版社から出した基本書だったんだ。うまく説明出来ないけど、中身はまったく分からなくてもどうしてもそれを理解してみたい気持ちを起こさせる本だったんだ。文章が魅力的だったのかなあ……。その時直感的にこの本を理解できるかどうかが私のそれからに多大な影響を及ぼすような気がして、その後この本と同じようなタイトルの会計学書を200冊ほど買い込み、1年足らずのうちに、乱読、読了した。そしてもう一度この本を読んだとき、そのすべてが理解できる自分になっていたんだ。計画性もないままただ乱読していただけたんだけど、どの本にも載っているところはベーシックなところであり、ある本にしか載ってない部分はその著者オリジナルの言説だということが理解できるようになったんだ。そういった体験の中から、いろいろな人の考えを取り入れて自分が講釈できる会計学の体系が構築されていったんだと思う。この時のわずかな期間がその後の私を形造り、いまの姿（君たちに会計学を講義する教員）になったんだ。あのときの直感と膨大な量の無計画な乱読が一人の人間の一生の生活を支える糧になったわけだね。ちなみに、最近この本を出版していた出版社から私も本を出版しました。ちょっと嬉しい。私の本を読んで会計学を志す学生が生まれたら最高だね。

1冊の本との出会い…… 乱読のススメ



谷口 聡 准教授

【たにぐち さとし】

東京生まれ。高崎経済大学卒業。明治大学大学院博士後期課程単位取得退学。明治大学非常勤講師、東京都立短期大学非常勤講師などを経て、宮崎産業経営大学法学部専任講師。2009年から高崎経済大学経済学部准教授。

- 債権法総論
- 債権法各論
- 現代民法総論

民法を通じて日常生活を見ると……

私の教育研究分野は法律です。中でも専門としているのは「民法」といわれる法律です。そして、研究テーマとしているのは、民法の中における「不法行為」といった領域に属する問題や判断能力が不十分な人が社会に参画していくための「成年後見制度」といった制度です。本学の経済学部で開講されている私が担当している民法科目には「現代民法総論」「債権法総論」「債権法各論」があります。法律と言うと条文を暗記する学問ではないかと思いをなさる方もおられるかもしれませんが、そうではありません。法学の中心的課題は、社会で起こる様々な事象、とりわけ、紛争に対して、制定されている法律条文をいかに工夫して適用して問題の解決を図っていくかということにあります。民法は数多くの法律の中において、特に我々の日常生活と関わりの深い法律です。民法は、契約や損害賠償、親族や相続、時効に関する規定が置かれています。法律と言うと堅苦しいイメージを持つ人もいますが、民法を知っていると日常生活で起こる出来事の一つ一つが興味深いものになります。コンビニでおにぎりを買えば「売買契約」、友達にお金を貸せば「消費貸借契約」、講義時間中となりの席の友達にペンを貸せば「使用貸借契約」、交通事故に遭えば「損害賠償」が問題となり、親族に不幸ができれば「相続」が問題となります。講義では、できるだけこのような日常生活の具体的事象を話題に取り上げながら、法律の理論を説明しています。ゼミにおいては、法理論的な視点からの問題解析のアプローチをする方法を学びつつ、将来、皆が社会へ出たときに、安全・安心な日常生活を送ることができるような知識が身につけられるよう学習をしています。このように民法を学習することは毎日の生活を豊かなものにすると同時に、紛争・問題解決能力を身につけることに繋がります。また、資格試験や公務員試験等では、民法が重要なウエイトを占めるものが少なくありません。このため、ゼミでは勿論のこと、講義でもその点に配慮して説明をしています。経済学部の皆さんが、経済学や経営学を修められるのは当然ですが、「取引社会」「契約社会」の基盤をなしている民法を学んでみることも、皆さんの将来にきっと役立つと思いますよ。

谷口先生の講義は、経済学部ながら民法について学ぶ少し変わった講義です。経済以外の事も学んでみたいという人にはとてもおすすめしたい内容です。

また、谷口先生は見た目では真面目で固い先生に見えますが、意外と気さくでおもしろい、ユーモアのある人だと思います。民法に少しでも興味のある人はぜひ先生の講義を受けてみてください。

谷口ゼミ（2012年卒） 星野 雅人

ゼミ生のひとこと



土谷 岳史 准教授

【つちや たけし】

早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程単位取得退学。2009年4月経済学部講師を経て、2012年4月より経済学部准教授。専門はEU（欧州連合）の政治。趣味は音楽鑑賞（激しい音楽が好き）やサブカル批評を読むこと。



- 政治学
- 政治制度論
- 国際関係論
- ヨーロッパ政治論
- 学問研究入門

研究テーマ

私はEUを事例に、ネイション-ステートとは異なる秩序について考えています。ネイション-ステートとは何でしょうか。日本には古来から続く日本人＝ネイションがあり、その日本人が作ってきた日本という国＝ステートもまた連続と続いていると考えられています。実際には近代的なステートが作られたのは17世紀ごろですし、ネイションは19世紀以降、一般化していったものです。ですが、現在も日本人かどうかが一番の問題になるように、「我々」と「彼ら」を分ける基準はこのネイション-ステートの神話なのです。この問題は何でしょうか。日本にも外国人がたくさんいます。日本民族以外の日本人もたくさんいます。このような状況下で、同質的な人々を前提として秩序を考えていくことは非現実的です。望ましくありません。様々に異なる人々がどのようにともに生きていけるのか、これは現代社会の大きな課題です。EUはヨーロッパの27の国が作っている超国家的な秩序です。私はこのEUを研究することで、日本も含めた現代社会のよりよい秩序のヒントを得ることができるのではないかと考えています。現在は、EUの移民政策を中心に、人がどのようなカテゴリーに振り分けられ、包摂と排除が行われるのかを研究しています。

担当科目

政治学：近代的な政治体制の確立と、自由と平等について考えていきます。
国際関係論：戦争を軸にネイション-ステートの誕生から現代の国際関係まで検討していきます。

政治制度論：日本の戦後政治を振り返り、現代日本の政治を考えていきます。
ヨーロッパ政治論：デモクラシーを中心に、望ましい秩序について研究していきます。

学問研究入門：テキストの読み方、研究の仕方などを学んでいきます。

ゼミの内容

政治学・国際関係論のゼミです。ゼミ生の興味関心は多様なので、学問的立場や問題意識の異なる著作を複数輪読していきます。基本的な読解力や議論の仕方はもちろんですが、これにより物事の見方を学んでほしいと考えています。3年の後期からは各自の卒論へ向けて研究報告をしてもらい、議論の中で論文を仕上げていきます。

EUを参考に、国民国家とは別の仕方

ゼミ生のひとこと



他のゼミのように毎年やっている決まったことはありません。歴史あるゼミはもう楽しみが用意されているんでしょうね。土谷先生はあらゆる状況にも柔軟でしょう。あなたが好きに特徴づければよい。何年経っても同じような形にならないゼミ。同じだったら僕らも先生も飽きちゃうでしょ。

土谷ゼミ1期生



富澤 一弘 教授

【とみざわ かずひろ】

東京都出身。平成7年度、本学着任。教授、博士（「学術学」）。専門は、「日本経済史学」、「日本史学」。著書・論文はきわめて多数で、頁数は既に1万頁を越えている（主要業績は、本学図書館に架蔵）。

- 日本近世経済史
- 日本近代経済史
- 日本近世農業史

原資料から日本経済に迫る

私は、「日本経済史」について学部1年生から大学院博士後期課程の院生にまで、講義しております。特に私が専門としておりますのは、江戸時代から昭和初期までの日本蚕糸業史、日本貿易史であり、原史料、原文書を活用した実証的研究を四半世紀以上、継続して参りました。

またあわせて、前近代の日本農村の生活史についても、関心を有しており、その方面での研究も多数に及んでおります。

従って私のゼミナールでも「日本経済史」「日本農村生活史」を中心とする分野の研究を奨励致しておりますが、学生諸君の興味関心に応じて、実際には、近世・近代日本史学一般についても、講述致しております。即ち戦国時代から大正・昭和初期まで、幅広く取り扱っております。そして、学生・院生に対しては、オリジナルの史料・文献にもとづく特自色の強い研究を求めて、2年間乃至、数年間の指導を行わせて頂いております。

それ故「日本経済史」「日本農村生活史」そして「日本史学」に知識や関心を有する皆様のゼミナール参加を強く御奨め申し上げたく存じ上げます。プロの研究者、教職員等の輩出する本ゼミナールで、学部・大学院生活の粋をきわめる諸君の参加を切に願っております。

このゼミナールでは、「日本経済史」「日本史学」関連の研究を自由に行うことができます。

ただし、時代は、戦国時代～昭和初期中心です。なまの古文書や古い刊行物、そして明治～大正期の新聞記事等を使った独創的研究が、毎年、卒論・修論を飾ります。経済史や歴史に興味あるみなさん、このゼミナールと一緒に学びませんか。充実の数年間を送ることを請け負います。

(2010年 大学院経済・経営研究科博士後期課程入学)
佐藤 雄太

ゼミ生のひとこと



内藤 まゆみ 准教授

【ないとう まゆみ】

北海道出身。2002年お茶の水女子大学単位取得退学。博士（人文科学）。専門は、教育心理学、教育工学。最近では、インターネットやテレビゲーム等、メディアと子どもを巡る問題を研究している。



- 教育心理学
- 教職実践演習B
- 心理学
- 教育測定および方法
- 学問研究入門

心理学の魅力

＜相手の心が手に取るようにわかる＞＜気になるあの人の心をつかむ＞etc. ……。テレビや雑誌などで紹介される＜心理学＞は、勉強しさえすれば、対人関係の悩みが解消できたり、恋愛の達人になれたり、まるで何でも願いごとがかなう魔法のように扱われています。ところが、実際は……です。「心理学」に、魔法の力はありません。では、それを学ぶ魅力は、いったいどこにあるのでしょうか。

ところで、心理学には「学習心理学」という分野があります。ここでいう「学習」は、いわゆる勉強ではなく、経験を通じて新しい行動を身に付けることを指します。犬は、エサをもらったりほめられたりして、お手やおかわりを覚えますよね。それが「学習」です。そして、エサやほめることなどの“ご褒美”は、専門用語では正の強化子といいますが、どのようにあげるのが“一番利く”のか、動物を対象にした実験によって細かく調べられてきました。その結果、「**でたらめにご褒美をあげる**」と学習した行動が最もよく定着することがわかったのです。

ふーん、そうなんだ、で流さないでくださいね。この「でたらめ効果」、実は、私たちの行動、特に「何かにハマる」仕組みを表しているのです。

例えば、ギャンブル。なかなか止められないのは、“ご褒美”がでたらめに与えられるからです。今回は負けただけ、次は勝つかも说不定。次も負けただけ、次の次は……。こういう“いつくるかわからない”状態に、私たちはとても弱いのです。

もしみなさんのなかに、つれない異性のことがなかなか諦められないという人がいたら、それも「でたらめ効果」によるかもしれません。いつも冷たいけれど、時々、気まぐれに優しくしてくれるから、どうしても思い切れない……。そんなことを言っている人、いませんか？

こうしてみると、心理学とは、ギャンブルや恋愛などの人間味溢れる行動を、犬のしつけと同じ法則で説明しようとする、ある種「冷酷」ともいえる学問かもしれません。しかし、複雑な心を地道に解明しようとする、その誠実さこそが、心理学の魅力だと思っています。

ゼミ生のひとこと



心理学は夢を叶える一つの手段かもしれませんが。現在、私は会社経営する中で心理学的分析の有効性を痛感しています。先生が人生の様々なヒントをご教示して下さい、仲間のゼミ生が知恵を貸してくれた3年間は、今の私の生きる糧となっています。良き恩師・仲間に出逢えて新しい人生の一歩を踏み出せた事を感謝しています。

内藤ゼミ1期生 ゼミ長 小倉丘 礼



永田 瞬 准教授

【ながた しゅん】

2009 年一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。一橋大学大学院特任講師、福岡県立大学人間社会学部専任講師を経て、2013 年に高崎経済大学経済学部に着任。担当科目は経営労務論、経営学史等。

- 経営労務論
- 経営学史
- 人的資源管理
- 外書講読

日本経済がグローバル化の中で、 地域産業の持続可能な発展は可能か？

私の専門分野は労働・産業経済論です。大きく分けて3つの研究領域があります。第1は、日本の生産システムとして注目されてきたトヨタ生産システムの性格規定を行うこと、第2は、国際比較の観点から非正規労働者に対する保護政策の有効性を検証すること、第3は、繊維産業を事例に持続可能な地域産業のあり方を検討することです。1990年代初頭まで「日本型雇用」や「日本の労使関係」とか呼ばれた日本の雇用システムは、現在大きな転換点を迎えています。若年層を中心とするパート、アルバイトなど非正規労働者の増大は、地域経済も含む日本経済の成長のあり方に根本的な見直しを提起しています。例えば、地域経済では大企業の工場撤退や不安定雇用の増大によって、若年層が地域外に流出しています。また人口の高齢化も加味して、地域経済は担い手の不足、持続可能な再生産の危機など深刻な状況に陥っています。

現在、私は岡山県・広島県を中心とする繊維産業の人材育成について研究を進めています。この地域は伝統的に足袋や学生服の製造で地場産業としての地位を確立してきました。日本で初めて国産ジーンズを作ったのも岡山県倉敷市児島地区だと言われています。しかし、1990年代以降本格化する東アジア諸国経由の安価な製品の流入は、従来型の地場産業に大きなインパクトを与えています。岡山県や広島県では、ユニクロ型の大量生産ジーンズに負けない、付加価値のあるプレミアムジーンズづくりで活路をみだしています。この取り組みは、家具、繊維、漆器、眼鏡など全国の地場産業がグローバル化の中でいかに生き残るのかについて大きな示唆を持っていると考えられています。日本経済がグローバル化する中で、地域の持続可能な発展を可能にする条件はどこにあるのか、このことについて学生の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。一緒に切磋琢磨して知性を磨きましょう。

中野 正裕 准教授

【なかの まさひろ】

1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学経済学研究科博士後期課程修了。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。

[URL] <http://www1.tcue.ac.jp/home1/mnakano/index.html>



- 貨幣経済論
- 基礎マクロ経済学
- 応用マクロ経済学

自身の研究テーマについて

20年とちょっと前、故郷九州を離れ浪人生活を送っていた私は、都内某予備校の経済学部入試向け小論文講座に潜り込み、聴講する機会を得ました。典型的な田舎者だった私は、若い人気講師によるスミスやケインズの経済学、戦後世界経済の洗練された概説に、いたく感銘を受けてしまいました。国立の某大学経済学部に入學し、3年次から経済学史のゼミに入ることを許可された私は、貨幣数量説とケインズの貨幣理論に関する（いま考えれば）かなりいい加減な卒論をまとめ、それでもなんとか卒業を許されました。この卒論作成の時に、たまたま大学の図書館で手にした『マネタリズム論争とマクロ経済分析』という書物に刺激され、それがきっかけで今度は神戸にある某県立大学の大学院に進学し、前掲書の著者である教授の下で貨幣と金融の理論を学ぶ機会を得ました。

麻雀やアルバイト、国内旅行にハマった時期もあり、優秀な学生とは程遠い私でしたが、入学前から理論や政策の歴史に関心があり、尊敬できる教授の下で自由に学ばせてもらえたのは幸運でした。長引く日本経済の低迷と1990年代末の金融危機などを契機に、私の関心は理論・政策史の分析から、より現代的な金融と経済変動のマクロ分析に移っていましたが、機会があればまた学生たちを誘って古典の良さにも触れたいと考えています。

担当科目について

基礎マクロ経済学、応用マクロ経済学、貨幣経済論、演習（基礎演習、演習Ⅰ・Ⅱ）を担当しています（内容についての詳細はシラバスを参照下さい）。ミクロ経済学とマクロ経済学は、学び始めた時点では、全く異なる学問領域のように感じられるかもしれませんが、しかし両者は、実は共通の土台の上に成り立っており、それがつかめてくると、経済理論の明快さが実感できると思います。とくに、ニュースや新聞記事に見る現実のマクロ経済の動きや経済政策への理解を深めたい方ほど、ミクロ経済学の併行学習が効果的です。

演習ではミクロ経済学、マクロ経済学の基礎から中級レベルの習得を共通の目標とし、ERE（経済学検定試験）受験にも取り組んでいます。個別研究では自由に研究テーマを選んでもらい、3年次から段階的に論文作成の指導を進めています（図書館に過去の卒業論文集が所蔵されています）。

我はいかにして経済学徒となりしか

ゼミ生のひとこと



過去、基礎演習ガイダンスの資料として、ゼミ生に行ったアンケート結果の中で一番印象に残った「中野ゼミをひとことで表すなら？」

……‘楽じゃないけど無難’

（2007年卒）

誰やねん、これ書いたヤツ！

（教員のつぶやき）



中村 彰良 教授

【なかむら あきよし】

1996年に高崎経済大学に来てから20年近くたちました。その前まで4年ほど短大の教員をしていました。年齢のわりに子供が小さいので、体力的に子育てが大変です。

- 簿記論C
- 管理会計論

管理会計という分野について

私の専門は、管理会計ということになると思います。授業でも管理会計論を担当しています。その他に授業では、簿記論も担当しています。簿記は、会計を学ぶ上で、基礎となる科目です。簿記の手続きに従って企業の取引を記録していると、それが集計され、やがてまとまった内容の情報を提供する会計報告書が生み出されます。その仕組みは非常によくできていて、感動的です。一方、管理会計は、意思決定や業績評価のための会計です。具体的には、設備投資をするにあたって、判断の材料となるような情報を提供したり、予算のような計画書を作って、それを実績と比べて問題点を改善するための資料となるような情報を提供したりするのが、管理会計です。

ゼミでやっていることも、管理会計が中心になっていると思います。まず、全員で読む本を決めて、その本について分担を決めて、その内容についてみんなの前で発表してもらいます。その後で、その発表について、他の人から質問をしてもらったりするということをしています。選ばれる本は、管理会計に関するものが多いですが、違うものも選ばれることもあります。また、合宿では、ビジネスゲームというものをやっています。ビジネスゲームは、グループごとに価格や広告に関する計画書を出してもらい、それによって受注数量が決まるので、そのデータをもとに会計報告書を作成するというものです。

最後に、研究テーマについて書くと、やはり管理会計がテーマということになります。特に、上司が部下に仕事をしてもらい、その結果、成果が得られるが、それが部下の努力によるものなのか、たまたま運によるものなのか分からないというような状況をモデル化し、その中で管理会計の働きを考察するようなものに興味があります。このようなモデルの限界も意識するようになってきていますが、「現実的でない」などと言って、無視する立場にも立っていません。他の研究との融合を模索中です。

私達中村彰良ゼミナールでは、一般的な会計知識の取得を目指し、日々のゼミナール活動に取り組んでいます。具体的には、発表する側と質問する側に分かれて、お互いに意見を言う形をとっています。先生の授業の特徴は、疑問点を学生が考えるという点にあります。これは、私達が社会に出ても大切な力になるので、大変役に立つと思います。

2012年卒 戸張 玲

ゼミ生のひとこと



中村 知夏 講師

【なかむら ともか】

早稲田大学理工学部物理学学科卒業。同大学院理工学研究科物理学及応用物理学専攻退学。専門は理論物理学。特に量子論。ここ数年の冬限定の趣味は編物。寒くなってから編み始めて、春になって暖かくなると中断するのでなかなか出来上がらないのが悩み……。



●数学b1・b2・c1・c2

研究テーマについて

数学の講義を担当していますが、私の専門は理論物理学です。その中でも、物質を絶対零度付近（ -273°C 付近）まで冷やしたときに起こるボーズ・アインシュタイン凝縮（BEC）という相転移現象に関心を持っています。相転移とは、水の状態（専門用語では「相」と呼ぶ）が気体から液体へ、液体から固体へと変化するという、相が変化する現象のことを指します。物質を超低温にまで冷却すると、BECという状態へと相転移し、通常の状態では起こりえない現象がいくつも観測されています。これらの現象を原子や分子などを記述する言葉である、量子論で記述することが私の研究の目標です。

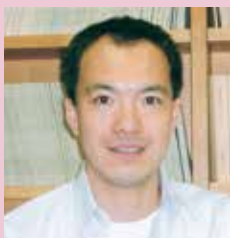
担当科目について

私の担当科目は、経済・経営のために数学b1、b2、c1、c2です。1年次の講義であるb1、b2は、線形代数と確率・統計を、2年次の講義であるc1、c2ではエクセルの操作方法とエクセルを活用した数学へのアプローチを扱っています。

私のb1、b2の講義では、手を動かすこと重要視しています。教科書を読む、説明を聞くという受け身の体制ではよくわからなかったことも、自分で手を動かし、公式を書き取り、計算することで、「何に注目しているのか」、「何が目的で何が結果なのか」ということを意識できることが多いのです。学生からは、「板書が多くてノートをとるのが大変」、「板書での説明よりもプリントを配ってほしい」という意見もありますが、やはり手を動かしてほしいと考えています。

c1、c2の講義では、エクセルの操作法とエクセルを使っの数学の理解を目指しています。1年次の講義で学んだことを踏まえて、手を使っの計算では難しい、数値を直接計算して調べるという数学への別のアプローチ方法を学びます。操作方法を覚えるまでは面倒だと感じるかもしれませんが、一度覚えてしまえば、解析的な計算が難しいときの力強いツールとなります。

「手が動く」と頭も動く」



名和 賢美 准教授

【なわ けんみ】

高卒まで山形県酒田市で、その後は小樽と札幌で1年を、さらに東京で18年を過ごす。群馬県民となり7年目を迎えるが、いまだ車の免許も取らず、三人乗り自転車愛用。自他共に認める「育メン」である。

- 社会学Ⅰ・Ⅱ
- 社会科学基礎論
- 社会思想史Ⅰ
- 学問研究入門

教養教育と民主主義の大いなる関係

研究テーマ

民主主義についての考えをきちんと見つめ直し、どのようにすればその理念を日本の社会で実践に移すことができるか、ということを生涯かけて調べようとしています。今はまだこの研究のスタート段階で、現代民主主義の起源である古代ギリシアについて研究しています。 α (アルファ)、 β (ベータ)、 γ (ガンマ)、……という2500年以上も昔のギリシア語の文字で書かれた書物を読み解き、ギリシア人の民主主義についての考えを探っているのです。

そしてもう1つ、調べていることがあります。それは、皆さんと大いにかわりのあることで、大学における教養教育の役割です。特に、1年次前期における教養科目の教育内容について考察しています。

一見すると全く異なった研究テーマですが、若者(=近い将来の主権者)に対する市民教育は、実は民主主義研究における最重要課題の1つなのです。

担当科目

私の担当はすべて教養科目ですが、いずれも私自身の教養教育研究をもとに実践しています。受講ノートを採点したり、作文を毎週添削したり、と全国的にとっても珍しい講義かもしれません。学生の皆さんも大変でしょうが、教えている私も、正直しんどい毎日です。

なお注意してほしいのは、「学びたくなった時に学べば良い」科目ではないということです。以下のような段階的履修をお勧めします。

▽「学問研究入門」や「社会科学基礎論」は、1年前期に。

▽「社会思想史Ⅰ」は、1年後期に。

▽「社会学Ⅰ」や「社会学Ⅱ」は、2年もしくは3年に。

ゼミの内容

2年次には、各方面で高い評価を得ている「言いたいことを分かりやすく伝える基本の型」を修得すると同時に、プレゼンテーションの古典的な理論を学びます。これらの素養は、社会人になってから、その威力が大いに発揮されることでしょう。3・4年次には、現代社会の諸問題の中からどうしても改善させたいと強く願うことを卒論のテーマに選び、調査研究を進め、卒論発表会の場で具体的な改善策を提言します。

☆私にとってこの授業は一番キツイ授業だった。…

☆私が取っている講義の中で、一番大変で、手間がかかって、苦しい講義だった…

☆この科目は間違いなく私が前期で取った講義の中で一番大変でした。そして一番真摯に取り組めた講義と言えます。…

2012年度 教養科目 受講生

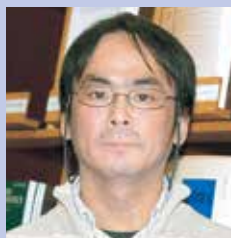
受講生のひとこと



仁木 拓志 講師

【にき たくし】

東京水産大学（現：東京海洋大学）大学院博士後期課程修了。博士（水産学）。専門分野は生物地球化学、海洋生態学。海以外では、社会学的側面を含む身近な水環境問題（特に富栄養化）にも関わってきました。



●生命の科学
●生態学

研究テーマについて

空を見上げると雲があります。雲は「地球の日傘」として気温を下げる効果を持つため、地球温暖化を理解する上でも重要です。雲は大気中の水滴ですが、水蒸気が水滴になる際には核となる微粒子が必要です。その微粒子の一部は、海から発揮してくる「硫化ジメチル（DMS）」という物質から生成されています。海でDMSを作る主役が「植物プランクトン」と「細菌」です。両者がDMS生成量を左右する仕組みが、僕の興味の対象です。

地球の気候システムを知ろうとすると、雲のことが知りたくなり、雲粒の核になる物質を追いかけると、海中を漂う小さな生物達の生活にたどり着く…地球って面白いですね！

科目について

本学では「生命の科学」と「生態学」を担当しています。前者は「遺伝子と進化」を、後者は「環境と生態系の関係」を鍵として、幅広い話題を扱います。でもなぜ経済学部にも自然科学系科目があるのでしょうか？

遺伝子の理解は医療や農業などに革新を起こしつつあります。生態系の理解は地球温暖化や自然保護、環境汚染などの問題を考える際の基盤です。これらは経済や社会にも深い関わりを持ちますが、科学的知識の不足により「誤った解釈」をしてしまっている方が少なくありません。また、現代社会には膨大な「ニセ科学」があり、知らないうちに騙されている方も多いようです。メリット・道徳的意義・専門用語・ハウツーなどを気にするあまり、現象の物理的な仕組み（＝科学的根拠）への関心を欠いていることが原因です。原発事故後は、情報を科学的に咀嚼できないが故の無用な恐怖や差別が、現実の放射能汚染よりもずっと大きく広がっています。文系であっても「本当の科学」を知らなければならない時代なのです。

もう一つ。よく言われる「生物は生き残るために進化した」や「生物や生態系は無駄なくうまくできている」みたいな解釈も、実は単なる思い込みに過ぎません。「美しい解釈に彩られた非現実的な生物像」は忘れて、「現実を生きる生々しい生物」の面白さを知ってほしい！これは僕の個人的な希望ですが、そんな願いを込めて授業をしています。

聴講生のひとこと



仁木先生の授業はすごくおもしろかったです！！生徒の出席カードのコメントに対する答えを扱ったりしていて、理解を促す授業だったと思います。 2012年度「生命の科学」受講生

得意な分野ではなかったが、とても興味がわく授業でした。なるほどと思うことが多く、今までの考えがくつがえされることも多く、学びつつも楽しんで授業に参加できました。

2011年度「生態学」受講生



●東洋史

野口 周一 教授

【のぐち しゅういち】

高崎生まれの高崎育ち、自宅も高崎にあります。現在の本務校は神奈川県。週の大半を神奈川で過ごすようになり、群馬の空っ風が身に沁みるようになりました。好きな国・地域は日本、中国、台湾、イギリスです。そこに共通するものは、美味しいお茶とお酒があることです。

中国の歴史を解きほぐし、 歴史を見る目を養おう

研究テーマ

本来の専攻は東洋史学、研究分野はモンゴル帝国史・元朝史。その後、高経大の近隣のとある女子短大に赴任、それまでの研究成果をそのまま短大生に講義するわけにもいかず、歴史教育の重要性に目覚めました。その短大時代、短期留学引率先のイギリスではケンブリッジ版『中国史』に私の論文が引用されていたことを知り、アメリカではワシントンのサックラー美術館で『蒙古襲来絵詞』の展示にぶつかるという幸運もありました。

その某女子短大時代に台湾の姉妹校の先生方と親しくなり、それを契機に日本と台湾の文化交流の研究にも着手しました。一つは戦前期の花蓮（台湾の東海岸）において短歌結社をつくり『あぢさゐ』という歌誌を刊行した“渡辺よしとか”、という歌人の探索を始めています。二つ目は、戦後“蟻の街のマリア”と謳われた北原怜子の師・松居桃楼の事績をまとめました。因みに、渡辺と松居の戦前期の資料は、日本にはなく台湾大学等にあります。また、北原怜子のお父様は、かつて高経大の学長を務められました。

産業研究所の客員研究員にもなり、群馬で実践された教育活動を3編の論文にまとめ、その集大成が群馬県の外郭団体である“みやま文庫”から『ぐんまの社会教育』として、昨年上梓されました。

担当科目

「中国4000年の歴史」と一口にいいますが、中国は漢民族と55の少数民族からなり、その理解はなかなか難しいものがあります。しかも多民族国家の様相は歴史的に形成されているのです。また、「反日」を叫ぶ動きは今に始まったことではありません。

本講義では、その錯綜した部分を丁寧に解きほぐしながら考えていきます。そして、中国を偏見ではなく「正しく」見るとはどういうことかも考えていきます。

歴史科目は「暗記科目」と考えられています。暗記を要求されることほど苦痛なことはありませんね。講義を通じて、歴史(学)の醍醐味をお伝えしたいと思います。

久宗 周二 教授

【ひさむね しゅうじ】

高崎経済大学経済学部 卒業、日本大学大学院生産工学研究科 管理工学専攻博士前期課程修了、北海道大学大学院水産科学研究科 博士（水産科学）授与。



- 産業・組織心理学
- 人間関係論
- 労働安全衛生

研究テーマ

現在興味があるテーマでは、人間の行動分析です。現代日本の様々な日常生活を中心とした様々な場面を、冷静に観察することによって、今までは気付かなかった、新しい知見が得られます。

労働安全を推進するための自主改善活動についての研究であり、以前は航海訓練所と共同で、練習船の実習生に対して実施して効果をあげています。現在は、北海道漁船海難防止・水難救助センターの協力を得て、北海道の漁業者を中心に、普及活動を行っています。

その他、組織事故の分析、労働災害の研究、街のバリアフリー、地産地消による中心市街地の活性化などの研究も行っています。

ゼミでの活動について

産業心理学や労働安全衛生の視点を学び、社会の諸事象について理解して、ゼミの受講者と相談しながら、テーマを選び、発表を行っています。知識を習得するばかりではなく、それを実践で応用し、様々な問題の解決を図ります。そのために必要に応じて、実地調査、工場見学、自主ゼミを行っています。特に、学生には行動する力や創意工夫力、問題解決能力などを養ってほしいと考えており、現地に出かけて調査・分析を行ったり、様々なことを実体験できたりするフィールドワークを重視しています。これは本学の目指す“実学の精神で学生を教育する”にも通じます。

ゼミの活動の一つとして、地域再生を効果的に実現する取組みとして、地方自治体や地域の団体と協働して調査・研究をしています。毎月第三日曜日に生産者、中心市街地の商店街と協働で、高崎の中心市街地で農産物売る「たかさき昼市」の企画・運営に取り組んでいます。昼市は、内閣府の「地方の元気再生事業」の一環で、地産地消の社会実験としてスタートしましたが、現在は自主財源による事業としてゼミの学生が中心となり、ポスターやチラシを作成し、楽しめるイベントなども企画しています。

その他の、学生による自主的な活動をサポートしていきたいと考えています。卒業研究のテーマも、交通行動の研究、組織事故の分析、労働災害の研究、街のバリアフリー、大手小売店舗の店づくりについての研究、地産地消による中心街の活性化などの多彩です。

産学協同による活動など、大学時代にしかできない貴重な経験を得るために、学生ともに積極的に地域活動へ参加したいと考えています。学内の教育・研究と、学外の社会貢献活動が一体となって活動していくことを理想と考えています。

科学技術の発展と安全

ゼミ生のひとこと



久宗ゼミでは、教室での輪読や発表に加え、工場見学や「たかさき昼市」の企画・運営といったフィールドワーク活動を多く取り入れています。ゼミでは、教室での講義では学べないことも多くあり、とても良い経験になります。ゼミの活動は、ゼミ生が一丸となって活動しており、大学時代の思い出に残るものになりました。

久宗ゼミ1期生 福司 光成



平井 裕久 准教授

【ひらい ひろひさ】

学部では工学部で時系列解析を、大学院では会計学、応用統計学を学び、その後企業経営にも携わりました。一貫性のない道のりを歩んできましたが、この“無駄”を研究や教育に活かしていきたいと思います。

- 企業と会計D
- 原価計算論I・II

会社経営に必要な会計知識

Q 「研究分野もしくは、担当科目の魅力を教えてください。」

会社では「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」という要素が重要となります。そのうち、会計学では、特に「カネ」の視点から考えていきます。もちろん、何事においても根底にあるのは、必ず「ヒト」であると思っています。しかし、実際の友達付き合いで考えてみても、お金を貸したのに返してくれなければ友達関係は壊れてしまいます。これは社会でも同様です。会社は様々な経営活動をおこなって利益（もうけ）があったとしても、なぜか倒産してしまいます。それは、払うべき時に払えるお金を持っていなければ、信用を失い、他の会社が相手（取引）をしにくくなるからです。これを黒字倒産といいます。では、このようなことを防ぐためにはどうすればいいのでしょうか。そこで会社では、資金繰りということをしています。この資金繰りとは、いつ、いくらお金が入ってきて、一方で、いつ、いくらお金を払わなければいけないのかを把握し、お金を払うべき時に払えるようにするためのものです。これは一例に過ぎませんが、実際に経営者の立場で会社の運営（経営）を考える際に、「カネ」の問題は非常に重要なものとなります。このような問題は多岐にわたりますが、それに対処すべく、様々な立場から理論的に学べるのが会計学です。

Q 「推薦する図書を教えてください。」

会計学に関する書籍は数多く出ています。その中には、「経営者のための……会計」のような、実務的なものも多くあります。しかし、大学において会計学を学ぶ際には、理論的な体系に沿ったものをお勧めします。もちろん、社会に出た時には前者のような実務書も役立つと思います。しかし、まずは基礎的な知識を学修することが、実務で活かせる会計には必要不可欠です。また、方程式の解法を学ぶために、まず四則演算の知識が必要であるのと同様に、会計学を学ぶためには、まず簿記の知識が重要となります。簿記は、財務諸表を作成するための世界共通のルールですから、簿記の基本書をしっかりと理解しましょう。

平井先生は学生一人一人としっかりと向き合ってください、私も就職活動など将来についての相談などで貴重なアドバイスを頂き、自信を持ち納得のいく答えを出すことができました。また講義でも、とてもわかりやすく学生の立場にたち教えてください、基礎など要点から応用までしっかりと学ぶことができました。

平井ゼミ1期生 ゼミ長 浅香 英里

ゼミ生のひとこと



福田 敦史 講師

【ふくだ かつし】

2002年慶應義塾大学文学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学。2004年度より「論文の読み方・書き方」担当。専門は哲学・倫理学。とりわけ近頃は、記憶と自我構成と世界理解との関連について考えています。



●論文の読み方・書き方
a1・a2・c1・c2

私は「論文の読み方・書き方」を担当していますが、ここでは、レポートや論文を読み書きする際の具体的な注意点ではなく、もう少し基礎的・根本的なことについて書きたいと思います。それは単純で素朴なことなのですが、皆さんに「分からない」ことを大切にしたい、ということです。

「分からない」ことを大切にすることの意義には大きく二つあります。一つは、私たちの「考える」という営為に関係しています。考えるとはどういうことなのか、思いのほか簡単には答えが出ないものなのですが、少なくとも、私たちが考える時には、何かある問いについて考えている、と言えるでしょう。自分が分からないことを放置せずに自分の問いとして育てあげ、それについて考えるという態度を身につけて欲しいと思います。

もう一つの意義は、世界に対する態度に関係するものです。私たちは、分からないことがあっても、それを自覚せず大切にしないでいると、分からないことがあったことをすぐ忘れてしまいます。すると、私たちは分からなかったことも分かったことにしてしまい、特段そのことを気にしなくなってしまう。それは文章であっても、世界内の出来事であってもです。本当は分からないところのある穴ぼこだらけのはずの文章や世界が、穴ぼこに気づけず、分かっているかのような平板なものになってしまうわけです。私たちが文章を読んだりいろいろな体験をしている時に、何の疑問も湧かない時、それは分からないことがないのではなく、分からないことがあることに自分が気づけなくなっているからなのかもしれません。これは随分と怖ろしいことではないでしょうか。

最後に一冊だけ本を紹介します（実は、他の人に本を紹介するということは、恐いことであり、恥ずかしいことであり、また傲慢なことでもあるように思うのですが）。今回の内容に関連したものとして、野矢茂樹[文]・植田真[絵]『はじめて考えるときのように』PHP文庫、2004年を挙げておきます。考えるということについて書かれた本はたくさんありますが、この本は類書とは異なる示唆を与えてくれるのではないかと思います。

「分からない」ことを大切にする



藤井 孝宗 准教授

【ふじい たかむね】

横浜市出身。慶應義塾大学経済学部・大学院経済学研究科卒業後、愛知大学経営学部専任講師、准教授を経て現職。専門は国際経済学。国際経済学者たるもの国際的に活動しないと、と年1回は海外出張するようにしています。

- 国際経済学Ⅰ・Ⅱ
- 市場と経済

国際経済学の魅力と重要性

研究テーマ

私の研究分野は国際経済学と呼ばれる分野になります。国際経済学とは、名前の通り世界全体の経済の動きについて分析する学問ですが、大きく2つに分けられます。ひとつはモノ、人、企業などの流れ（実物経済）を分析する国際貿易論、もう一つは資金の流れを分析する国際金融論です。私は前者の国際貿易論が専門です。この分野は経済学の最初期から存在する伝統的・基本的なものであるとともに、グローバル化の進展に伴い、極めて今日的なテーマでもあります。

近年のグローバル化の進展により、国際経済学の分野でとり扱うべき仕事は格段に増えています。WTO（世界貿易機関）での世界経済のルール策定交渉や、各国間の貿易協定締結ブーム、自由貿易体制と地域経済との軋轢など、対処すべき課題は増え続けています。しかし、一方でそのための人材は不足しているのが現状です。経済学者は原則論に固執し、反グローバリズム活動家は感情論を振りかざし、交渉に当たる政策担当者は交渉テクニックのしのぎあいに終始する、という現状では、広い視野で将来どうあるべきかを見据える建設的な議論は望むべくもありません。きちんとした知識を持ち、感情論に流されず広い視野で議論できる人材が渴望されています。人材が足りないということは、言い換えれば皆さんが卒業後活躍できる余地が非常に大きい分野です。是非興味を持って勉強してみてください。

担当講義について

本年度の担当講義は、国際経済学、市場と経済、ゼミナールです。国際経済学の講義では国際的な経済活動、とくにモノ・サービスの貿易がなぜ行われ、それが経済にどのような影響を与えるかについて理論を紹介します。ゼミナールでは、少人数で世界で今まさに起こっている問題について、より実的な議論を行いながら対応策を考えていきます。1年生の皆さんにとっては市場と経済でまずお会いすることになります。ここでは経済学の基本的な考え方をご紹介します。今後の勉強でずつと出てくる基礎知識ですので、ぜひマスターしておいてください。

- ・時間にルーズなので、少し遅れても大丈夫
- ・終わるのは遅い
- ・ゼミの自由度が高い
- ・具体例が多く、わかりやすい
- ・漢字が書けない
- ・誤字が多い
- ・書き順がおかしい
- ・学生の自主性を尊重している
- ・のりが良く、飲み会にも来る
- ・マイベース

藤井ゼミ1、2期生

ゼミ生のひとこと



藤本 哲 教授

【ふじもと てつ】

兵庫県出身。神戸大学経営学部卒業、同大学院経営学研究科博士前期・後期課程修了。奈良産業大学講師・助教授、高崎経済大学経済学部助教授、准教授を経て現職。双子の父。



- 経営管理総論
- 経営組織概論
- 経営組織各論

私は経営組織論を専攻しています。研究テーマは組織構造です。「構造」という用語の使われ方を振り返ってみますと、何かよく分からないが構造が存在して、その構造が人々や企業の行動を縛っている、だから打破しなければならないのだ、といった感じで使われることが、過去何度も出てきたように思います。これはある意味でその通りなのですが、物事の一面を表しているに過ぎず、構造のもつ効果にも目を向けたいものです。

経営組織論においては組織構造をいくつかの側面から捉えます。例えば、規則は組織成員の行動を縛りますが、なぜその規則ができあがってきたのかを知れば、そこには経験や試行錯誤から得られた知恵が込められていることに気づくでしょう。また役割分担のやり方も組織構造の一側面ですが、分担により専門化が進むので熟練の育成に適しています。しかし場合によっては、たらい回しが起きる可能性も内包しています。社会ネットワークの点から構造をみると、今の人脈が物事をある方向に決めているのは事実だとしても、あなたが新たなつながりを作ることによって状況を動かすことが出来るかもしれません。一人一人は弱い存在かもしれませんが、組織の構造を知り、うまく働きかけることによって、状況を改善する可能性が広がります。

ゼミでは多くの本を読んでもらうようにしています。実習で得られる経験も貴重ですが、沢山読み、考え、議論するというのは大学生の時にしかできません。通説とは異なる主張を併せて読むことで、多面的な見方を養って下さい。

組織構造とは何か？

ゼミ生のひとこと



経営組織各論のレポートは時間がかかりました。私の場合は教科書を読み始めてからレポートができあがるまで、テレビを見ながらですが、3～4時間かかっていたと思います。これが毎週あるのです。課題が難しい訳ではありません。見た瞬間にできるじゃん」と思うけど、やり始めると時間がかかるのです。3年次の授業だからなんとなくあったのかもしれませんが、こんなのが2つあったら……。

組織運営に関するテーマが多かったです。部活動やアルバイトなどでの経験を元を書くので、就職活動に入る前の準備にもなりました。授業の中ではテーマに関する議論をやっていました。作成したレポートのファイルがたまってくるのを見ると達成感もあり、楽な授業ではないけどやった分だけ身につきます。「大学でどんなことを勉強しましたか」という質問にも自信を持って答えられたかな。

藤本ゼミ 2011年卒業生



●経済・経営のための数学
a1・a2

松本 浩樹 講師

【まつもと ひろき】

前橋工科大学大学院工学研究科博士後期課程 環境・生命工学専攻 准教授 博士(工学) [東京理科大学]
一言 いつも慌ただしくしていますが、実はゆったりとしたことが大好きです。たとえば、気功やハーブに興味をもっています。温泉やお酒も大好きです。

研究は「井戸端会議」

「井戸端会議」、これが私の研究テーマである。と、言ったら信じられない方も多いであろう。それは数学を担当し、数理情報学の研究を行う者との結びつきをイメージすることが容易ではないからではないか。しかしながら、紛れもなく「井戸端会議」が私の研究テーマなのである。

井戸端会議では、まずAという人がなんらかの話をする。それを聞いたBが別の井戸端に行ってAから聞いた話をする。このときに話の内容が変わったり、尾ひれがついたりする。それを聞いたCが、また別の井戸端でその話をする。さらに話が変わり、尾ひれがつく。そして、何度目かの井戸端会議で話される話は、Aの話とは全く異なったものになってしまう。この異なった話を聞いて最初のAの話を知ることができるのだろうか？

これは1)Aという入力信号、2)話が変わり、尾ひれがつくというシステム、すなわち歪みを与えノイズが付加されるシステム、3)その出力信号があるというモデルにおいて、出力信号から入力信号やシステムが推定可能かという問題に他ならない。この研究は、現在のシステム工学、通信工学、情報工学、生体工学などの共通基礎となっており、物理の観点からは全く異なる現象が、情報の観点からは同一の現象として扱うことができることが最大の魅力である。

私はこの問題の理論解析を数学的に行い、通信、生体、音声や画像に適用し、具体的にいくつかの課題を解決した。今後は、工学的課題への適用のみならず、経営・金融における予測問題、心理学的課題等への適用についてもさらなる研究を行いたいと考えている。

最後に、学生の皆さんへのメッセージ：

数学は言葉だ！ 必ず喋れるようになる!!

水口 剛 教授

【みずぐち たけし】

企業勤務、公認会計士、環境 NPO 事務局などを経て、本学教員となった。専門は監査・保証業務、環境情報開示、環境会計、社会的責任投資、NPO 会計など。どれも今動きつつある分野で、自分自身もその流れの中にいる感じ。大学の先生がこんなに忙しいとは知らなかった……。



●企業と会計A・C
●環境会計

私の研究テーマ

私は、今、責任投資 (Responsible Investment) と環境情報の開示という分野を研究しています。それって、一体、何のこと？ と思われるでしょうが、これは、地球環境問題などを経済の仕組みの中で解決していこうという考え方です。

異常に暑い夏や豪雨による災害をみれば、これは大変だと思うことでしょう。このような気候変動問題をはじめ、地球環境問題の原因のほとんどは人間の経済活動です。経済活動を中心的に担っているのは企業（会社）で、その企業の活動を支えているのは私たちのお金です。私たちが銀行や年金、保険などに預けたお金は、貸し付けや株式投資を通して企業活動に使われます。このとき、どのような企業にお金が行くのかによって将来の社会の姿が変わってきます。そして、どの企業に投資するかを判断するためには情報が必要です。情報の中心は会計です。

ところが、今の会計は利益の計算はしますが、その企業が地球環境問題にどう対応しているのかは示しません。これでは、経済の仕組みの中で、たとえ環境に悪くても儲かる企業にお金が集まりかねません。そこで、利益だけでなく、環境や社会との関わりも会計やその他の情報として提供すべきではないか、と考えるのです。そしてそのような情報が意味をもつためには、社会にとって本当に良い企業にきちんと投資する投資家が必要です。それが責任投資です。それらがどうすれば社会に定着するかが、今の私の研究テーマです。

投資家の責任と環境問題

ゼミはこんな感じ

ゼミでは、実践を通して学ぶということを重視しています。2012年の3年生は班にわかれて、3つの課題に取り組みました。まず、関東地区の大学のゼミが1年に1回集まって、プレゼンテーションを競うインナー大会プレゼンテーション部門に出場しました。また、大学として環境問題や教育にどう取り組んでいるかを調べて本学のCSR報告書の作成にも取り組みました。そして、ゼミの活動をベースにして、大学全体を巻き込んだ学生環境委員会を設立することになりました。環境委員会には1年生から入れますので、環境問題に関心のある人は、ぜひ参加してください。

ゼミ生のひとこと



水口先生は、私達の自立性を尊重しながらも、課題に行き詰まった時は新しい切り口から問題解決へのヒントを下します。ゼミ生だけではなく学生全体からの信頼も絶大と言える、頼れる先生です。まだまだ教えて頂きたいことが沢山あり、ゼミの時間がいつも楽しみです！

水口ゼミ15期生（2010年入学）ゼミ長 関口花乃子



宮崎 文彦 講師

【みやざき ふみひこ】

専門は、政治理論・行政学／公共哲学。哲学や思想と現実の政策をどうやって結びつけるか、といったことを考えています。とともに音楽をはじめとする芸術全般や、聖書研究も私にとって大事な「ライフ・ワーク」です。

●論文の読み方・書き方 a1・a2・c1・c2

大学で学んだことは役に立つ？

私はこの大学で「論文の読み方・書き方」という授業を担当しています。この名称からして皆さんは、何か実用的なこと、役に立つ「テクニック」を教えてくれる授業と思われるかもしれませんが、でも、そのようなことは2の次、3の次。もっと根本的な「自分の頭で考える」ことを身につける、というのがこの授業の目的です。

「自分の頭で考える」？

大学は単に中学・高校の次に進む「学校」と思っている人も多いでしょう。でも、大学での「学び」は、高校までの「勉強」とは全然違います。では何が？

簡単に言ってしまうと、高校までの勉強は知識を「教えてもらう」ことが中心ですが、大学での学びは知識を活用して自分なりに「考える」ことが中心になります。もちろん、講義で専門的なことを教えてもらうことも大切ですが、それはあくまで前提のお話。学んだ知識を基にでは、あなたはどうか考えるの？」が大学で求められることなのです。

どんなことでも自分の意見を言えればいいの？

では、考えたことなら何でも思いつきでもいいのかといえば、残念ながら、そんなに甘くはありません。友達同士ならいいでしょうけれども、反対の意見を持っている人は全く聞いてくれないでしょう。話を聞いてもらい、納得してもらうためには、自分の意見が説得的であることを相手に伝えなければいけません。そのために必要なのが、客観的な資料・証拠や論理的な思考・表現なのです。論文というものはただ調べたことをまとめたものでも、あるいは自分の意見を一方的に述べただけのものでもありません。

論文もコミュニケーション

自分の意見をきちんと相手に聞いてもらえるようにする、ということはコミュニケーションの基本です。コミュニケーションは、社会に出てからも非常に大切なものですから、単なるテクニックで済まされるものではありません。

大学で学んだことは役に立つか？ 大学は受身で「教えてもらう」場ではありません。自ら主体的に「学ぶ」場です。役に立つか立たないかと受身で判断するのではなく、自ら役立つように活用するべきです。大切なのは「皆さん自身が」活かせるかどうか。この大学全てを大いに活用して下さい。

授業と言うよりゼミでした。私たちは受動的に先生から講義を受けたのではなく、みんなで能動的に論理的に考え、お互いにきちんと伝え議論を進めました。

客観的に読む・考える力を先生、「ゼミ生」と一緒に色々な社会問題を使って、チームワークで情報収集→先行研究のまとめ→プレゼン→ディベート→反省→論文で身に着けました。

2010年入学 趙 菁

受講生のひとこと



宮田 庸一 准教授

【みやた よういち】

- <経歴> 早稲田大学大学院理工学研究科修了、博士（理学）、早稲田大学本庄高等学院 教諭を経て2008年4月より現職。
- <趣味> テレビでのスポーツ鑑賞、散歩、統計学に関する名著の収集



- 統計学
- 応用統計学
- 統計学概論

まず統計学がなぜ必要かを説明します。

例えば、ある病気を治す薬が出来たとします。この時、「なんか効くらしいよ」と言っても説得力はあまりないでしょう。ちゃんと多くの被験者へ薬を投与し、効くかどうか、副作用はないかどうかを数値で評価してあげる必要が生じます。薬の効果は、人により効果が変わりますので、データを取り、そこから結論を導きます。そこで統計学が必要になるというわけです。

またコンビニエンスストアなどのお店を開く場合にも、多額のお金を投資するわけですので、ちゃんと利益を得ることができるかどうかを予測する必要があります。このため、既存の、もしくはつぶれたお店における人通りの数、駅からの距離、他に競合する店があるかどうか、その時の売上などのデータから、経営していけるかどうかを判断するために、統計学は重要なツールとなるでしょう。

統計学は実社会と関わりの深い学問ですので、経済学、医学、生物学、工学など様々な分野で使われております。

統計ソフトの出力された数値の見方がわかれば、ある程度のデータは処理できますが、万能ではなく、データが得られる社会的背景によっては偏った数値を導きだすことがあります。この時に、なぜうまくいかないのか、どうすれば改良できるのかを考えるときに理論が必要となり、この理論を理解するためには数学が必要となります。

統計学の理論では、主に

- ① Σ (シグマ記号) の計算、② 微分、③ 積分、④ ベクトルと行列、⑤ 偏微分、⑥ 確率 (確率変数、期待値、分散)、⑦ 重積分

を使います。①～⑥までは経済学部講義科目で学ぶことができますので、数学に関する科目 (一般教養科目、経済経営の為の数学など) → 「統計学」 → 「応用統計学」の順に受講すれば無理なく学べることでしょう。ただし高校で習う数学I,IIと数学Aを理解していれば、数学の講義を取らずに「統計学」を履修しても問題ありません。

「宮田ゼミ」については、書く余白がなくなっていました。これは私のウェブサイト <http://www1.tcue.ac.jp/home1/ymiyatagbt/> にありますので、参考にしてください。

統計学はなぜ必要か？

ミ生のひとこと



宮田先生は、高校での指導経験がある大学教員としては珍しい先生です。宮田先生は、とてもわかりやすく、丁寧に授業を進めてくれます。また「統計学」は、新入生のみなさんにとってはあまり馴染みのない分野かと思いますが、しかし、身近な例を挙げると、アンケート結果の分析など、社会人にとって必要なスキルのひとつだと思います。

2008年入学 川合 賢大



矢野 修一 教授

【やの しゅういち】

1960年生れ。京大卒。京都大学博士（経済学）。コーステレオから流れる音楽はいろいろ。今も昔も変わらないのは、矢沢永吉、キャロル、そして時々、ちあきなおみとプレスリー。具体的に汗を流しもせず、勝手に限界を定めてるヤツは苦手。

- 世界経済論Ⅰ・Ⅱ
- アジア経済論

「可能性」を育む 「まだない」ものに向き合う

学部時代は武道、アルバイト、酒、バイク・ツーリング等々、「学生生活を謳歌した」と言えば聞こえはいいですが、要するにあまり勉強はしていませんでした（ゼミ生の前では大きな声で言にくい!）。いろいろあって進学を決意したものの、不勉強な人間をすんなり入れてくれるほど、当時の大学院は甘くはなく、あえなく留年。経済原論、経済史、経済政策、英語、ドイツ語。出題範囲は限りなく広く、何が出題されるか分からない。先輩や仲間とともに勉強会をやり（週に1度は飲みながらの議論!）、翌年ようやく合格しました。

大学院では、A.O.ハーシュマンの研究とともに世界経済の歴史分析、現状分析を進めました。研究者として、世の中に最初に名前が出たのは1989年、スーザン・ストレンジの第一作、*Sterling and British Policy* の翻訳者としてです。恩師・本山美彦先生（現・大阪産業大学学長）らとの共訳でした。

ハーシュマンは、国際貿易、開発経済学、政治経済思想、組織論等、多岐にわたる著作を残しており、それに付き合う以上、こちらも広範な領域の研究が必要になります。おかげでいろいろな勉強をさせてもらいました。

ハーシュマンはそれぞれの著作がそれぞれの分野で評価されているものの、日本では、その全体像を研究成果としてまとめた人はいません。2004年の拙著『可能性の政治経済学』（法政大学出版局刊）が初の研究書です。また、私が2005年に翻訳した*Exit, Voice and Loyalty* は、彼の代表作のひとつで、経済学のみならず、経営学、政治学、社会学でも古典的の評価を得ています。おかげさまで訳書『離脱・発言・忠誠』（ミネルヴァ書房刊）も増刷を重ねています。私にとって大きな研究成果としては、今のところ、これら2つが挙げられるでしょう。

政治的・歴史的要因を捨象した経済学、貨幣抜きで物々交換のごとく貿易を論じる国際経済学には、昔も今もなじみません。現在、ゼミ卒業生と共同で、E.ヘライナーの *States and the Reemergence of Global Finance* を訳しています。国際政治経済学の基本文献です。日本で言う「世界経済論」は、国際的には、“International Political Economy” という領域になるようです。

高経時代、矢野修一先生のもとで、世界経済論を中心にたくさんのことを学んだ。ゼミでは課題に真剣に取り組む態度を学んだように思う。幸か不幸か大学教師になってしまった私は、ゼミでの先生の様子を折に触れて懐かしく思い出す。学生と真摯に向き合い、その可能性を最大限引き出そうと努力されていた先生の姿は、教師としての私の原風景である。

2003年卒業 第36期体育会代表幹事
下関市立大学経済学部准教授 山川 俊和

ゼミ生のひとこと



山口 憲二 講師

【やまぐち けんじ】

経済学部非常勤講師

1955年京都生まれ。神戸商科大学（現兵庫県立大学）卒業。松下電工㈱等勤務を経て群馬大学大学院社会情報学研究所修了。現在の本務校は新島学園短期大学キャリアデザイン学科。関西から群馬県に来て20年。



●キャリア・デザイン
●コンピュータ・リテラシー

経済学部で「キャリアデザイン」と「コンピュータ・リテラシー」の2科目を担当している。

「キャリアデザイン」は各自の生き方を、主として職業生活の面から考え、学生時代の学びを、より意義あるものにするよう刺激を与えるのが、教える側の意図した目的である。

そのために、キャリア（career）というものの本質を探り、現代の産業社会、企業組織の中における仕事の実際を説明し、その上で、各自がキャリア観を構築することの重要性に気付くよう、手を変え、品を変え講義する。

有名な話がある。

「ディズニーランドのレストランに若い夫婦が来た。2人はそれぞれの注文に加えて、お子様ランチを注文した。ウェイトレスが怪訝そうな顔をしたので、2人は事情を説明した。今日は亡くなった子供の誕生日で、生前、今度の誕生日はこのレストランで食事することを約束していたと。ウェイトレスはすぐに事情を理解し、2人の間に子供用の椅子を配置し、どうぞ楽しいお誕生日を、と言った。」

さて、ウェイトレスの仕事とは何か。粗相の無いように食事を提供することか、メニューについての正確な知識を知っていることか。実はこのレストランでは、大人にはお子様ランチを出さないになっていた。

教員はこの話で、学生に仕事の本質を考えることの重要性を気付かせることを意図している。企業の中にはさまざまな仕事がある。たとえば一口に営業職といっても企業によって実に多様である。単に「商品を販売する」とは言えない。学生に人気の公務員というのは、本当はどのような職業なのだろうか。「公務員になりたい」というキャリア目標は正しいのだろうか。本当は、「〇〇がやりたいから公務員になりたい」というのが正しいのではないだろうか。

「キャリアデザイン」はこのように、ほとんどの学生が今まで考えたことのないような、自分のキャリア観というものと向き合う機会と知識と刺激を提供する。

先のレストランの話に戻る。

教員の意図は仕事の本質を考えることであったが、マーケティングに関心のある学生なら、サービス業における顧客満足というテーマに関連付けて捉えるかもしれない。また、人的資源管理に興味があるなら、そのような従業員の行動を生み出す組織文化や従業員の採用や教育の問題として捉えるかもしれない。

こういう講義が意図していない学びというものも大事である。大学とは、そういう環境である。ただし、そういう刺激をキャッチするアンテナの準備は、自分自身でやるしかない。

大学とは刺激・環境
——意図した学びと意図しない学び



山崎 薫里 教授

【やまざき かおり】

新潟県出身。筑波大学自然学類、同大学院教育研究科修了、同大学院数学研究科中退。筑波大学数学系・数理物質科学研究科助手を得て、2007年4月より現職。私の授業では、赤・青チョーク用の2色の他に、黄色チョーク用の第3の色ペンを用意しておくこと、きつと、やる気がでます(?)。

- 微積分入門
- 微積分
- 線形代数入門
- 線形代数
- 経済経営のための数学

数学の研究って何をやるの？

研究テーマについて

研究しているテーマは、位相空間論(連続関数の拡張問題、集合値関数の解析、等)です。数学の基本的な道具を作る縁の下の力持ちとなる研究です。意外に思うかもしれませんが、私の研究には「数字」はそれほど出てきません。論理の記号がたくさん出てきて、変な絵をかくて考えていることが多いです。学生の皆さんからよく「数学の研究って、問題を解くのですか?」と訊かれます。誰かが提出した問題を解いたり、価値のある問題そのものを作ったり、知られている方法が使えない箇所を切り抜ける上手な方法を考えたり、別々の定理を一つにまとめて説明する方法を考えたり、ありとあらゆる数学で価値のある事実(新しい、正しい、面白い、の三要素そろっていること)を探す(生み出す)ことを試みています。例えて言うならば、道の無い山中で、自由に、価値のあることを探しているようなものです。「新しい近道を発見した」「この場所の地下水は隣の山のものとなつがっていることを示した」「幻の美しい花を探していたら新種の毒草を見つけた」といったところでしょうか。

担当科目について

微積分、線形代数、経済・経営のための数学、等の数学の授業を担当しています。授業の初回にアンケートをとると、「内容を簡単にしてください」「証明はやらなくて計算の方法だけ教えてください」「板書の内容はプリントにして配ってください」「出席点で単位を下さい」といった、楽に要領よく単位をとることを望むものが結構多くあります。ここで一言。少ない努力で楽に単位を取ろうとする姿勢は、必要な場合もありますが、時として内容を理解し実力が着くことを妨げます。内容を理解して、理解していることをしっかり自分の手で計算して確認して、わかっていないと思ったら前に戻って理解し直して、一つ一つ着実にわかっていくことが大切です。わからないことをとことん考えて迷ってみることのできる機会は大学の授業では多くありますが、その中でも、「しっかり理解する」ということの感覚を鍛えるには数学を勉強することは最適です。そんな機会を逃がしたくないという皆さん、数学の授業へどうぞ。

山崎ゼミの雰囲気一言でいうと“自由”です。私たちのゼミは高度な内容をやることを必ずしも目的としている訳ではなく、研究した内容をいかにして人に伝えるかということを重要視しています。グループで研究の時は、いろいろと意見を出し合ったり、教え合ったり、アイデアを出し合ったりして、協力して作り上げた時はやりがいを感じられてとても楽しかったです。先生は、さばさばしている性格ですが、優しく友達みたいに接してくれます。

山崎ゼミ1期生 吉田由美子

ゼミ生のひとこと



山本 喜則 教授

【やまもと よしのり】

東京教育大理学部応用数理学科卒業。京都大学工学博士、柔道部顧問、いまも学生とたまに練習します、「還暦過ぎた人でそんな厚い胸板のいい人はいですよ」と言われて気を良くし(笑)。



- 情報基礎
- 情報処理Ⅰ・Ⅱ
- 外書講読

景気が悪くなると途端に公務員希望者が急増したり金融系が増えたりといった動きとなって現れる。こうした「右往左往」は長い目で見てどうなのだろうか。卒業生には、良く知られた情報系メーカーで努力を続けて今では海外拠点の責任者になりつつある例、大学の教員になっていく例、起業して世界に名だたる情報系企業主催講習会の講師を若くして務めている例、と景気が悪からうが光っている者はしっかりいる。

一生の大事なことである就職先を考えるのに、あちこち調べて幾つもチャレンジするのは自然だが、これはしかし「右往左往」とは違う。「右往左往」は自分の確固とした考えがなく、周りに流されてすることである。人生でこれをやるといつも人の後塵を拝することになる。何故なら、自分のところに影響が顕れた頃には問題はずっと先に行ってしまったからである。間に合わない。

常に少し先に視点を置いて、次は何が起こるか考えよう。雑音に悩まされても、その中から本当に役立つ情報を探そう、これが上手くできるかどうかは実は大変難しいのである。そして自分は何をやりたいのかじっくり考えてベストでなくともベターの選択ができれば納得がいく。将来の布石は拔かりなく打ちたいがこれもベターで良しとしよう。株屋の世界に、「魚の頭と尻尾は他人にくれてやれ」という諺があるが、意味分かるかな。

オーケー、今回の話はここまで、そうそう最後に、ゼミをどこにするかでも右往左往する学生がいるが、これについても同様。周りに流されて特定のところに集まり過ぎて入れず悩むなんてバカバカしいことだよ。ゼミは将来の勉強のきっかけに過ぎないのです。いろいろなことを学んでみよう。情報系が好きだから勉強するのは大いに結構、しかしそれしかやらないのは「オタク系」と言って少々バカにされるし、社会であまり役に立たない。好奇心は若い時の特権かもしれない。どんどん新しいことにチャレンジ!

少し先に視点を置いて、「次」を考える。



山本 芳弘 准教授

【やまもと よしひろ】

環境、エネルギー、資源およびその関連領域に関心があります。また、より効果的な教育・研究方法を求めて試行錯誤しています。当時はたいへん自然豊かなところなので、休日はいっぱい出かけることができます。

- 市場と経済
- 環境経済学Ⅰ・Ⅱ

環境経済学から 経済活動のあり方を再検討する

環境・エネルギー・資源などにかかわる経済問題について研究しています。具体的な研究対象は、環境汚染、地球環境問題、エネルギー問題、資源利用のあり方など、枚挙にいとまがありません。これらは、私たちの世代のみならず将来の世代にとっても、また我が国のみならずあらゆる国・地域の人々にとっても、極めて重要な問題です。にもかかわらず、一向に解決しないのはなぜでしょうか。少し考えてみると、これらの問題には経済活動が大きく関係していることに気付くでしょう。ということは、なんとかして解決しようとするならば、経済活動のあり方から再検討してみる必要があるということになります。それこそ今日の私たちの経済社会を根本から変えなければならないかもしれません。このような難しいけれども解決しなければならない課題にチャレンジすることは、たいへんやりがいのあることだと思いませんか。

環境・エネルギー・資源などにかかわる問題は、新聞や雑誌、テレビなどで頻繁にとりあげられています。その上、身近な問題であることも多く、誰でもこれらの問題について何かしら述べるのできるのではないかと思います。しかしながら、必ずしも真の理解や問題解決につながっていないのは、それらがしっかりとした学術的知見に基づいたものではないからだと思えます。経済学の基礎の上に成り立つ環境経済学は、問題の本質を捉え、より効果的な処方箋を見つけるための有効な手段のひとつなのです。

学部授業では、経済学への入門である「市場と経済」と、専門分野の「環境経済学」を担当しています。「環境経済学」は専門応用科目ですが、それを勉強することによって、経済学の理解がより深まることもあります。また、ゼミでは、環境経済についてゼミ生が調べたことや考えたことを発表し、議論するというスタイルをとっています。ゼミ生の自主性を尊重し、自由に研究できるように心掛けています。

現在、公害・生態系破壊・地球温暖化などの環境問題が深刻となっています。私たちのゼミで学ぶ環境経済学は、そのような様々な環境問題を経済学の観点からアプローチし、分析する学問です。ゼミでは、一人一人またはグループごとに興味のある環境問題から自由にテーマを設定し、先生やゼミ生と意見交換も行いながら研究することができます。

2010年入学 坂入 京太

ゼミ生のひとこと



山森 哲雄 准教授

【やまもり てつお】

東京都出身 東京大学大学院経済学研究科博士課程修了
博士（経済学）
日本学術振興会特別研究員 PD、群馬工業高等専門学校
専任講師を経て現職。



●基礎ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ
●ゲーム理論

研究テーマ

私の研究分野は「ゲーム理論」です。ゲーム理論とは、複数の意思決定主体の間で生じるさまざまな戦略的関係を分析する学問です。戦略的な状況の例としては、将棋やチェスなど遊戯としての「ゲーム」を想像すれば分かり易いでしょう。こういった世界では、相手の手の内を読んで、自分にとって最善の手を考えなくてははいけません。しかし、相手の出方を互いに読みあうという状況は、勝ち負けのはっきりした遊戯の世界だけでなく、私たちの日常生活にもありふれた状況なのです。私たちの日常生活は、友人、恋人、同僚、家族など、常に他人との複雑な人間関係のなかで営まれています。こういった状況では、相手の考えや意図を読まずに自分がどういった行動や発言をしたらいいのか分かりません。相手の事を読み間違えると大変ですね。友人から絶交されたり、失恋したりするかもしれません。また、「意思決定主体」の単位を企業や国家などの組織に広げて考えてみて下さい。すると、企業間や国家間の競争・協調関係など、さまざま社会的関係が戦略的な関係にあることが分かります。ライバル企業よりも製品を安く販売すべきか、もっと自国の軍備を増強すべきかなどは、すべて相手の企業や国の出方を読まなくてははいけないのです。このような戦略的関係を分析するゲーム理論は経済学をはじめ社会学や政治学など多くの社会科学で応用されています。とくに、経済学にとってはいまや中心的な分析手法であると言えるでしょう。ゲーム理論に少しでも興味を持った学生はぜひ私の講義を受講して下さい。

担当科目&ゼミナール

私が担当している講義は「ゲーム理論」のほかに「基礎ミクロ経済学Ⅰ&Ⅱ」と「ゼミナール」があります。ミクロ経済学は市場の資源配分メカニズムについて研究する学問です。社会の富を人々の間でどのように分け合うのが望ましいのかについて、その考え方の基礎を学びます。ゼミではゲーム理論の入門書を輪読しています。ゼミ生には各章を分担して報告を行ってもらいます。ゲーム理論について理解することはもちろんですが、コミュニケーション能力、とくに自分の意見や考えを相手に論理的に伝えるという点に重点を置いて指導をしています。

ゲーム理論ってなに？

ゼミ生のひとこと



山森先生は、ミクロ経済学とゲーム理論を教えている先生です。授業では経済学部
の学生には必須のミクロ経済学を簡潔に分
かり易く教えてくれます。また行動経済学を
研究している先生でもあり、経済学実験も
行います。授業でも実験を行い、楽しく理
解を深められます。知識も広く、気さくな方
なので、ぜひ受講してみてください。

山森ゼミ1期生 萬井 大輝



鷺北 貴史 講師

【わした たかちか】

1961年 横浜生まれ。北里大学卒。慶応義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得。タウン紙記者、理科教師を経て、30代半ばで大学院進学。専門は、教育社会学・家族社会学・リメディアル教育論。自称、リメディアル教育学会の旋風児（マトガイ）「ユニバーサル時代の大学の在り方」が主な研究テーマ。

●論文の読み方・書き方 b1・b2・c1・c2

学生諸君よ、試行錯誤しながら 自分探しをしようぜ！

実は、私は超劣等生でした。高3の全国模試では偏差値25を達成！担任からは「進学はあきらめろ」と言われたアホ少年でした。

二年浪人の後、第6志望校（すべりどめ）の理系の大学にいましたが、解剖がダメ、pg（ピコグラム＝1兆分の1グラム）なんて細かい作業は向いて無いと分かっただけの墮落した学部時代でした。ひたすらジャズとボウリングと睡眠の日々でした。当然、留年しました。（笑）

タウン紙記者を経て、高校の理科教師になりました。いわゆる「ヤンキー高校」で格闘していましたが、教職で習った事と現実にはかなりのギャップがありました。「教育の問題を学び直さない」と……と33歳の時決意して、勉強をゼロからやり直しました。

最初は、教育哲学から入り、教育心理学をかじりましたが何かしっくりきませんでした。そして教育社会学が当時の自分にはビビッときたのです。そして今の師匠のゼミの聴講生にいただき、修士、博士と13年かけて到達しました。「ビッグマリオン効果」という理論に出会った時に、自分のモヤモヤがスッパリ晴れ渡った感動は言い表せないものでした。そして社会学の実証研究へと専門が移っていきました。

社会学的な視座は、経済の諸問題の背景を知る手がかりになると考えて講義をしています。「ユニバーサル時代の大学教員は、研究者である前に教育者であるべきだ」この持論を実践すべく魂の社会学講釈師の立場で学生諸君と熱い時間を共有していきたいと考えています。

講義は「論文の読み方、書き方」を担当しています。

実は、論理的文章を読み書きするスキルは、自分の頭で思考するスキルなんだよね。「問い」の深さが、勝負なんだよ。

経済大に着任して5年目になります。毎年、三扇祭のステージに学生と出演しています。前は「宇宙刑事ギャバン」を絶唱。なんと、準優勝してしまいました。

学生目線で、今後も「問い」の世界へと、学生諸君をいざなっていけます！

「論文」と聞くと、小難しいイメージを抱かれるかもしれませんが。ですが堅苦しく考える必要はありません。鷺北先生の講義は、文章を書くことが苦手だという意識を、文章を書く訓練の中で解消してくれることでしよう。この講義では、経済学部の講義であるにもかかわらず経済学に偏らない幅広い知識や情報を楽しく教えて頂きました。文章を書くことへの苦手意識を克服するとともに、大学生活において更には社会人に求められる“伝えたい意図を簡潔に且つ的確に他者へ伝える”能力を身につけられます。また、大学の講義の常識を覆す「革命的」な講義でした。まさか公立大でこんな講義に出会えるとは……。 2009年入学 福田 彩

鷺北先生のひとこと





『やさしい経営学』

- 日本経済新聞社 (2002年)
- 価格680円 (税込)

藤本 哲

「歌のさわり」は歌のどの部分を指すかご存知だろうか。初めの部分ではない。一番の聞かせ所という意味である。本書は経営学の入門書ではなく、入門書以前の本。経営学の中でも経営戦略と経営組織から、さわりの部分だけを集めたものといえる。そのなかでも一番に読んで欲しいのは、第6目の2時間目「日本型人事の本質」である。それを読み終わったら、目次を見て興味の湧く章から読んでいこう。

関根雅則

日本でも特に著名な経営学者や企業経営者が、経営学の各テーマにしたがって分担執筆している本です。書名に「やさしい」という言葉が入っており、かつ、カバーイラストも小中学生でも理解できる印象を与えるデザインになっていますが、学者が執筆している部分はそれほどやさしくありません。したがって、経営者が執筆している箇所から読んだ方が、経営学ないし企業経営に対する関心が湧くのではないかと思います。ただし、全体を読めば経営学的重要論点が理解できると思います。

加藤健太

この本の特色は、長期不況の中で成長モデルを提示したユニクロの柳井正やセブンイレブンの生みの親である鈴木敏文といった経営の実践者（経営者）の講義を含む点と、戦略や組織を理論的に解説する際に、トヨタやヤマト運輸などの具体的な話を散りばめた点にある。それゆえ、本書は『日本経済新聞』の連載をベースとし、必ずしも学生向けに書かれたテキストではないけれども、経営学初心者にも取っ付きやすい内容になっている。

藤本 哲

官僚制組織は悪い組織の典型だと一般的には思われている。しかし健全な官僚制組織は効率的な業務遂行と創造性発揮のために必要不可欠であると、この本は冒頭で述べる。「やるべきことを、きちんとやるのが難しいのだ」ということを時々見聞きする。流行の経営用語に飛びつくよりも、昔からいわれている基本的考え方や、自分自身の実感に素直に、愚直に取り組むのが正しいように思える。力強いつかみ、平易な表現で、一気に読める。

関根雅則

そもそも組織とは何であるのかについて考える機会を提供してくれる本です。組織には様々な形態が存在しますが、それぞれ一長一短があり普遍的な組織形態というのは存在しません。本書は、従業員がどのように行動すると組織が機能するのか、あるいは、逆に機能しないのかをわかりやすく示しています。おそらく大抵の人は何らかの組織に属していると思います。自分の所属する組織と照らし合わせながら読み進めると納得させられるところがたくさんあります。

加藤健太

本書を読んで興味深く感じるのは、基本的な組織論について、この世に蔓延する数々の思い込みや誤解を正している点と、(日本の)組織のダメなところ(問題点)と真摯に向き合って議論を展開している点である。著者は「問題に対する解答は、各人がその場その場で自分の頭で考え出していくべきものだ。だから経営学は答えを教える学問ではない」と述べる。大切なのは、本書を指針として、自分で考えることなのである。



沼上 幹

『組織戦略の考え方
—企業経営の健全性のために—』

- ちくま新書 (2003年)
- 価格756円 (税込)



井原 久光
『テキスト経営学
[第3版]
基礎から最新の理論まで』

- ミネルヴァ書房 (2008年)
- 価格3,360円 (税込)

藤本 哲

経営学の授業の組み立て方として大まかに二種類ある。学問の発展段階を順に追っていくのがいいのか、分野毎にやっていくのがいいのか、一概には決められない。この本はいいところ取りをしているな、というのが初めて読んだときの感想だった。バランスのとれた良い教科書だと言える。それだけでなく、理論や研究の結構詳しい紹介をしていて、理解の促進を助けている。個人的には理想の教科書に近いと思う。

関根雅則

経営学の幅広い領域をカバーした本です。4編構成になっており、第1編では企業論、第2編では経営学説史、第3編では組織論、第4編では個別の経営理論(経営戦略論、マーケティング論、生産管理論、財務管理論など)を取り上げています。経営学の全体像や関連領域を把握するのに適した1冊といえるでしょう。また、多様な理論が登場しますので、大学において研究すべきテーマを発見する一助になると思います。ゼミの選択にも役立つのではないのでしょうか。

加藤健太

本書の目配りの範囲はとても広い。「企業とは何か」から始まって、組織と戦略はもちろん、科学的管理、マーケティング、生産、財務、そして日本的経営まで幅広く記述されている。学問は、自分の興味・関心をどこに向けるか、あるいは興味・関心がどこに向かうかを探ることから始まる。と考えた場合、テリトリーの広さは助けになる。ここをスタートラインに関心の向いた分野を自分で掘り下げていけばいいからである。



榊原 清則
『経営学入門[上][下]』

- 日経文庫 (2002年)
- 価格903円 (税込)

藤本 哲

上下二巻本の入門書である。上巻と下巻では特色が異なっている。上巻は経営組織論と経営戦略論についての入門的教科書であるが、戦略論については結構詳しく書いてある。下巻では、密接に関わっている戦略論と組織論について、いくつかのテーマを取り上げて解説している。日経文庫は文庫と銘打っているが実際は新書判である。日経文庫には多数の入門書があるので、他にどんなものがあるのか書店に見に行ってみよう。

関根雅則

経営学の主要分野である組織論と戦略論を中心に据えてまとめられた本です。上巻と下巻に分かれていますが、上巻では、組織論と戦略論の基本概念や先行研究が紹介されています。下巻では、「企業成長」、「国際化」、「社内ベンチャー」、「研究開発」といった個別のテーマについて組織論と戦略論の観点から検討されています。初学者向けの入門書という位置づけですが、ある程度経営の知識を積んだ人にとっても十分読み応えのある内容になっています。

加藤健太

この本は、戦略論と組織論の2本柱に丁寧な説明を加えると同時に、企業のダイナミックな成長プロセスに光を当て、企業のグローバル化と社内ベンチャー、研究開発を組織と戦略の視点から論じたテキストである。また、下巻の付録「経営学の変遷」と「文献紹介」には、けっして簡単ではないが、背伸びをして読んでほしい文献が並んでいる。それらは経営学の「入門者」にとってけっこう役に立つと思われる。

総 評



左から 関根雅則教授／藤本 哲教授／加藤健太教授

藤本 哲 大学の勉強をするときに授業で指定されている教科書だけを読んで分らないと思っていませんか。昔からある「読書百遍意自ずから通ず」という諺は、一面の真理を表していますが別の場合には間違っています。『Intro』の2004年版にも書きましたが、難しい本を読んで理解するためには、そのための予備知識が必要です。ですから難しい本を読まなければならない場合には、いきなり読み始めるのではなく、その分野の入門書や解説書から読み始めるのがいいのです。「急がば回れ」です。

シラバスを見よう。大学生協購買部の教科書売り場へ行こう。自分の履修する授業だけでなく、他の授業の教科書を手に取ってみよう。目次を見たり、中身をばらばらっと見よう。良さそうだと思ったら入手して自分の本棚に並べておこう。すぐに読む必要はない。何か分からない事が出てきたときに、関連するページを索引で探して読むだけでも随分違うものです。

関根 雅則 経営学は、企業をいかに存続、成長させるかを主要なテーマにしています。したがって、経営学の理論は、企業業績を維持あるいは向上させるためのノウハウということができるでしょう（すべてではありませんが……）。ただし、ノウハウといっても、多様な企業に通用するよう抽象度が高くなっています。つまり、個別の企業に対して具体的かつ直接的にどう行動すればよいかを示す指針ではありません。結果として、「経営学の理論は実践では役に立たない」といわれることがあります。しかし、それは間違っています。抽象度の高い理論を実践においていかに応用するかが重要なのです。そこで、学生の皆さんには、経営学の理論を学ぶと同時に、それを応用する力を養って頂きたいと思います。そのためには、実存する企業の事例を研究することが必要です。今回は、経営学の入門書を4冊ほど紹介しましたが、ある程度基礎知識を身に付けたら、次の段階では数多くの事例に触れてみて下さい。

加藤 健太 経営学に限ったことではないが、今年から、本を読むことの重要性をゼミ生に強く訴えるようにしている。大学では、レポートや論文など比較的長い文章を論理的に記述する機会が少なくない。だが、端的に言って、文章は読まない書けないのである。マンガを読んだことないひとがマンガを書けないように、論文を読まないひとは論文を書けない。

大学で書く文章は、いろいろなルールと作法に基づいていて、表現もある意味、独特である。小説とは当然違うし、ジャーナリストが書くノンフィクションとも違う。ここで紹介した文献は、そうしたルールや作法、表現を学ぶ上でも有用と考える。もちろん、テキスト（教科書）はそれほど面白いわけではない。なぜなら、著者が、初心者向けに基本的なことをなるべく広く、平易に書くよう努めているからである。ピアノだって、ずーっと『バイエル』を弾いていても楽しくない。もっとエレガントな曲を弾けた方が楽しい。だけど、『バイエル』を弾けなければ、ラフマニノフはおそらく（間違いなく）弾けない。

経営学も同じである。テキストの内容を理解してこそ、もっと面白い経営学の世界に入っていける。そこにはエキサイティングな文献がたくさん積みれ、その扉はいつでも開かれている。



伊藤 元重

『はじめての経済学 [上][下]』

- 日本経済新聞社 (2004年)
- 価格872円 (税込)

中野正裕

経済学とはどのような学問分野なのか、経済学では各種の社会問題をどのように考察するかを平易に解説した入門書です。本書では経済データや具体的な制度の例を豊富に扱っており、現実経済のイメージをつかむのに役立ちます。上巻ではマクロ・ミクロ分野の基本的な考え方、下巻は財政、金融、企業、労働、国際経済などの専門領域について、幅広く解説しています。経済学をもっと学習したいという動機付けを促す一冊だといえます。

岡田知之

上巻と下巻に分かれており、上巻は、マクロ経済学、ミクロ経済学、ゲーム理論といった基礎分野を重視した内容となっており、下巻では、公共経済学、金融、組織の経済学、国際経済学といった応用分野を重視した内容となっている。この本の特徴は、できるだけ直感的に経済学の考え方を身につけることが出来るように配慮されている点にある。技術的な説明は最低限にとどめ、具体例を挙げながら経済学の考え方が丁寧に説明されているため、初学者にも読みやすい構成の本である。

山森哲雄

日本経済に関する豊富な事例をもとに経済学の基本的な考え方について解説しています。あくまで「考え方」を学ぶという趣旨で書かれていますので、経済理論を学習するには適していませんが、経済理論と現実経済との関連について知るには大変いい本だと思います。経済学をこれから学ぶ学生にはぜひ一読してほしい一冊です。ミクロ・マクロ経済学、ゲーム理論、公共経済学、財政学、国際経済学といった経済学の主要な分野はすべて取り上げられていますので、どの分野を中心に学習を進めていくかを考えるうえでも参考になると思います。



大竹 文雄

『競争と公平感 ー市場経済の本当のメリットー』

- 中央公論新社 (2010年)
- 価格819円 (税込)

中野正裕

市場競争は、人々に経済的豊かさを得ようと努力するインセンティブ(誘因)を与える一方、人々の間に、生産性に応じた賃金など雇用条件の格差を生み出します。したがって、人々が望む公平性を担保するため、市場経済をどのような制度で補完すべきかが問題となります。本書は大学の講義で指定されるような、特定の経済分野を体系的に扱う教科書ではありませんが、市場競争と経済格差に関係するさまざまな話題に言及し、経済学の立場から分かりやすく解説した良書だといえます。

具体的に、わが国の労働環境や雇用政策の変化が経済格差に及ぼした影響、市場競争と経済格差の関係、男女間の賃金格差や昇進格差の動向、日本の小中学校における経済学教育の現状、教育や脳の仕組みと経済格差の関係、個人の幼少期の生育環境が成人後の消費や借入れ態度に及ぼす影響、文化や宗教と経済の関係といった幅広い分野の事例や研究成果が紹介されます。伝統的な経済学の考え方だけでなく、最新の応用分野に関する調査研究や、近年注目されてきた行動経済学のアプローチにも言及しています。

専門的に高度な内容にも触れていますが、初学者や一般の読者にも分かるよう平易な解説がなされ、格差をめぐる基礎情報の収集や論点整理に役立つと思います。なお、著者の専門は労働経済学で、詳細なデータに基づいて格差問題を丁寧に検証した『日本の不平等』(日本経済新聞社、2005年)を著したことで知られており、格差問題をより本格的に研究したい学生には、こちらもぜひ一読することを薦めます。



チャールズ・I. ジョーンズ
『経済成長理論入門』

- 日本経済新聞社 (1999年)
- 価格2,520円 (税込)

岡田知之

経済成長をもたらす原動力は、何であろうか。この問いに答えようとするものが内生的経済理論であり、この本では、内生的経済成長理論の考え方をふまえて、経済成長に関する現状と理論の説明が行われている。

通常、内生的経済成長理論を学ぶ為には、最適制御理論などの動的最適化 (現在から将来にわたり、最適な選択をすること) に関する知識が必要となる。この本では、そのような前提知識なしに、新技術や人的資本の蓄積が重要な役割を果たす内生的経済成長理論の考え方を身につけることができるように、工夫されている。もちろん、数式が全然出てこないわけではないし、数学が苦手な人にとっては、難解な部分も多いかもしれない。しかし、この本で使われている数学は、十分に努力すれば学部生でも理解できる可能性が高いレベルであると思われる。巻末の付録として数学の復習がついているので、数式がよく分からないときには、この付録が役にたつかも知れない。

また、単に理論の説明だけではなく、この本では、さまざまな国のデータに基づいた図を効果的に用いることにより、現状の説明が分かりやすく行われている。図で、現状を理解した上で、現状を説明する理論を (過度に技術的にならないように単純化して) 紹介するというかたちで本文が進められており、理解しやすい構成となるように配慮されている。

内生的成長理論に関する説明は複雑になるケースが多いが、この本は十分な工夫を施すことにより比較的単純な形で説明が行われている。「経済成長の原動力」に興味のある方は、一度、手に取ってみる価値があるように思う。



梶井 厚志 / 松井 彰彦
『ミクロ経済学
戦略的アプローチ』

- 日本評論社 (2000年)
- 価格2,415円 (税込)

山森哲雄

ミクロ経済学をゲーム理論の体系から捉えた斬新なスタイルの教科書です。本書では分析対象となる経済現象を複数の経済主体の間で発生する戦略的な関係、「ゲーム」として捉えることを基本としており、ミクロ経済学で扱うほとんどのトピックをゲーム理論の基本的な概念と分析手法によって解説しています。標準的な教科書との顕著な違いは何と言っても競争市場の取り上げ方でしょう。標準的なミクロ経済学の教科書では伝統的な市場理論を使って競争市場を分析します。一方、本書では、売り手と買い手の1対1の相対取引を「ゲーム」として表現することから競争市場の考察が始まります。2人の間に仲買人がいる場合などいくつかの取引形態を考察したのち、売り手と買い手が多数いる場合へと発展します。そして、伝統的な市場理論が予測する取引価格や取引数量は、そのような「ゲーム」の結果として成立することが示されるのです。つまり、市場理論をゲーム理論によって再構築していると言ってもいいでしょう。ゲーム理論が戦略的な相互依存関係を分析する包括的な理論体系であることを考えれば、ゲーム理論を中心とした本書のようなスタイルの方がミクロ経済学の教科書としてはむしろ自然なのかもしれません。

ある町のバン屋を取り巻く人々の (少しコミカルな) 物語からすべての章がはじまっているのも本書の特徴です。この物語を読むだけでもミクロ経済学が対象とするさまざまな問題を身近なものとして感じることができると思えます。数式は多く用いられていますが、経済学部1年生にも十分に理解できる内容です。初めてミクロ経済学に触れるという学生にはもちろん、ミクロ経済学を一通り学習した学生にもお勧めの一冊です。

総 評



左から 中野正裕准教授／岡田知之准教授／山森哲雄准教授

中野 正裕 この特集では、経済学の入門科目・基礎科目の講義で毎年指定されるスタンダードな理論書に比べて読みやすく、また、個々の経済問題やゲーム理論、経済成長論、労働経済学など応用分野への関心を高めてくれるいくつかの入門書を選定しています。たった1冊のテキストに頼ることが全ての学生諸君にとって賢明だとは思いません。数多くの出会いの中から、自分にfitしたテキストを見つけてほしいと思います。重要なことは、(i)幅広く様々なテキストを見渡し、自分の読みやすいと感じるものを選ぶこと、(ii)テキストにおける個々の章や節の目的、著者の意図を理解するよう心がけること、そして(iii)難解な箇所に出たら、他のテキストや文献ではどう説明されているか調べてみることで、(iii)については、教員だけでなく友人や先輩の助言が有益なこともあります。文献学習を通じて学ぶ楽しみを増やしてもらいたいと思います。

岡田 知之 人と人の間に相性があるのと同じように、人と本(文章)の間にも相性があるように思う。ある文章が自分にとって自然に感じられるものであっても、同じ文章を他の人が不自然なものと感じるケースがあるということは否定できない。また、説明方法の好みも人によって異なる場合がある。厳密で客観的な説明を好む人もいれば、(多少厳密さを犠牲にしても)直感的な説明を好む人もいる。人の好みは多様である為、すべてに人にとって(ベターなテキストは存在するかもしれないが、)ベストなテキストは存在しないのではないかと思う。一昔前とくらべ、近年では個性的な入門書の出版が増えているように思う。これは、自分にあったテキストを選びやすい環境が整いつつあることを示しているのではないだろうか。どのようなテキストを用いたとしても、学習を進める際には努力が必要となる。しかし、自分にあったテキストを見つけることができれば、よりスムーズに学習を進めることができるであろう。自分の目で、自分にあったテキストを見つけ出してほしい。

山森 哲雄 論理的な厳密さや分析の精確さを犠牲にしながら分かり易さや読み易さを追求した「お手軽」なテキストが近年ますます増えてきたように思います。「お手軽」なテキストは、数学を使わずに経済学の基本的な考え方を誰にでも分かるように紹介してくれます。経済学で使う数学が分からずに経済学そのものの興味を失ってしまう学生は多くいますから、このようなテキストが初学者の経済学離れを防ぐのに一役買っていることは間違いありません。しかし、これは経済学という学問を単なる情報として紹介しているに過ぎません。このような情報は知識にはなりえないことを学生は理解すべきです。せっかく経済学部に入學したのでから、「お手軽」なテキストで経済学の面白さが分かったら、少しずつ難しい専門書にチャレンジするようにしてください。他の参考書を調べたり自分で計算をしたりして数時間かけてようやく1ページの内容を理解することができる。ぜひそんな経験をしていただきたいと思います。このような訓練を地道に重ねることで、はじめて経済学を生きた知識として身につけることができるのです。

専任教員担当科目一覧

※変更となる可能性がありますので『シラバス』を確認して下さい。

経済学科			頁
あきとも 秋朝	あやえ 礼恵	社会保障原理／社会保障制度論／社会政策論Ⅱ	42
あもう 天羽	まさつぐ 正継	財政学Ⅰ・Ⅱ／市場と経済	46
いけの 池野	まさひろ 正晴	教育哲学／カリキュラム論／教育方法学／教育実習Ⅰ・Ⅱ／ 教職実践演習	47
いしい 石井	ひさこ 久子	労働経済学Ⅰ・Ⅱ／国際雇用論Ⅱ	48
いとう 伊藤	のぶひろ 宣広	学問研究入門／経済学方法論Ⅰ・Ⅱ	51
いりえ 入江	かずや 和弥	経済数学ⅠB・ⅡB／産業組織論ⅠA／応用ミクロ経済学ⅠA・ⅡA	-
おおいし 大石	めぐみ 恵	中国経済論Ⅰ・Ⅱ／アジア経済史Ⅱ／外書講読Ⅰ・Ⅱ（中）	53
おかだ 岡田	かずひこ 和彦	資本主義経済の理論Ⅰ・Ⅱ／経済システム論Ⅱ	56
おかだ 岡田	ともゆき 知之	経済変動論／公共経済学Ⅰ・Ⅱ	58
おかむら 岡村	あきこ 晃子	アカデミック イングリッシュⅠ・Ⅱ／ Practical EnglishⅠ・2／言語と社会／言語と文化	59
からさわ 唐澤	たつゆき 達之	経済史概論Ⅰ・Ⅱ／西洋経済史Ⅰ	61
こくぶんこういちろう 國分功一郎		倫理学／現代社会哲学／学問研究入門／哲学入門／哲学	62
こんの 今野	まさのぶ 昌信	金融論Ⅰ・Ⅱ／外書講読Ⅰ・Ⅱ（英語）／国際金融論Ⅰ	63
さとう 佐藤	あやの 綾野	計量経済学入門／計量経済学／マクロ経済統計Ⅱ	65
つちや 土谷	たけし 岳史	政治学／政治制度論／国際関係論／ヨーロッパ政治論／ 学問研究入門	75
とみざわ 富澤	かずひろ 一弘	日本近世経済史／日本近代経済史／日本近世農業史	76
なかじ 中路	たかし 敬	経済学史Ⅰ・Ⅱ／近代経済学ⅠA・ⅡA／現代経済思想Ⅰ・Ⅱ／ 外書講読Ⅰ・Ⅱ（英語）	-
なかの 中野	まさひろ 正裕	貨幣経済論／基礎マクロ経済学／応用マクロ経済学	79
なわ 名和	けんみ 賢美	社会学Ⅰ・Ⅱ／社会科学基礎論／社会思想史Ⅰ／学問研究入門	82
ふじい 藤井	たかむね 孝宗	国際経済学Ⅰ・Ⅱ／市場と経済	88
みやた 宮田	よういち 庸一	統計学／応用統計学／統計学概論	93
やの 矢野	しゅういち 修一	世界経済論Ⅰ・Ⅱ／アジア経済論	94
やまざき 山崎	かおり 薫里	微積分入門／微積分／線形代数入門／線形代数／ 経済経営のための数学	96
やまもと 山本	よしひろ 芳弘	市場と経済／環境経済学Ⅰ・Ⅱ	98
やまもり 山森	てつお 哲雄	基礎ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ／ゲーム理論	99

経営学科

頁

あ く つ ゆ か 阿久津由佳	Current English 3・4 / ビジネス・コミュニケーション・スキルズA・C / メディア英語に見るアメリカ社会と文化Ⅰ・Ⅱ	43
あ べ け い じ 阿部 圭司	企業財務論Ⅰ・Ⅱ / デリバティブ論	45
い し わ た り か な 石渡 華奈	外国語学習の理論と実践Ⅰ・Ⅱ / キャリア イングリッシュⅠ・Ⅱ / 英文法Ⅰ・Ⅱ	49
い の う え ま ゆ み 井上真由美	経営学総論 / 企業論 / コーポレート・ガバナンス	52
お お し ま と し ひ こ 大島登志彦	交通論Ⅱ / 世界地誌 / 日本地誌	54
お お む ら か ず ひ と 大村 和人	中国語 b1・b2・c1・c2 / 中国現代文化入門 / 日中文化比較	55
お が た し ょ う 尾形 祥	会社法Ⅰ・Ⅱ / 有価証券法	57
か と う けん た 加藤 健太	戦前期日本経営史 / 外国経営史 / 戦後日本経営史	60
さ さ き し げ る 佐々木 茂	商学総論Ⅰ / マーケティング	64
さ と う と し ひ さ 佐藤 敏久	消費者行動論 / マーケティング・コミュニケーション / マーケティング・リサーチ / 外書講読	66
し み ず 清水さゆり	国際ビジネス概論 / 国際経営論 / 多国籍企業論 / 貿易論 / 外書講読	67
す ず き あ つ し 鈴木 淳	生産管理Ⅰ・Ⅱ / 経営科学	69
せ き ね ま さ の り 関根 雅則	イノベーション論 / 経営戦略論 / 戦略的経営論	70
た か ま つ ま さ き 高松 正毅	日本語概説 / 文章表現Ⅰ・Ⅱ / 論文作法Ⅰ・Ⅱ	72
た な か ひ さ お 田中 久夫	会计学Ⅰ・Ⅱ / 税務会計	73
た に ぐ ち さ と し 谷口 聡	債権法総論 / 債権法各論 / 現代民法総論	74
ない と う 内藤まゆみ	教育心理学 / 教職実践演習 B / 心理学 / 教育測定および方法 / 学問研究入門	77
な が た し ゅ ん 永田 瞬	経営労務論 / 経営学史 / 人的資源管理 / 外書講読	78
な か む ら あ き よ し 中村 彰良	簿記論 C / 管理会計論	80
ひ さ む ね し ゅ う じ 久宗 周二	産業・組織心理学 / 人間関係論 / 労働安全衛生	85
ひ ら い ひ ゅ う き 平井 裕久	企業と会計 D / 原価計算論Ⅰ・Ⅱ	86
ふ じ も と て つ 藤本 哲	経営管理総論 / 経営組織概論 / 経営組織各論	89
み づ ぐ ち た け し 水口 剛	企業と会計 A・C / 環境会計	91
や ま も と よ し の り 山本 喜則	情報基礎 / 情報処理Ⅰ・Ⅱ / 外書講読	97